

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第125集

与島 B 地点 遺跡  
与島 C 地点 遺跡

2013

岐阜県文化財保護センター

よ しま ち てん 遺 跡  
与 島 地 点 遺 跡  
よ しま ち てん 遺 跡

2013

岐阜県文化財保護センター

## 序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。古くから高度な木工技術に基づいた木の文化を育むとともに、各地との盛んな交流により独特の文化圏を築き上げたことが知られています。その中心都市である高山市には、国史跡の堂之上遺跡（縄文時代）、赤保木瓦窯跡（奈良時代）、高山陣屋跡（江戸時代）をはじめとする、数多くの注目すべき遺跡があります。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道建設事業に伴い、高山市上切町にある与島B地点遺跡及び与島C地点遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、与島B地点遺跡において、古墳時代から古代にかけての人々の生活の跡が見つかりました。特に、溝から出土した古墳時代の櫛は、飛騨地域では初の確認例となり、とても貴重な発見となりました。また、与島C地点遺跡においては、古代を中心に古墳時代から近世までの遺物を発見しました。特に古代の遺構を検出し、仏具とみなすべき遺物を発見したことによって、三枝城跡発掘調査で検出した古代山林寺院の規模がより広範囲なものであった可能性が高いことを知ることができました。本書は、平成19年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、御理解と御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

岐阜県文化財保護センター  
所長 丸山 和彦

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町に所在する与島B地点遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-00466）及び与島C地点遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-10141）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、岐阜県文化財保護センター（平成 15 年 3 月までは財団法人岐阜県文化財保護センター、平成 15 年 4 月から平成 21 年 3 月までは財団法人岐阜県教育文化財団岐阜県文化財保護センター）が実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘調査は平成 19 年度に、整理作業は平成 23・24 年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第 1 章、第 2 章第 2 節、第 3 章第 2 節・第 3 節、第 4 章第 2 節・第 3 節、第 6 章は小瀬忠司が行い、それ以外は三島誠が行った。また、編集は小瀬と三島が行った。
- 6 発掘調査における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。平成 24 年度の整理作業における図版作成等の業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 花粉分析、プラント・オパール分析、須恵器付着物の成分分析、櫛木胎の材質同定および塗膜分析は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。木器類の樹種同定は株式会社エイ・テックに委託して行った。以上の成果は第 5 章に掲載した。編集は、株式会社パレオ・ラボと株式会社エイ・テックによる結果をもとに、三島が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
- 伊藤秀雄、岩田修、牛丸岳彦、押井正行、川添和暁、佐藤公保、長屋幸二、馬場伸一郎、久田正弘、藤根久、三好清超、山田昌久、高山市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用している。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2004『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 与島B地点遺跡の調査成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構	13
第3節 遺物	35
第4章 与島C地点遺跡の調査成果	45
第1節 基本層序	45
第2節 遺構	47
第3節 遺物	65
第5章 自然科学分析	91
第1節 与島B地点遺跡の花粉化石	91
第2節 与島B地点遺跡のプラント・オパール	95
第3節 与島B地点遺跡出土櫛木胎の材質同定および塗膜分析	97
第4節 与島C地点遺跡出土木器類の樹種同定	100
第5節 与島C地点遺跡出土須恵器の付着物分析	103
第6章 総括	107
参考文献	114
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 与島B地点遺跡・与島C地点遺跡の位置	1	第35図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(4)	54
第2図 調査前状況及び試掘坑の位置	2	第36図 与島C地点遺跡 ピット(1)	55
第3図 与島B地点遺跡のグリッド設定	4	第37図 与島C地点遺跡 ピット(2)	56
第4図 与島C地点遺跡のグリッド設定	5	第38図 与島C地点遺跡 ピット(3)	57
第5図 遺跡周辺の地質	7	第39図 与島C地点遺跡 土坑	58
第6図 周辺の遺跡分布	9	第40図 与島C地点遺跡 自然流路(1)	59
第7図 与島B地点遺跡 基本層序	12	第41図 与島C地点遺跡 自然流路(2)	60
第8図 与島B地点遺跡 発掘区全域図	16	第42図 与島C地点遺跡 自然流路(3)	61
第9図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(1)	17	第43図 与島C地点遺跡 自然流路(4)	62
第10図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(2)	18	第44図 与島C地点遺跡 自然流路(5)	63
第11図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(3)	19	第45図 与島C地点遺跡 自然流路(6)	64
第12図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(4)	20	第46図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物(1)	80
第13図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(5)	21	第47図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物(2)	81
第14図 与島B地点遺跡 ピット・土坑	22	第48図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物(3)	82
第15図 与島B地点遺跡 構(1)	23	第49図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物(4)	83
第16図 与島B地点遺跡 構(2)	24	第50図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物(5)	84
第17図 与島B地点遺跡 構(3)	25	第51図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物(6)	85
第18図 与島B地点遺跡 構(4)	26	第52図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(1)	85
第19図 与島B地点遺跡 構(5)	27	第53図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(2)	86
第20図 与島B地点遺跡 構(6)	28	第54図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(3)	87
第21図 与島B地点遺跡 構(7)	29	第55図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(4)	88
第22図 与島B地点遺跡 構(8)	30	第56図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(5)	89
第23図 与島B地点遺跡 構(9)	31	第57図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(6)	90
第24図 与島B地点遺跡 構(10)	32	第58図 花粉化石分布図	93
第25図 与島B地点遺跡 構(11)	33	第59図 プラント・オパール分布図	96
第26図 与島B地点遺跡 構(12)	34	第60図 瓦膜の赤外吸収スペクトル図	99
第27図 与島B地点遺跡 遺構内出土遺物(1)	42	第61図 須恵器付着の赤外吸収スペクトル図(1)	105
第28図 与島B地点遺跡 遺構内出土遺物(2)	43	第62図 須恵器付着の赤外吸収スペクトル図(2)	106
第29図 与島B地点遺跡 包含層出土遺物	44	第63図 周辺主要遺跡の立地	107
第30図 与島C地点遺跡 基本層序	46	第64図 野内遺跡A地区の古墳時代中期集落跡	108
第31図 与島C地点遺跡 発掘区全域図	50	第65図 野内遺跡各地区的古代の遺構	110
第32図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(1)	51	第66図 三枝城跡発掘区の山林寺院跡と与島C地点遺跡	
第33図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(2)	52		111
第34図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(3)	53		

## 表目次

第1表 調査体制	6	第13表 与島C地点遺跡 遺物観察表(1)	74
第2表 周辺の遺跡一覧	8	第14表 与島C地点遺跡 遺物観察表(2)	75
第3表 本書で用いる遺構記号	13	第15表 与島C地点遺跡 遺物観察表(3)	76
第4表 与島B地点遺跡 遺構一覧表	15	第16表 与島C地点遺跡 遺物観察表(4)	77
第5表 与島B地点遺跡 出土地点別遺物破片数一覧	39	第17表 与島C地点遺跡 遺物観察表(5)	78
第6表 与島B地点遺跡 遺物観察表(1)	40	第18表 与島C地点遺跡 遺物観察表(6)	79
第7表 与島B地点遺跡 遺物観察表(2)	41	第19表 産出花粉化石一覧表	94
第8表 与島C地点遺跡 遺構一覧表(1)	48	第20表 試料1g当たりのプランツ・オ・パール個数	95
第9表 与島C地点遺跡 遺構一覧表(2)	49	第21表 木胎材同定および塗膜分析を行った資料	97
第10表 与島C地点遺跡 出土地点別遺物破片数一覧表(1)	51	第22表 生漆の赤外吸収位置とその強度	98
	71	第23表 樹種同定結果	100
第11表 与島C地点遺跡 出土地点別遺物破片数一覧表(2)	72	第24表 器種別樹種一覧	100
		第25表 付着物分析を行った須恵器と付着物の特徴	103
第12表 与島C地点遺跡 出土地点別遺物破片数一覧表(3)	73	第26表 比較物質の赤外吸収位置とその強度	104

## 写真図版目次

図版1	S D b 1 南区南壁面上層（南東から）
与島B地点遺跡全景（北から）	S D b 2 完掘状況（南東から）
与島C地点遺跡全景（西から）	S D b 2 須恵器（19）出土状況（北西から）
図版2	S D b 2 須恵器（26～28）出土状況（北から）
与島B地点遺跡 全景（南から）	S D b 3 完掘状況（南東から）
与島B地点遺跡 全景（西が上）	S D b 4 完掘状況（南から）
図版3	図版5
与島B地点遺跡 北区全景（西が上）	与島C地点遺跡 全景（東から）
与島B地点遺跡 南区全景（西が上）	与島C地点遺跡 全景（南が上）
図版4	図版6
S D b 1 完掘状況（南から）	N R c 1 完掘状況（東から）
S D b 1 Gライン土層（南から）	N R c 1 (H11・H12区) 遺物出土状況（南東から）

NR c 1	土器（55・63・65・91）出土状況（南東から）	与島B地点遺跡出土遺物（2）
NR c 1	須恵器（92）出土状況（北から）	与島C地点遺跡出土遺物（1）
S P c 1	土層（南東から）	
S P c 2	土層（南東から）	図版 10
S P c 3・S P c 7・S K c 69	完掘状況（南東から）	与島C地点遺跡出土遺物（2）
S P c 4・S P c 5	完掘状況（東から）	図版 11
図版 7		与島C地点遺跡出土遺物（3）
S P c 4	土層（西から）	図版 12
S P c 5	土層（東から）	与島C地点遺跡出土遺物（4）
S P c 6	完掘状況（東から）	図版 13
S P c 7	柱根出土状況（南東から）	与島B遺跡の花粉化石
S P c 8	柱根出土状況（北から）	図版 14
S P c 9	土層（東から）	与島B遺跡のプラント・オパール
S P c 9	柱根出土状況（東から）	図版 15
S P c 20	完掘状況（南から）	与島C地点遺跡出土製品の光学顕微鏡写真
図版 8		図版 16
与島B地点遺跡出土遺物（1）		赤外分光分析を行った試料と付着物の拡大写真
図版 9		

## 挿入写真図版目次

写真 1 基本層序 1	.....	45
写真 2 基本層序 2	.....	45
写真 3 与島B地点遺跡出土結晶式堅拂と木筋組織の光学顕微鏡写真	.....	99

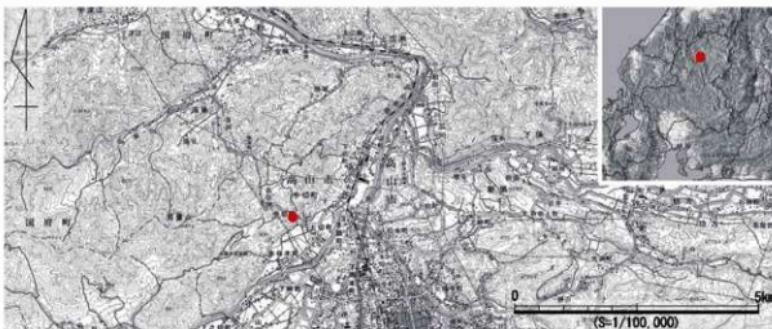
## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

与島B地点遺跡と与島C地点遺跡は、岐阜県の北部を占める飛騨地域の中心都市である高山市内にある、市街地の広がる高山盆地北西端に当たる高山市上切町に位置する（第1図）。

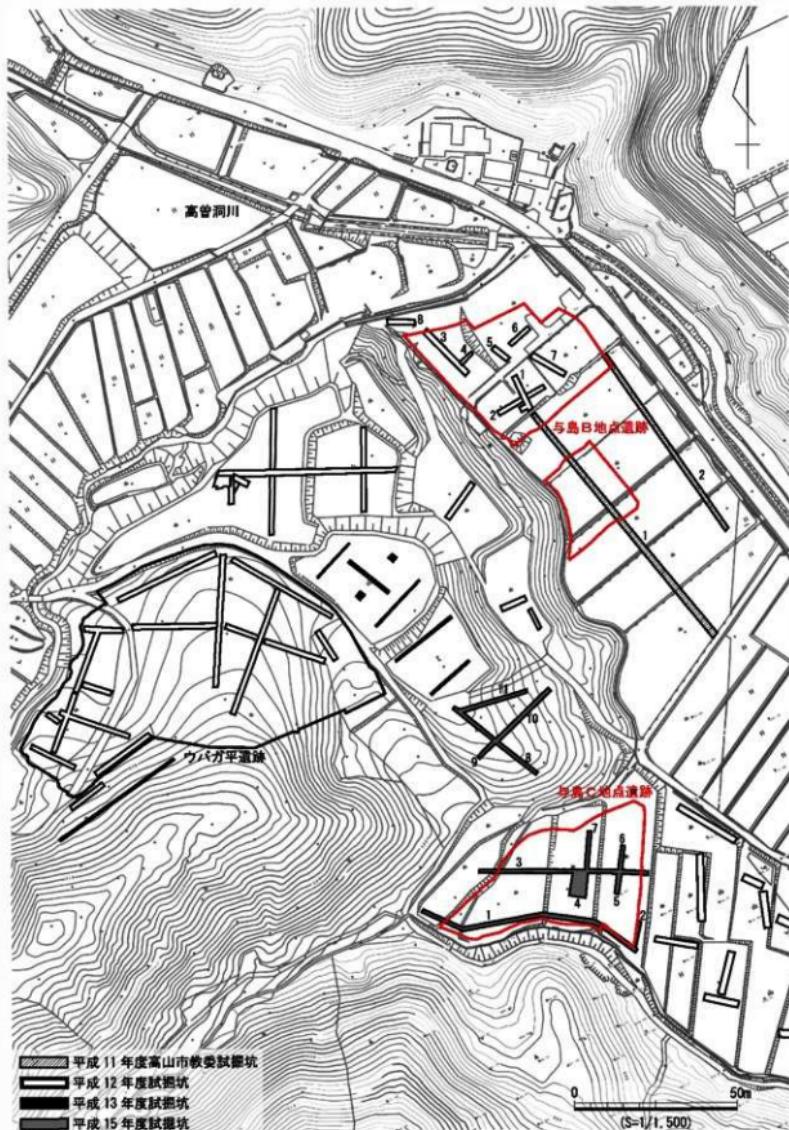
今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道の建設に伴い実施したものである。事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて照会を受けた岐阜県教育委員会では、高山市教育委員会と分担を定めた上で、順次、試掘・確認調査を実施し、発掘調査範囲を確定することとなった。周知の遺跡であった与島B地点遺跡については、まず高山市教育委員会が平成11年度に水田部分の試掘・確認調査を実施し、続いて12年度には、岐阜県から委託を受けた財団法人岐阜県文化財保護センター（現、岐阜県文化財保護センター）が宅地部分の試掘・確認調査を実施した。いずれにおいても遺構・遺物が確認され、各年度に開催された岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において、合わせて2,000m<sup>2</sup>の発掘調査が必要と判断されるに至った。さらに事業の進展に伴い、周知の遺跡の区域外について財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（現、岐阜県文化財保護センター）が平成15年度に試掘・確認調査を実施した結果、新たに遺跡を発見するに至り、平成15年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において、1,500m<sup>2</sup>の発掘調査が必要であると判断された。新発見遺跡は岐阜県教育委員会により「与島C地点遺跡」として登録された。

発掘調査は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが文化財保護法第92条に基づく埋蔵文化財発掘調査届出（与島B地点遺跡は平成19年3月19日付け財文保第8号の9、与島C地点遺跡は同日付け財文保第8号の8）を岐阜県教育委員会に提出し、岐阜県教育委員会から埋蔵文化財の発掘調査についての通知（平成19年3月23日付け社文第45号の10）を受けて実施した。本書で報告するのは、平成19年度に実施した与島B地点遺跡と与島C地点遺跡の発掘調査成果の記録である。



第1図 与島B地点遺跡・与島C地点遺跡の位置  
(国土地理院発行5万分の1地形図「飛騨古川」「三日町」「船津」「高山」)

## 2 第1章 調査の経緯



第2図 調査前状況及び試掘坑の位置

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

発掘調査は、平成19年度に与島C地点遺跡・与島B地点遺跡の順に実施した。両遺跡で調査方針は共通している。先行して近隣区域で実施していた野内遺跡・ウバガ平遺跡の調査方針を概ね踏襲しているが、遺跡の実情に合わせ修正を加えたため、異なる部分もある。

#### グリッドの設定

両遺跡とも発掘区に1辺5mのグリッドを設定した。西から東に算用数字、北から南にアルファベットを割り当て、グリッド名については、その組み合わせにより「E 3」「H11」のように呼称した。なお、両遺跡の発掘区は最短でも75m余り離れているため、グリッド数字・記号を連続させてはいない。座標はいずれも国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を用いた。

#### 表土掘削

表土掘削は、バックホウによる重機掘削により実施した。

#### 包含層掘削・遺構検出・遺構掘削

遺物包含層（以下、適宜「包含層」と略称）の掘削、及び遺構検出・遺構掘削は、ジョレン・草削りなどを用いてすべて人力で行った。遺構掘削では、遺物の出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。さらに、必要に応じて遺構断ち割り調査を実施した。

検出した遺構には、検出順に通番の登録番号を与えた。本書では遺構種別ごとに整理し直した番号に付け替えているが、現場における登録番号も「遺構一覧表」（15頁、48～49頁）に併記しておいた。

#### 遺構平面図・断面図実測

遺構平面図の作成は、三次元測量・図化システムにより行ったが、断面図は手測りにより実施した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じてふさわしい縮尺を選択した。

#### 写真撮影

記録写真は、一眼レフ35mmカメラ（リバーサル、モノクロ）、中判カメラ（リバーサル、モノクロ）、デジタルカメラで撮影した。遺跡景観写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

#### 整理作業

出土遺物の一次整理作業（洗浄から注記まで）については、現場作業と併行して平成19年度に実施した。二次整理作業から報告書作成までについては、当センター飛騨駐在事務所（高山市国府町名張字峰1425-1）において、平成23・24年度に行った。

### 2 調査経緯

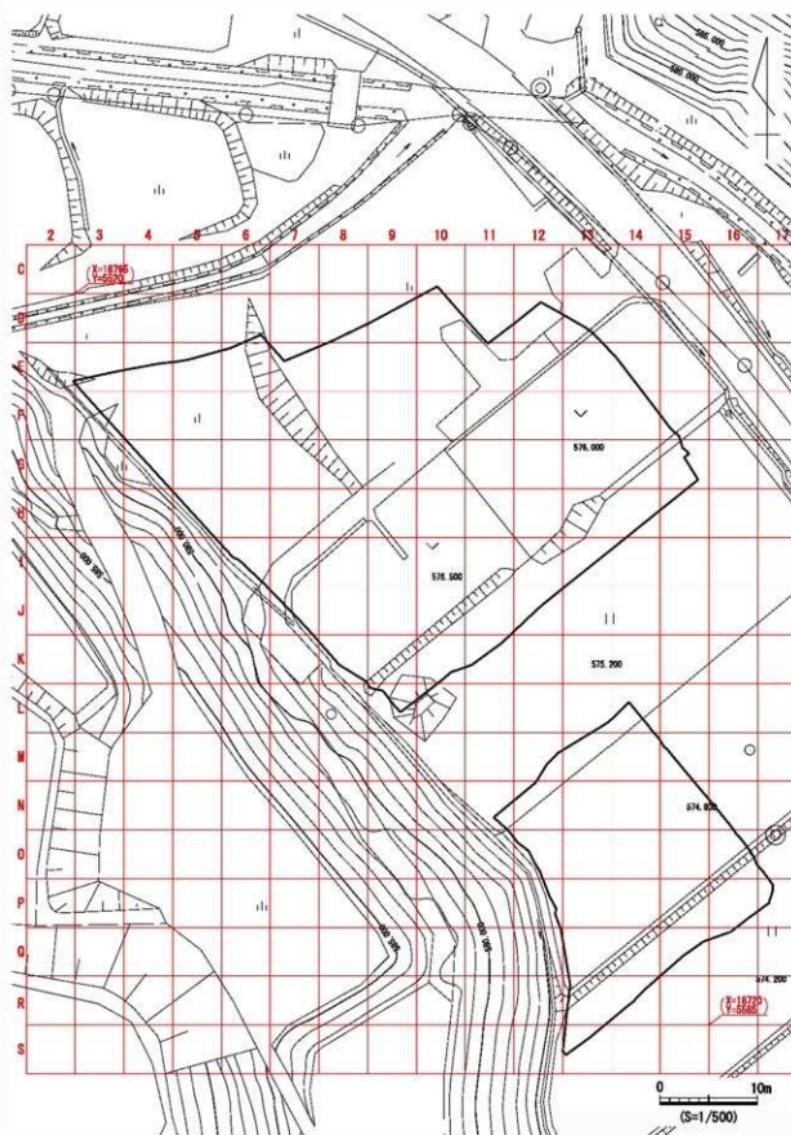
先にも記したように、両遺跡の発掘調査は平成19年度に実施した。与島C地点遺跡の調査から始め、完了後、直ちに与島B地点遺跡の調査に着手した。現地での調査経過は以下のとおりである。

#### （1）与島C地点遺跡

4/16（月）発掘区内の碎石除去作業開始。

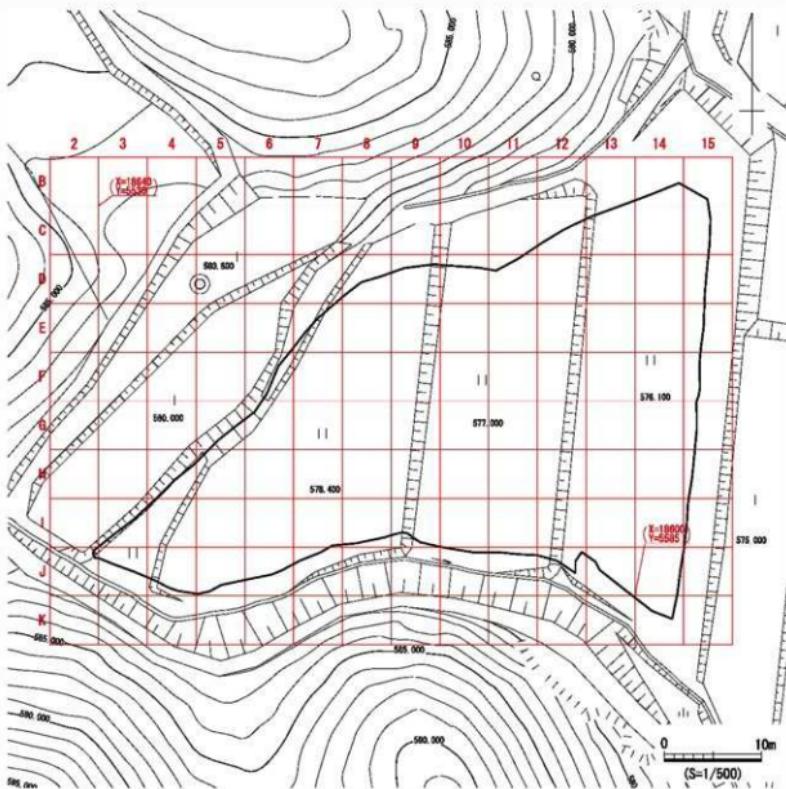
4/23（月）表土掘削開始。

#### 4 第1章 調査の経緯



第3図 与島B地点遺跡のグリッド設定

- 5/7（月）作業員による人力掘削作業開始。
- 5/15（火）出土遺物の一次整理作業（洗浄から注記まで）開始。
- 6/4（月）作業員を対象に熱中症対策講習会を実施。
- 6/19（火）県教育委員会社会教育文化課による発掘調査完了検査。
- 6/21（木）景観写真撮影を実施。
- 6/26（火）指導調査員八賀晋氏（三重大学名誉教授）による現地指導。
- 6/27（水）作業員作業完了。
- 7/11（水）国土交通省への発掘現場引き渡し。



第4図 与島C地点遺跡のグリッド設定

## 6 第1章 調査の経緯

### (2) 与島B地点遺跡

- 6/28（木）作業員による人力掘削作業開始。  
9/3（月）大石崇史氏・岩田崇氏（高山市教育委員会文化財課）来訪。  
9/7（金）指導調査員八賀晋氏（三重大学名誉教授）による現地指導。  
9/29（土）現地説明会を実施。  
10/2（火）指導調査員八賀晋氏（三重大学名誉教授）による現地指導。  
10/23（火）景観写真撮影を実施。  
10/30（火）県教育委員会社会教育文化課による発掘調査完了検査。  
10/31（水）作業員作業完了。  
11/12（月）国土交通省への発掘現場引き渡し。

### 3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は、第1表のとおりである。平成20年度まで財団法人岐阜県教育文化財団岐阜県文化財保護センターとして業務を実施していたが、平成21年4月に県教育機関として岐阜県文化財保護センターが設立された。整理作業は当センター飛騨駐在事務所（高山市国府町名張字岐峰1425-1）において実施した。

第1表 調査体制

職名	平成19年度	平成23年度	平成24年度
理事長(H20まで)	—	—	—
副理事長(H20まで)	伊藤克己 岩田重信	—	—
センター所長(H20まで常務理事兼センター長)	田口久之	高橋照美	丸山和彦
総務課長(H20まで経営課長)	加藤美好	村瀬誠三	村瀬誠三
調査課長(H20まで調査部長)	北村厚史	小谷和彦	小谷和彦
飛騨調査担当チーフ(H20まで飛騨出張所長)	谷口陽一	野々田光則	—
飛騨調査担当係長(H23まで飛騨調査担当チーフ)	—	—	野々田光則
発掘調査担当職員	相馬重典	—	—
整理担当職員	—	小瀬忠司	三島誠
整理作業員	—	垣添教子 濑戸幸子 畠中由依 脇澤純子	—

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

与島B地点遺跡・与島C地点遺跡は、高山盆地の北西端付近に位置し、見量山（997m）から東に連なる丘陵の緩斜面に立地する。この丘陵の南側には川上川が北東に流れ、沖積地を作る。丘陵の東側には高僧洞川が狭い氾濫原をつくる。両遺跡は、この高僧洞川の右岸に位置する。

遺跡の西に位置する見量山の南麓には、ほぼ北東一南西方向に牧ヶ洞断層が延びる。この断層は、飛騨市国府町から高山市荘川町にかけて延びる国府断層帶の一つで、三枝山（825m）の北側に延びる三尾断層、松倉山の北側にある原山断層とほぼ平行な関係にある。遺跡周辺は、これららの断層の影響によると考えられる、凹地や地形的な高まり、河川流路の屈曲など特徴的な地形が認められる。

川上川の対岸に位置する松倉山付近に走る原山断層の北側は、断層崖の崩落により角礫を主体とした原山礫層が堆積し、緩斜面を形成する。牧ヶ洞断層の北側は、断層に平行するように直線状の谷が走り、細長い半島状の丘陵を形成する。牧ヶ洞断層の南側は、丘陵が崩壊してできた崖錐・崩積性堆積物により斜面地を形成する。また、この断層に直交する高僧洞川は、直線的な奥行きの深い洞となる。この川の右岸に位置する与島B地点遺跡は、南西側が丘陵地と平地の境界となるが、直線的な急崖になり、崩落土砂による崖錐もみられる。与島C地点遺跡は丘陵が浸食され、谷状となった部分に位置している。

第5図に遺跡周辺の地質概要を示した。地質学的には、三枝山をつくる地層は疊岩・砂岩・凝灰岩・石灰岩・粘板岩・結晶変岩等からなる、飛騨外縁帯の一部をなしている。一方、与島B地点遺跡・与島C地点遺跡の立地する見量山山系の山々の基盤は、濃飛流紋岩から形成される。そのため遺跡内で見られる自然堆積層の多くは、基盤層である濃飛流紋岩に由来する褐色系の色調を基本とする砂質シルト層である。しかしながら、崩積性堆積物・崖錐堆積物の下などに、河川由来とみられる粘質土や微細砂をラミナ状に含む細砂及び粘土層が認められることから小規模な崩落と氾濫を繰り返しながら斜面地を形成したと推定される。



第5図 遺跡周辺の地質  
(上枝町史編纂委員会 2000『上枝村史』を一部改変)

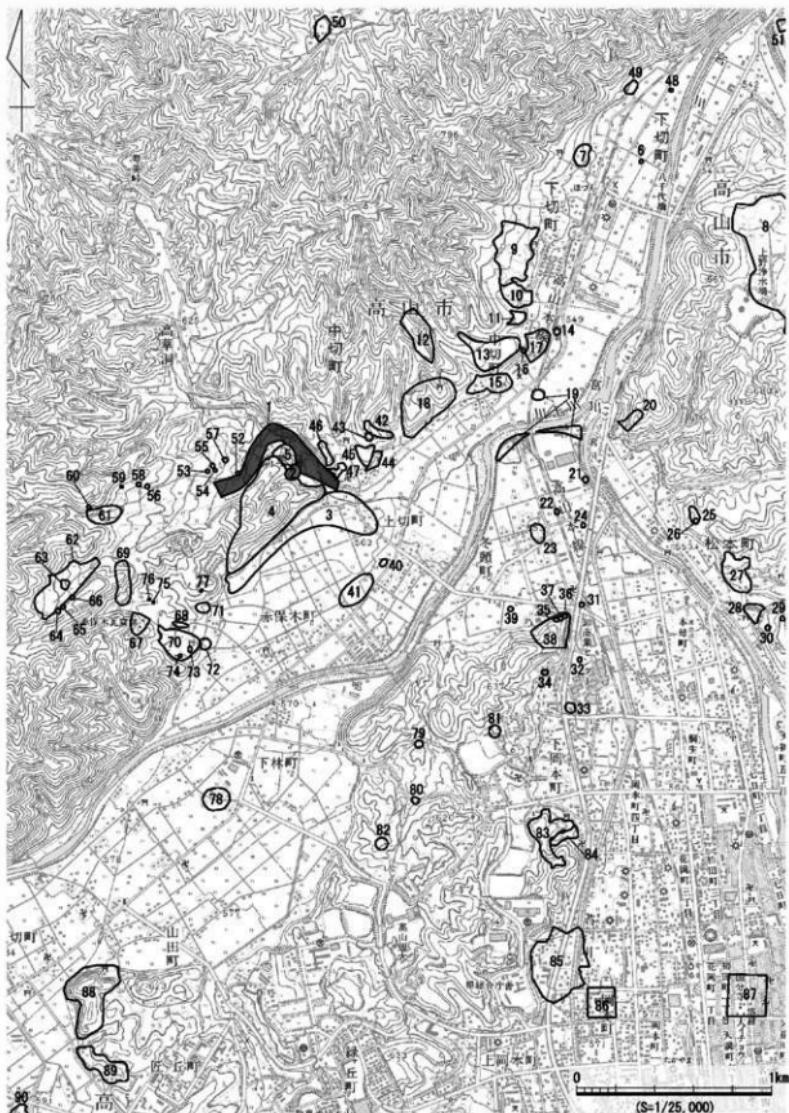
## 第2節 歴史的環境

野内遺跡周辺には、川上川左岸の山麓を中心に多数の遺跡が分布している（第6図）<sup>11)</sup>。当遺跡と関わりの深い古墳時代から古代の遺跡のうち、調査内容が報告されているものを中心概観する。

飛騨地域においては、古墳時代の遺跡の報告例が多い。集落跡は、赤保木遺跡（70）では前期の住居跡4軒、中期の住居跡1軒、後期前半の住居跡1軒を検出した<sup>12)</sup>。ウバガ平遺跡（5）では、前期末頃と後期の住居跡を検出した<sup>13)</sup>。野内遺跡（3）東端のA地区では中期を中心とした大規模な集落跡を確認し<sup>14)</sup>、中央のB地区でも初頭から終末期にかけての断続的な居住の痕跡を確認した<sup>15)</sup>。B地区と隣接するC地区でも古墳時代の住居跡1軒を検出した。古墳では、まず中期に属するものとして冬頭王塚古墳<sup>16)</sup>（31）、赤保木ぼた上5号古墳<sup>17)</sup>（41）、中切王塚古墳<sup>18)</sup>（14）、冬頭山崎2号古墳<sup>19)</sup>（36）がある。高山盆地所在の古墳のうち中期に遡るのはこれら4基のみであるが、いずれも当遺跡から1.5km以内に位置している。後期の古墳群は、ウバガ平<sup>20)</sup>1～4号古墳（5）、中切上野古墳群（13）、寺尾古墳群（42）、寺島古墳群（52～57）、下やせ尾1・2号古墳（75・76）など、当遺跡周辺の川上川左岸一帯に集中する<sup>21)</sup>。このほかに野内遺跡C地区では古墳時代前期の水田跡を確認している<sup>22)</sup>。

第2表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	牛島丘陵点遺跡	散布地	新石器	45	川嶋遺跡	散布地	绳文、古墳、奈良
2	牛島丘陵点遺跡	散布地	古代	46	綱附寺墓入地点遺跡	散布地	绳文
3	野内遺跡	集落跡	縄文～中世	47	綱附寺墓入地点遺跡	散布地	奈良、平安
4	二枝城跡	城跡	中世	48	のじ城跡	散布地	古代
5	ウバガ平遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代	49	高麗窯今郷	今社跡	绳文、室町
6	ウバガ平1～4号古墳	古墳	古墳	50	綱附寺遺跡	散布地	绳文
7	下切古墳	古墳	古墳	51	三川原古墳群	散布地	绳文
8	下切王塚遺跡	散布地	古墳	52	与島1号古墳	古墳	古墳
9	赤木1号古墳	散布地	縄文	53	与島2号古墳	古墳	近世後
10	下切遺跡	散布地	縄文、弥生	54	与島3号古墳	古墳	古墳
11	宮原丘陵点遺跡	散布地	縄文、弥生	55	与島4号古墳	古墳	古墳
12	中切城跡	城跡	中世	56	与島5号古墳	古墳	古墳
13	中切王塚遺跡	散布地	縄文、奈良	57	与島6号古墳	古墳	古墳
14	中切上野古墳群	古墳	古墳	58	上しまさ野古墳跡	平成遺跡	平安
15	中切三枝古墳	古墳	古墳	59	上しまさ野古墳跡	平成遺跡	平安
16	中切遺跡	古墳	縄文、弥生、奈良	60	上しまさ野古墳跡	平成遺跡	平安
17	日吉原(御浜き)古窯跡	生産遺跡	古墳	61	与島八号古墳跡	散布地	绳文
18	中切御浜跡	城跡	中世	62	上切平野古墳群	古墳	古墳
19	四十三石磨寺	寺社跡	弥生、古代	63	平野遺跡	散布地	绳文
20	元鳥古墳	古墳	古墳	64	宮原1号古窯跡	平成遺跡	奈良
21	元鳥古墳	古墳	古墳	65	宮原2号古窯跡	平成遺跡	平安
22	上ヶ原古墳	古墳	古墳	66	宮原3号古窯跡	平成遺跡	平安
23	東木大古墳	古墳	古墳	67	赤保木1～6号古窯跡	平成遺跡	奈良、平安
24	佐伯御浜跡	散布地	縄文、弥生	68	赤保木7号古窯跡	平成遺跡	奈良
25	波久田古墳	古墳	古墳	69	赤保木8～13号古窯跡	平成遺跡	奈良、平安
26	前平山遺跡	散布地	縄文、弥生	70	赤保木遺跡	赤保木、江戸	奈良
27	前平古墳	古墳	古墳	71	赤保木山古墳遺跡	散布地	赤保木、江戸
28	前平古墳	古墳	古墳	72	成川五郎の墓	墓地	平安
29	前平御浜跡	散布地	縄文	73	ミヨガ原1号古墳	古墳	古墳
30	残ヶ原古墳	古墳	古墳	74	ミヨガ原2号古墳	古墳	古墳
31	高須王塚古墳	古墳	古墳	75	下やせ尾1号古墳	古墳	古墳
32	下岡木古墳	散布地	縄文、奈良、平安	76	下やせ尾2号古墳	古墳	古墳
33	下岡木(馬木)遺跡	散布地	縄文、弥生	77	高須御堀鬼谷山古墳	古墳	古墳
34	後岡木古墳群	散布地	縄文、弥生、平安	78	下林遺跡	散布地	弥生
35	後岡山遺跡1号古墳	古墳	古墳	79	竹ヶ岡山古墳遺跡	散布地	奈良、平安
36	後岡山遺跡2号古墳	古墳	古墳	80	竹ヶ岡山古墳遺跡	散布地	奈良、平安
37	後岡山遺跡3号古墳	古墳	古墳	81	中山古墳跡	生産遺跡	平安
38	後岡山遺跡	城跡	古墳	82	中山高丘古墳	集落跡	縄文
39	人頭山古墳	古墳	古墳	83	中切城跡	城跡	平安
40	ばた古墳	集落跡	奈良	84	下岡木本神田遺跡	散布地	平安
41	赤保木ぼた上1～7号古墳	古墳	古墳	85	赤保木遺跡	散布地	平安
42	赤保木古墳群	古墳	古墳	86	鶴新園分毛古墳跡	今社跡	古代
43	中切今原6号古墳	古墳	古墳	87	鶴新園分毛古墳跡	今社跡	古代
44	上切(保木)遺跡	散布地	平安	88	山田城跡	城跡	平安
45	打越遺跡	散布地	奈良	89	乳洞遺跡	散布地	高文、奈生
46	打越遺跡	散布地	奈良	90	打越遺跡	散布地	高文、奈生



第6図 周辺の遺跡分布

(国土地理院発行2万5千分の1地形図「飛驒古川」「三日町」「町方」「高山」をもとに作成)

古代の遺跡も多い。発掘調査の行われた遺跡としては、赤保木1～6号古窯跡（67）がよく知られている。昭和48年度に市教育委員会によって実施された発掘調査により、1～4号古窯が飛騨国分寺の瓦を焼成した瓦窯と判明した<sup>67)</sup>。当遺跡の周辺には、よしま1～3号古窯跡（58～60）、赤保木8号古窯跡（69）など、灰釉陶器窯跡も分布する。古窯跡以外では、ウバガ平遺跡（5）において、平安時代頃の土器焼成坑とみられる遺構2基を確認している。また、三枝城跡<sup>68)</sup>（4）で確認された平安時代頃の山林寺院跡とみられる平場群は、当地域では稀な事例として特筆される。野内遺跡B地区では、平安時代前半の住居跡と鍛冶工房跡を多数確認したほか、墨書き器・砚・腰帶具・緑釉陶器といった公的施設に関わる遺物が出土した。平安時代の当地域における開発の様相を検証し得る貴重な事例である。野内遺跡C地区・D地区では奈良時代から平安時代にかけての水田跡を検出している。

遺跡の北方には北西方向に延びる寿美峠越えの街道（通称「瓜巣街道」）が存在し、これが高山盆地と国府・古川盆地とを結ぶ最短ルートとして古くから使われたことは、与島遺跡とその周辺地域の置かれた環境の中でも特に強調すべき特性である。遺跡周辺には野内遺跡をはじめ、大規模な遺跡が密集する様相を呈するのは、そうした俯瞰的視野で見た場合の立地の好条件が有利に作用した結果とみることができる。

## 第2章 第2節 注

- 1) 第2表及び第6図は、岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』をもとに作成した。ただし、公刊後に明らかとなつた情報を盛り込むための改訂を加えている。
- 2) 赤保木遺跡の平成3年度調査については高山市教育委員会1993『前平山棟遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』、平成16年度調査については財団法人岐阜県教育文化財保護センター2007『赤保木遺跡』に詳しい。
- 3) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』。
- 4) 岐阜県文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』。
- 5) 岐阜県文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』。
- 6) 高山市教育委員会1971『冬頭王塚発掘調査報告』。
- 7) 高山市教育委員会1995『高山市埋蔵文化財調査報告書第22号 高山市内遺跡発掘調査報告書』。
- 8) 田中彰 2001『飛騨地域の古墳』八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社。
- 9) 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴』。
- 10) 飛騨地方の古墳分布状況については、以下の文献に記述がある。
  - ①上嶋善治 2004『古代の飛騨における古墳と集落に関する一考察』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集 三星出版
  - ②田中彰 2001『飛騨地域の古墳』八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社
- 11) 高山市教育委員会1995『高山市埋蔵文化財調査報告書第22号 高山市内遺跡発掘調査報告書』。
- 12) 高山市教育委員会1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告』。
- 13) 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』。

## 第3章 与島B地点遺跡の調査成果

### 第1節 基本層序

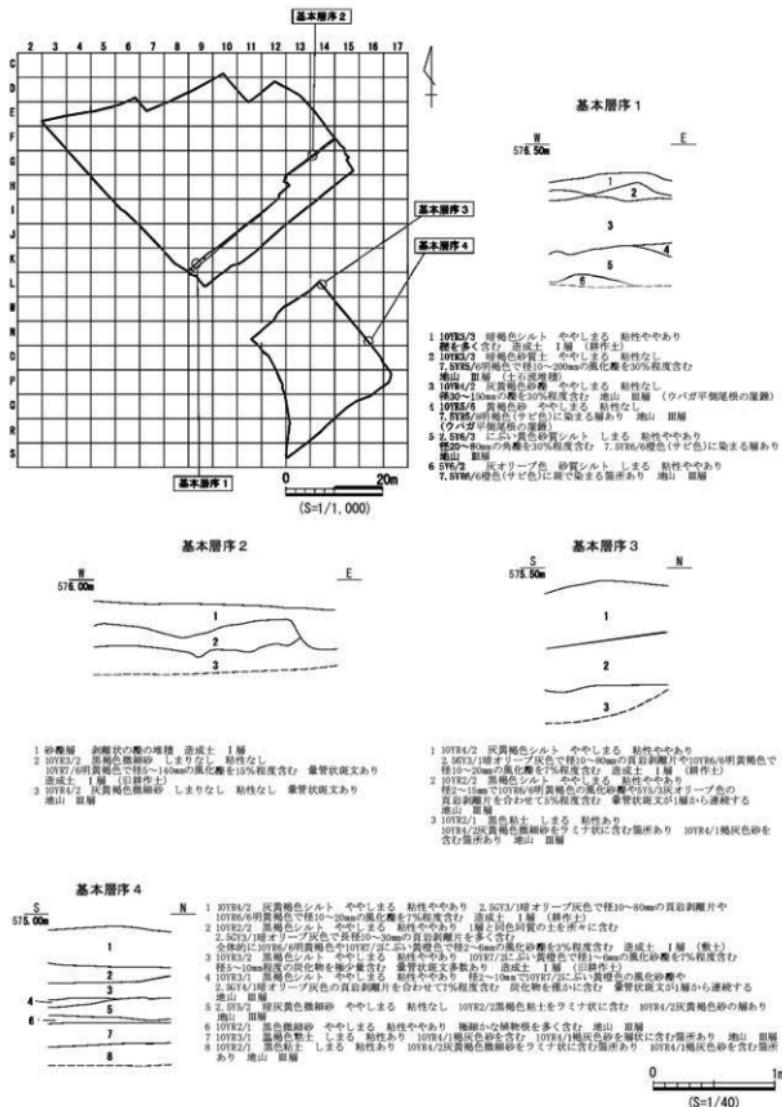
調査前の与島B地点遺跡発掘区は、調査区の北半が宅地・畠地、調査区の南半が水田であった。調査区の北半は南半よりも一段高い位置にあり、特に山際の北側部分は、標高値が約578mと高くなっている。この部分は、ほぼ平坦な土地であることから、山側の斜面地を削平し、平坦面を作り出したことが想定できる。しかしながら、試掘・確認調査（第2図）の結果では、試掘坑3において地表面から15cm程掘り下げた段階で包含層（II層）を確認している。また、試掘坑4においては地表面から60cm程掘り下げた段階で包含層を確認している。包含層の層厚も20cm前後であることから、さほど削平を受けずに盛土造成がされた可能性が高いと言える。北半の北西側は、試掘・確認調査（第2図）の結果で、試掘坑5において地表面から20cm程掘り下げた段階、試掘坑6においても地表面から30cm程掘り下げた段階で包含層を確認している。このことから、北西側においても、さほど削平を受けずに盛土造成がされたと思われる。一方、北半の南側は、試掘・確認調査の試掘坑1・2・7及び基本層序1（第7図）において包含層の層厚が薄いか、認められない部分があり、安定した状態で確認できていない。このため、包含層（II層）及び地山（III層）は部分的に削平されていると思われる。

調査区の北半ではIII層上面を遺構検出面として調査をした。発掘調査による遺構検出面から推定する旧地形（第8図）では、北西から南西に向かって傾斜する。最下層の地山層（III層）は周辺のウバガ平遺跡・野内遺跡・三枝城跡などと同じく、濃飛流紋岩の岩盤が風化してできた砂質シルト層を基本としている。高曾洞川から供給される径10mm～200mmの風化礫を含む土石流堆積物（基本層序1～2層）やウバガ平側尾根から供給される径30mm～150mmの角礫を含む崖錐性堆積物（基本層序1～3層・4層）により、傾斜地となつたと推測できる。調査区の北半は耕地及び宅地による段切り造成によって、部分的に盛土と削平が行われ、比高差をもつ平坦地となつたと思われる。

調査区の南半は標高値が約574.8mで北半より低い位置になる。表土層であるI層は、耕作土・敷土・造成土・旧耕作土からなる。遺物包含層であるII層は、水田耕作により攪拌を受けており、層序が安定しているとは言い難い。

調査区の南半ではIII層上面を遺構検出面として調査をした。発掘調査による遺構検出面から推定する旧地形（第8図）では、調査区北半と同様に、北西から南西に向かって傾斜する。最下層（III層）は北半と同じく、濃飛流紋岩の岩盤が風化してできた砂質シルト層のものを基本とする。山際の南側はウバガ平側尾根から供給される崖錐性堆積物が間層として堆積しているが、基本層序3の3層、基本層序4の5・8層のように粘質土や微細砂をラミナ状に含む細砂及び粘土層であることから、比較的緩やかな水の流れか、沼地や湿地のような静水状態で堆積した可能性がある。

なお、今回の調査では、各遺構の断面実測時などに、適宜、地山（III層）を断ち割り、土層の堆積状況を確認しているので、本書でも分層線及び土層注記をそのまま掲載した。



第7図 与島B地点遺跡 基本層序

## 第2節 遺構

与島B地点遺跡で検出した遺構は、ピット（S P）3基、土坑（S K）8基、溝（S D）4基、自然流路（N R）1基、合わせて16基である<sup>11)</sup>。当遺跡の遺構については、ともに本書で報告する与島C地点遺跡との混同を避けるため、遺構記号に与島B地点遺跡所属であることを示す「b」を加えた。例えば与島B地点遺跡1号土坑であれば「S K b 1」のように表示している。

### 1 ピット（第14図）

検出した柱穴の可能性がある小型の穴は1組3基のみである。S P b 1・2・3は発掘区南東端付近の16Pグリッドに位置する。1.2m間隔で一直線に並ぶ。3基とも長軸長が30cm前後と小さく、深さもごく浅い。いずれからも遺物は出土していない。

### 2 土坑（第14図）

柱穴以外の穴は8基検出した。いずれの土坑からも遺物は出土しておらず、帰属時期・性格等は不明である。

### 3 溝（第15図～第26図、出土遺物：第27図・第28図）

溝は4基検出した。本来の機能や性格等については明らかとならないものの、特にS D b 1では多数の土師器・須恵器と古墳時代の櫛が出土しており、当遺跡の検出遺構の中では注目に値する。

#### S D b 1

発掘区北西部の6Hグリッドから南端付近13Sグリッドにかけて広がる大型の溝である。中央部に発掘区外の未検出部分を含むものの、残存長は57.00mを測り、発掘区外へさらに延びる。溝南半の東側には人為的な盛土が認められる（第17図～第22図）。

出土遺物破片数は、土師器474点、須恵器86点、灰釉陶器3点、木器類31点、植物遺存体13点、合わせて607点を数え、当遺跡の遺構としては群を抜いて遺物数の多い遺構である。出土した土師器の多くは胎土精良な薄手の破片であり、それらの大半は1～11のような碗状壺部と低い脚部からなる高壺である。出土土師器の大半は古墳時代中期、須恵器の大半は古代に属すると判断され、帰属時期の観点からは、出土遺物は大きく2群に分けることができる。木器類では、下層から古墳時代の櫛(22)が出土したことが特筆される。出土遺物の詳細については、本章第3節及び第5章を参照されたい。

#### S D b 2

長さ14.30mを測る比較的小型の溝である。検出区域はS D b 1内に収まり、重複関係から判断し

第3表 本書で用いる遺構記号

遺構種別	記号	摘要
溝	S D	細長い平面形の獲みで、人為的な掘削や構築を想定できるもの。
土坑	S K	人為的に掘削された穴全般。ただし、柱穴・杭穴の可能性のあるものなどを除く。
ピット	S P	建物・柱列の柱穴、櫛の杭穴などの可能性のある穴。
自然流路	N R	細長い平面形の獲みで、流水の痕跡が認められ、人為的な制御が認められないもの。

てSD b 1より新しいことは明らかである。出土遺物破片数は、土師器55点、須恵器49点、植物遺存体1点、合わせて105点を数え、当遺跡ではSD b 1に次いで多い。ただし、出土土器類の組成等にSD b 1出土品と間に差異が認められることと、須恵器は上層ではなく下層に集中するという不整合がみられることから、それらの中には、本来はSD b 1に属していたものが多数混在するものと判断される。

#### SD b 3

発掘区北半の6Gグリッドから11Kグリッドにかけて広がる。さらに南方に広がることは明らかで、次に述べるSD b 4と当遺構とは、本来は一体の構であった可能性がある。残存長31.50mを測る大型の構はあるが、出土遺物破片数は土師器3点にすぎない。

#### SD b 4

発掘区南半の13Lグリッドから17Pグリッドにかけて広がる。ただし、先にも記したとおり、SD b 3に接続する可能性がある。残存長25.25mを測り、さらに発掘区外へ延びる。SD b 3同様、出土遺物破片数は少なく、植物遺存体34点を除けば、土師器15点、木器類1点が出土したにすぎない。

遺構の構造に特異な点が認められる。便宜的ではあるが、上から順に「上層」、「中層」、「盛土」、「下層」と呼び分ける<sup>2)</sup>。まず、ごく薄い「上層」（第26図上図の4～6層）では、上面に足跡の残る薄い層が認められる（第23図・第26図）。その下の「中層」（第26図上図の7層）は溝埋土であるが、両側に盛土（第26図上図の8・9層、下図の5～7層）を伴う（第24図・第26図）。さらにその下の「下層」（第26図上図の12層、下図の10～17層）は、より古い段階の溝埋土である（第25図・第26図）。なお、足跡の残る「上層」が水田、「盛土」が畦畔となる可能性が考えられたが、SD b 4埋土を対象とした花粉分析とプラント・オパール分析の結果からは、稲作の微証は認め難いと言わざるを得ない。

#### 4 自然流路（第23図～第26図）

NR b 1は発掘区南東端付近の15N・16N・16O・17Oグリッドで検出した。検出部分の長さは11.95mを測るが、発掘区外へさらに延びるとみられる。遺物は出土していないものの、重複関係からSD b 4より新しいことが判明している。

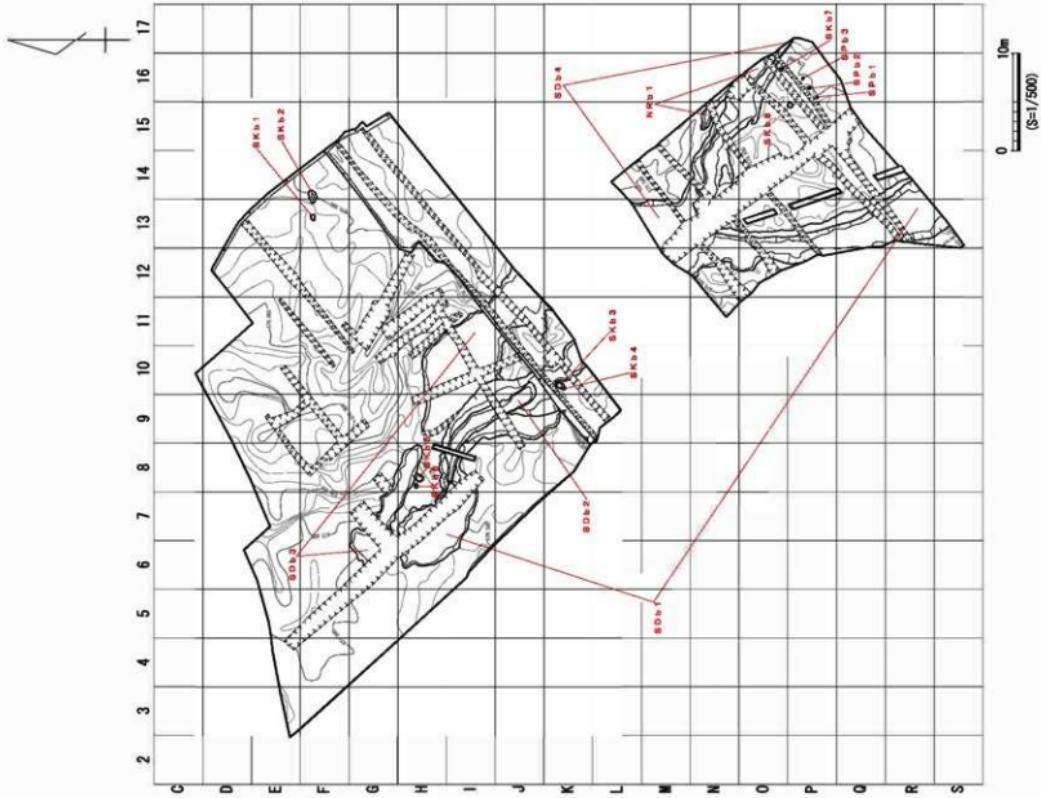
#### 第3章 第2節 注

1) 遺構の分類と記号については、平成22年に文化庁が提示した新標準に従った。文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査のてびき』の「一集落遺跡発掘編」242頁を参照のこと。

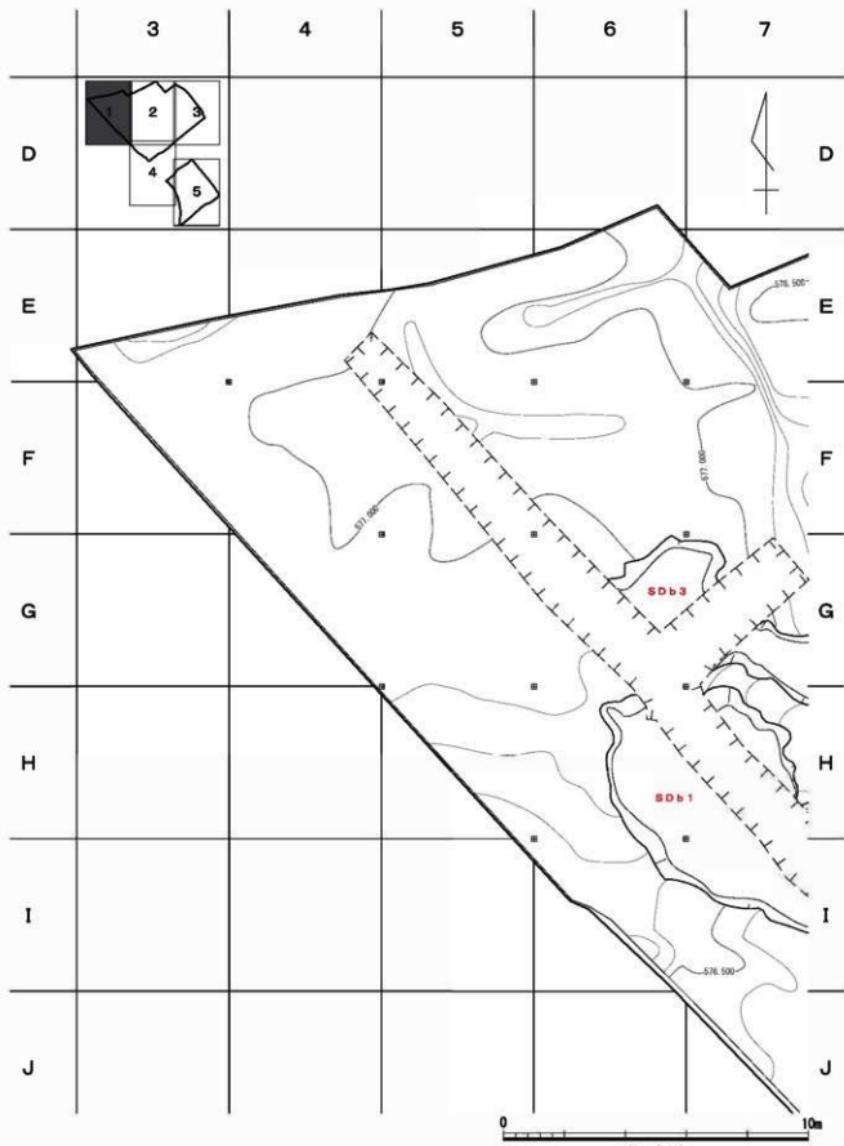
2) 発掘調査時にはSD b 4を4つの別遺構と捉え、「上層」=37、「中層」=38、「盛土」=39、「下層」=41の登録番号を与えている。本書では1つの遺構に統合して報告したが、「出土地点別遺物破片数一覧表」では、そうした現場所見を踏襲している。

第4表 与島B地点遺跡 遺構一覧表

種別	遺構番号	登録番号	検出グリッド		検出面 東西 南北	大きさ(m)			出土遺物	先後関係
			東西	南北		長軸長	短軸長	深さ		
ピット	SPb1	27	16	P	III	0.27	0.22	0.11		
	SPb2	28	16	P	III	0.34	0.28	0.06		
	SPb3	29	16	P	III	0.31	0.19	0.04		
土坑	SKb1	10	13	F	III	0.65	0.46	0.10		
	SKb2	11	13 ・14	F	III	1.34	0.77	0.26		
	SKb3	13	10	K	III	0.86	0.64	0.09		SKb4より新しい
	SKb4	14	10	K	III	残存 0.40	0.33	0.06		SKb3より古い
	SKb5	16	8	H	III	0.94	0.73	0.12		SDb3より新しい
	SKb6	17	8	H	III	0.44	0.39	0.09		
	SKb7	26	16	O	III	0.34	0.29	0.04		
	SKb8	30	15	P	III	0.56	0.52	0.08		
溝	SDb1	8 32	6～ 14	H～S	III	残存 57.00	6.60	0.88	土師器474、須恵器 86、灰釉陶器3、木器 類31、植物遺存体13	SDb2より古い
	SDb2	12	8～ 10	H～J	SDb1 埋土	14.30	1.90	0.25	土師器55、須恵器 49、植物遺存体1	SDb1より新しい
	SDb3	9	6～ 12	G～ K	III	残存 31.50	7.50	0.60	土師器3	SKb5より古い
	SDb4	37 38 39 41	12～ 17	L～P	III	残存 25.25	残存5.70	0.68	土師器15、木器類1、 植物遺存体34	NRb1より古い
自然流路	NRb1	40	15～ 17	N～O	III	残存 11.95	残存1.1	0.17		SDb4より新しい

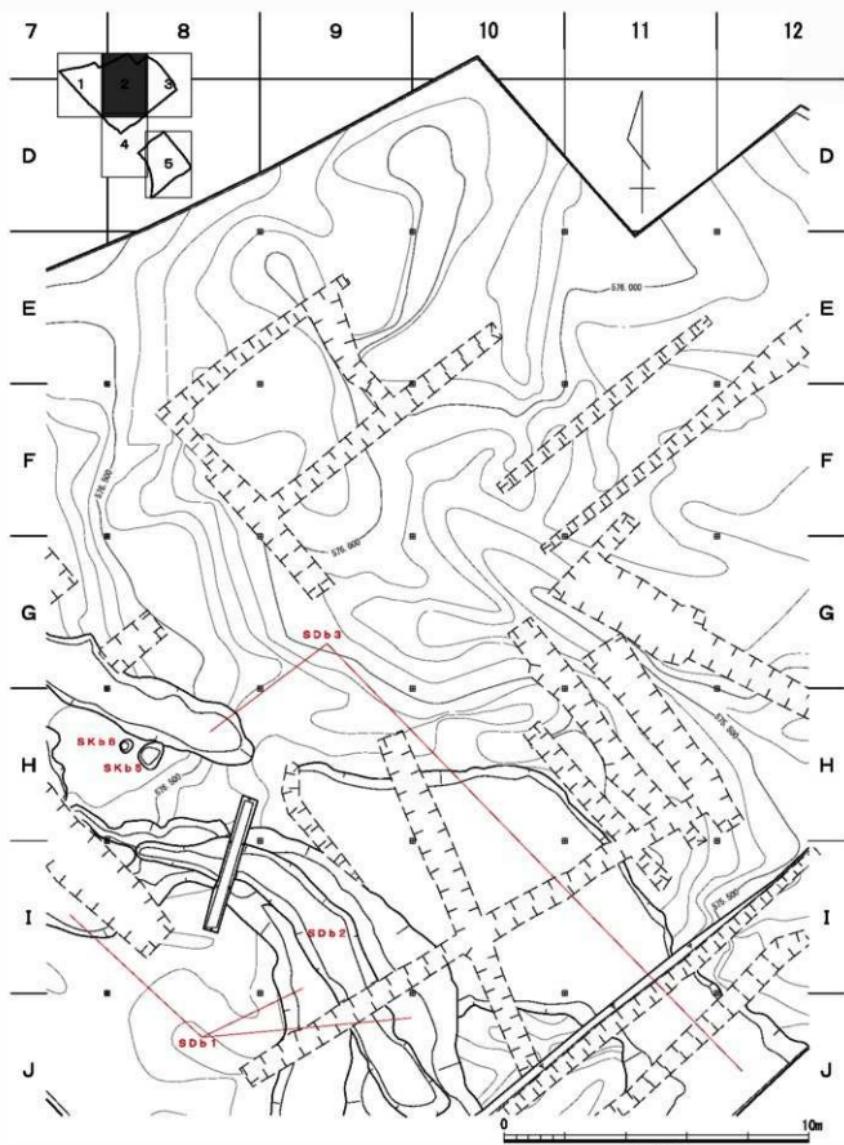


第8図 与島B地点遺跡 発掘区全図



第9図 与島日地点遺跡 発掘区全域分割図(1)

18 第3章 与島B地点遺跡の調査成果

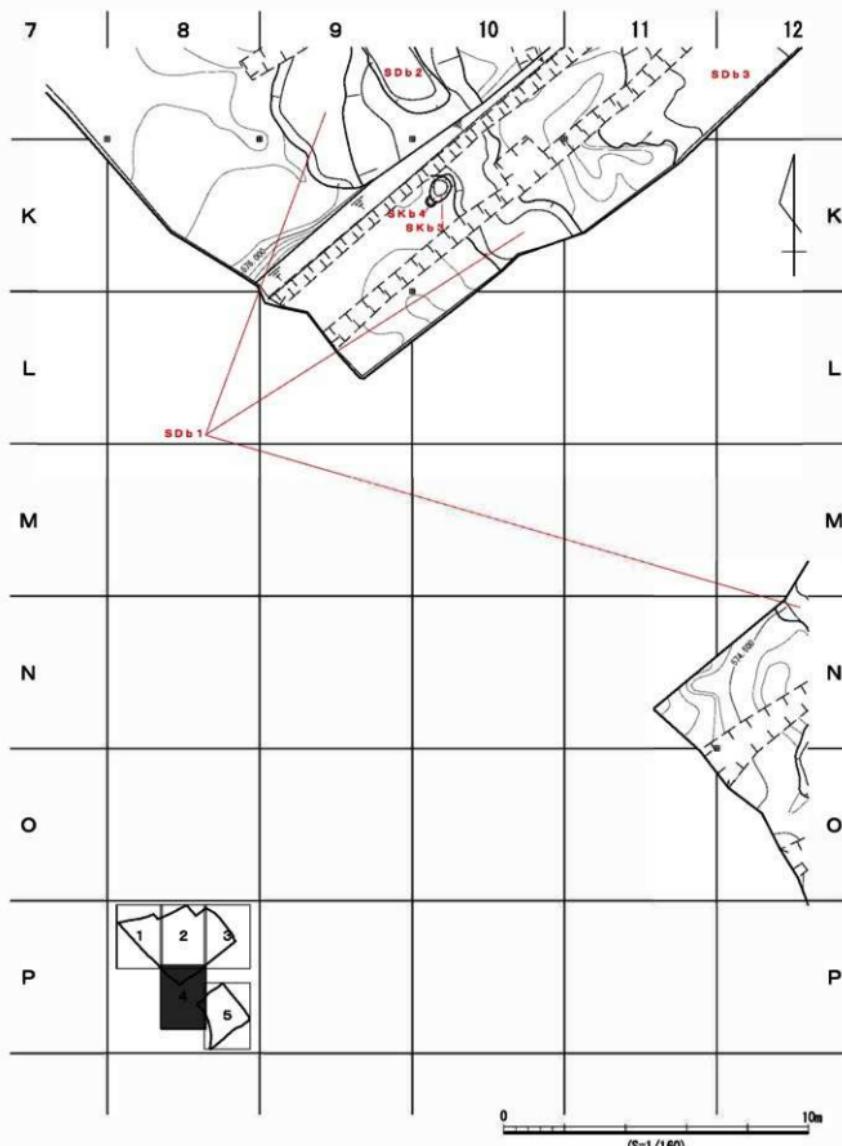


第10図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(2) (S=1/160)

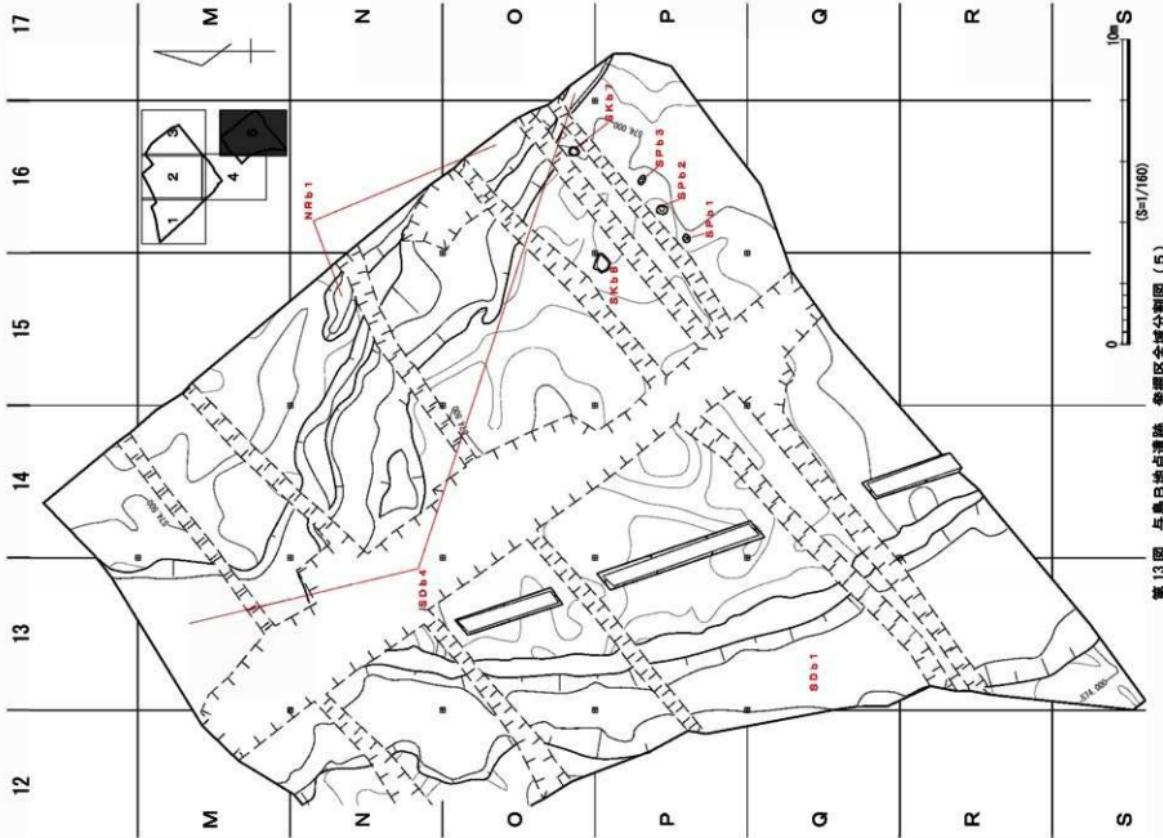


第11図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(3)

(S=1/160)



第12図 与島B地点遺跡 発掘区全域分割図(4)



第13図 与島田地点遺跡 発掘区全埋分割図(5)

## 22 第3章 与島B地点遺跡の調査成果

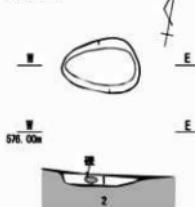
S P b 1・2・3



S P b 1

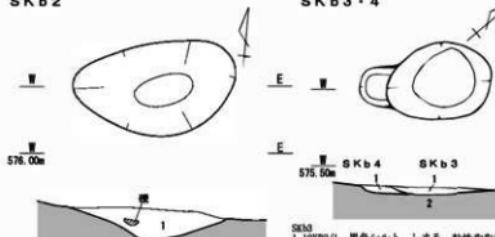
- 1 575/3 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR2/2 黄褐色で程度含む 塗土
- 3 10YR2/1 黑褐色土の塊を含む 塗土
- 4 10YR2/1 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり
- 5 10YR2/2 黄褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 6 10YR2/2/3 にぶい 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし
- 7 10YR2/2 黄褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 8 10YR2/2/3 にぶい 黄褐色や7. BYE/2K 黄褐色で径3~25mmの風化砂礫を7%程度含む 塗土

S K b 1



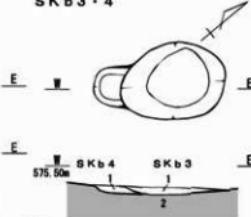
- 1 10YR2/2 黑褐色砂質土 しまりなし 粘性なし
- 2 10YR4/3 にぶい 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし

S K b 2



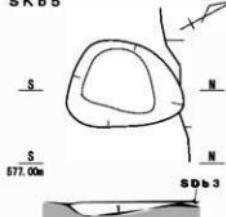
- 1 10YR2/2 黑褐色砂質土 しまりなし 粘性なし
- 2 10YR4/3 にぶい 黄褐色砂 しまりなし

S K b 3・4



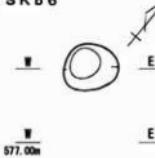
- 1 10YR2/1 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR2/2 黄褐色砂質土の塊を含む 塗土
- 3 10YR2/2 黄褐色シルト しまる 粘性なし

S K b 5



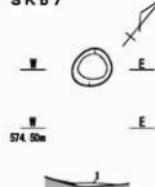
- 1 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR5/2 にぶい 黄褐色で径1~10mmの風化砂礫を7%程度含む 塗土
- 3 10YR4/3 にぶい 黄褐色砂質土 小さくまとめてある 塗土
- 4 10YR2/2/3 にぶい 黄褐色で径30~50mmの砂質土の塊を30%程度含む 塗土

S K b 6



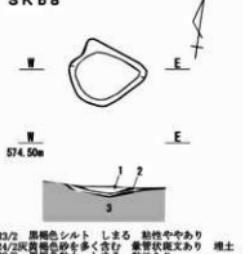
- 1 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR2/2 黄褐色風化砂礫を塊状に含む 塗土あり
- 3 10YR2/2 にぶい 黄褐色で径1~30mmの風化砂礫を7%程度含む 塗土
- 4 10YR4/3 にぶい 黄褐色砂質土 小さくまとめてある 粘性ややあり
- 5 10YR2/2/3 にぶい 黄褐色で径30~50mmの砂質土の塊を30%程度含む 塗土

S K b 7



- 1 10YR2/2 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり
- 2 10YR2/2 黄褐色砂質土 しまる 粘性ややあり
- 3 10YR2/2/3 にぶい 黄褐色で径1~2mmの風化砂礫を5%程度含む 塗土

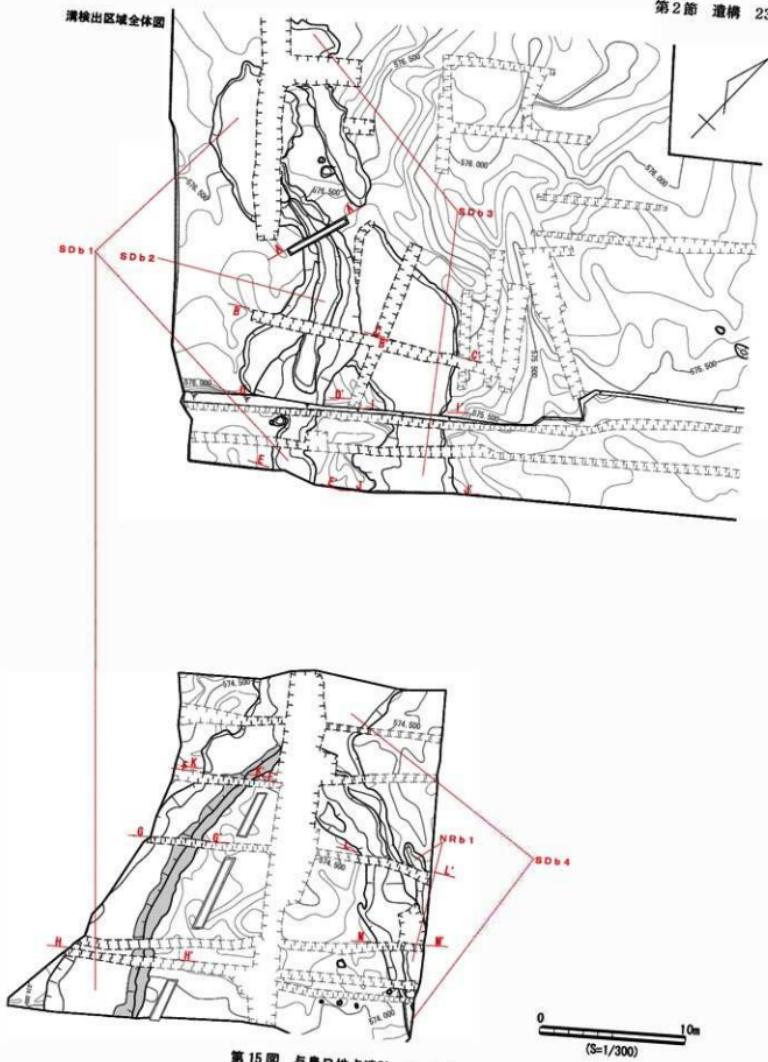
S K b 8



- 1 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR4/2 黄褐色砂質土を多く含む 塗土状文あり
- 3 10YR2/2 黄褐色砂質土 しまる 粘性あり
- 4 10YR2/2/3 にぶい 黄褐色で径1~2mmの風化砂礫を5%程度含む 塗土
- 5 10YR2/1 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり
- 6 10YR2/2 黄褐色砂質土あり

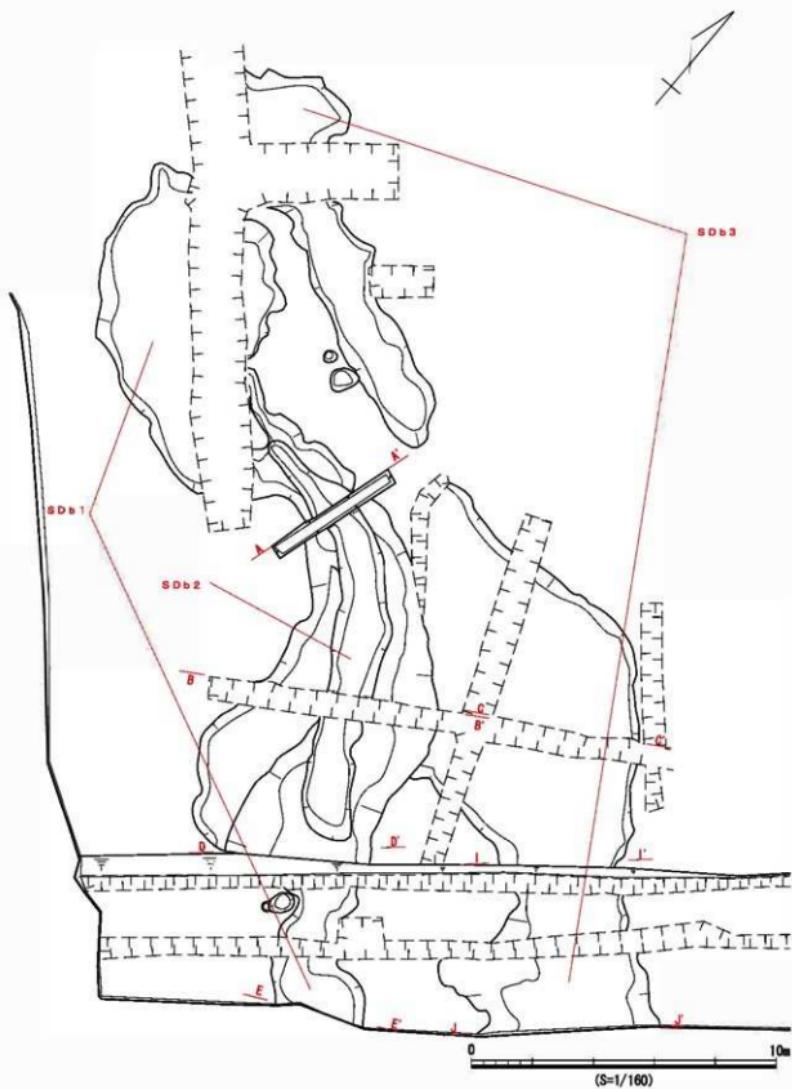
0  
(S=1/40)

第14図 与島B地点遺跡 ピット・土坑



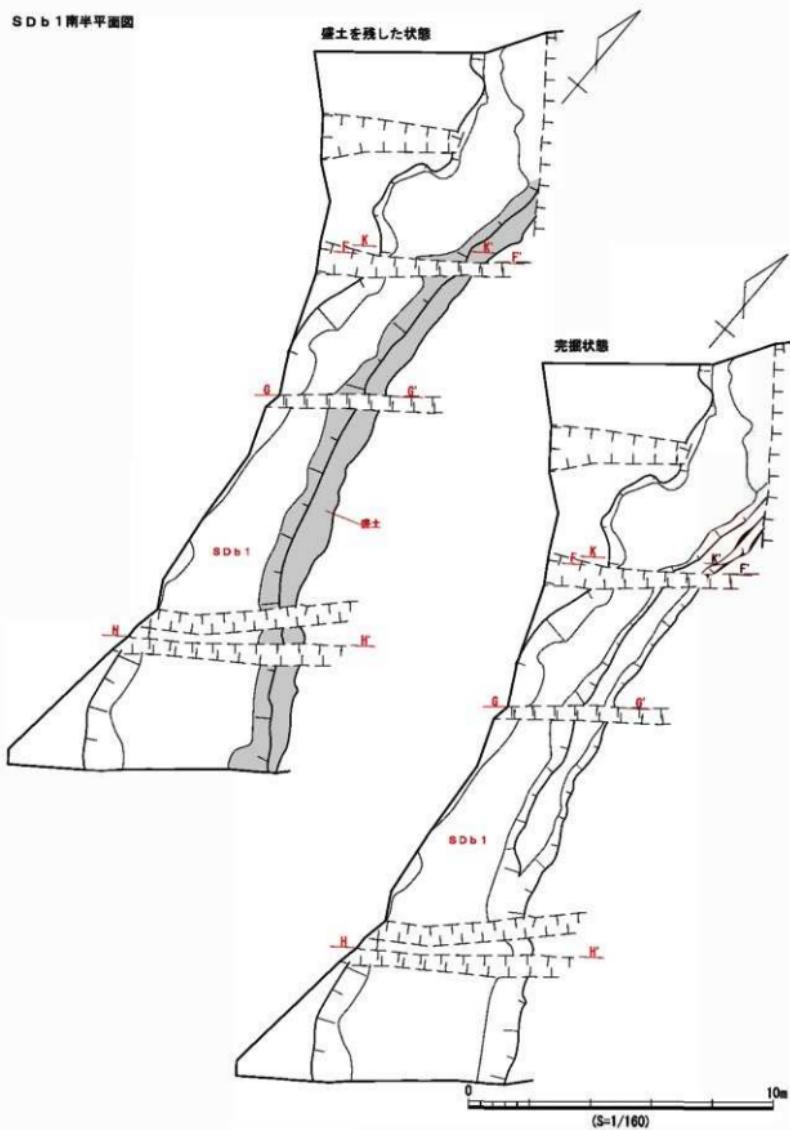
24 第3章 与島B地点遺跡の調査成果

SDb1北半・SDb2・SDb3平面図



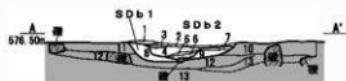
第16図 与島B地点遺跡 溝（2）

SD b 1 南半平面図



第17図 与島B地点遺跡 溝(3)

SDb1・2・3断面図 (1)



- 1 IOTR2/1 黄色粘土 ややしまる 粘性あり IOTR2/7に21頁黄色で径1~2mmの砂礫を3%程度含む 造成土
- 2 IOTR2/3 黄色粘土 ややしまる 粘性ややあり 107R2/6に21頁黄色で径1~2mmの砂礫を3%程度含む SDb2埋土
- 3 IOTR2/2 黄色粘土 シルト しまる 粘性ややあり 107R2/6に21頁黄色で径1~2mmの砂礫を3%程度含む SDb2埋土
- 4 IOTR2/4 にい 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし 黄褐色がサビで径1~4mmの砂を2%程度含む SDb2埋土
- 5 IOTR2/5 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし 黄褐色がサビで径1~4mmの砂を2%程度含む SDb2埋土
- 6 IOTR2/6 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし IOTR2/2~IOTR7/4に21頁黄色で径3~12mmの風化礫を含む
- 7 IOTR2/7 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし 垂管状底文あり SDb1埋土
- 8 IOTR2/8 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし IOTR2/7に21頁黄色で径1~2mmの砂礫を3%程度含む SDb1埋土
- 9 IOTR2/2 黄褐色砂質 しまる 粘性ややあり 107R2/6に21頁黄色で径1~2mmの砂礫を3%程度含む SDb1埋土
- 10 IOTR2/4 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/6に21頁黄色で径1~2mmの砂礫を3%程度含む SDb1埋土
- 11 IOTR2/3 にい 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし 表面がサビで径5~20mmの砂を5%程度含む 地山 Ⅲ層
- 12 IOTR2/5 黄褐色砂質 しまりなし 粘性なし 表面がサビで径5~20mmの砂を5%程度含む 地山 Ⅲ層
- 13 IOTR2/6 明黄色砂質シルト しまる 粘性ややあり 通山 Ⅲ層



- 1 IOTR2/2 黄褐色シルト しまる 粘性ややかり 2,37E/2灰黄色で径2~5mmの砂礫を5%程度 同色地 (耕作土)
- 2 IOTR2/1 黄褐色粘土 しまる 粘性あり 2,37E/2灰黄色で径2~5mmの砂礫を3%程度 同成土 (耕作土)
- 3 IOTR2/6 黄褐色 シルト しまる 粘性あり 107R2/2オリーブ灰色の砂の夾層を挟んで Sb1埋土
- 4 IOTR2/4 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色で径2~5mmの砂礫を3%程度含む SDb2埋土
- 5 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色で径2~5mmの砂礫を3%程度含む SDb2埋土
- 6 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし IOTR2/2黄褐色粘土セミナマニに含む SDb1埋土
- 7 IOTR2/1 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む 径2~5mmの砂礫を10%程度含む SDb2埋土
- 8 IOTR2/1 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 2,37E/2灰黄色で径1~1.5mmの風化礫を10%程度含む SDb1埋土
- 9 IOTR2/2 黄褐色砂質 しまりなし 黏性なし 2,37E/2灰黄色で径1~1.5mmの風化礫を3%程度含む SDb1埋土
- 10 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 11 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 12 IOTR2/1 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 13 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 14 IOTR2/1 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 15 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径5~10mmの砂の夾層を有する SDb1埋土
- 16 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径5~10mmの砂の夾層を有する SDb1埋土
- 17 IOTR2/1 黑褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 18 IOTR2/1 黑褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 19 IOTR2/1 黑褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 20 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 107R2/2灰黄色砂質セミナマニに含む SDb1埋土
- 21 IOTR2/1 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 径20~150mmの砂を40%に含む SDb1埋土
- 22 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 径20~150mmの砂を40%に含む SDb1埋土
- 23 IOTR2/1 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 一部に107R2/2黑褐色の粘土やIOTR4/2灰黃褐色砂質を夾状に含む SDb1埋土
- 24 IOTR2/4 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 一部に大粒の砂を多く含む SDb1埋土
- 25 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 一部に大粒の砂を多く含む SDb1埋土
- 26 IOTR2/2 黑褐色砂質 ややまと 黏性ややあり 一部に大粒の砂を多く含む 地山 Ⅲ層
- 27 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径30~120mmの砂の夾層を5~10%程度含む 地山 Ⅲ層 (前段または土石混在による堆積)
- 28 IOTR2/4 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径30~120mmの砂の夾層を5~10%程度含む 地山 Ⅲ層 (前段または土石混在による堆積)
- 29 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径30~120mmの砂の夾層を5~10%程度含む 地山 Ⅲ層 (土石混在による堆積)
- 30 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径30~120mmの砂の夾層を5~10%程度含む 地山 Ⅲ層 (土石混在による堆積)
- 31 IOTR2/3 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径30~120mmの砂の夾層を5~10%程度含む 地山 Ⅲ層 (土石混在による堆積)
- 32 IOTR2/2 黄褐色砂質 ややまと 黏性なし 径30~120mmの砂の夾層を5~10%程度含む 地山 Ⅲ層 (土石混在による堆積)
- 33 Sb1/2 灰オーリーブ色砂質土 しまる 粘性ややあり 7,37E/6明黄色の垂管状底文あり 地山 Ⅲ層

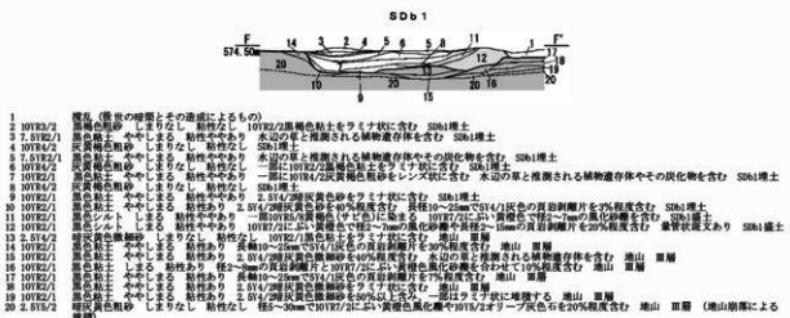
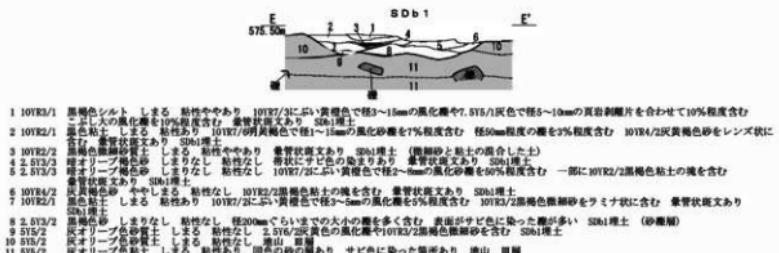
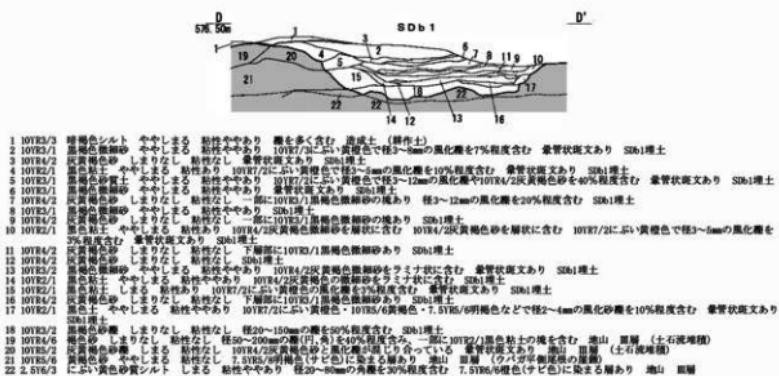


- 1 IOTR2/6 黄色土 ややまと 黏性あり 107R2/2オリーブ灰色の砂の夾層を挟んで Sb1/2灰黄色で径20~40mmの砂を5%程度含む 造成土 (宅地か)
- 2 IOTR2/1 黄褐色砂質土 ややまと 黏性ややあり 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む 一部に大粒の砂を含む 造成土
- 3 IOTR2/3 黄褐色砂質土 ややまと 黏性ややあり 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む コンクリートで基礎を造った上に土管を敷く
- 4 IOTR2/2 黄褐色砂質土 ややまと 黏性ややあり 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む SDb3埋土
- 5 IOTR2/1 黄褐色砂質土 ややまと 黏性ややあり 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む SDb3埋土
- 6 IOTR2/1 黄褐色砂質土 ややまと 黏性ややあり 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む SDb3埋土
- 7 IOTR2/4 黄褐色砂質 しまりなし 黏性なし 2,57T/2灰黄色で径5~30mmの風化礫や砂を20%程度含む SDb3埋土
- 8 IOTR2/2 黄褐色砂質 しまりなし 黏性なし 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む SDb3埋土
- 9 IOTR2/2 黄褐色砂質 しまりなし 黏性なし 107R2/4灰黃褐色砂質セミナマニに含む SDb3埋土
- 10 Sb1/2 灰オーリーブ色砂質土 しまる 黏性ややあり 7,37E/6明黄色の垂管状底文あり 地山 Ⅲ層

0 2m  
(S=1/80)

第18図 与島B地点遺跡 溝 (4)

SDb1・2・3断面図 (2)

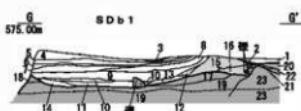


0 2m  
(S=1/80)

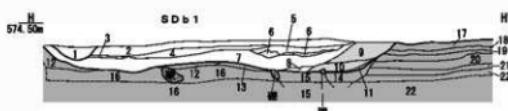
第19図 与島B地点遺跡 溝(5)

## 28 第3章 与島B地点遺跡の調査成果

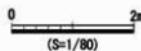
S D b 1 - 2 - 3断面図 (3)



- 1 10TE3/2 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土)  
 2 10TE2/2 黄褐色色シルト しまる 粘性ややあり 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土)  
 3 10TE4/2 黄褐色色シルト しまる 粘性ややあり 10TR7/2に高い黄褐色で径3~5mmの風化砂を5%程度含む 長さ20mm程度の頁岩剝離片をわずかに含む 進成土 (耕作土)  
 4 10TE3/1 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり 10TR7/2に高い黄褐色で径1~6mmの風化砂を10%程度、長さ20mm程度の頁岩剝離片をごくわずかに含む  
 5 10TE2/2 水成土 黄褐色色 しまりなし 粘性なし 部分的に10TR8/2灰白色で径3~15mmの風化砂を長さ10~20mm程度の頁岩剝離片含む SDb1理土  
 6 10TE2/2 黑褐色色粘土 しまりなし 粘性あり 部分的に10TR4/2灰褐色色風化砂をラミナ状に含む 全体に風化砂含む 葦管状炭灰あり SDb1理土  
 7 10TE2/2 黑褐色色粘土 しまりなし 粘性あり 10TR8/2灰白色で径1~3mmの風化砂を礁層によって20~40%程度含む 長さ5~30mmの頁岩剝離片をわずかに含む  
 8 10TE4/2 黄褐色色砂 しまりなし 粘性なし 部分的に10TR2/2黒褐色土を層状に含む 径10mm程度の頁岩剝離片や同じ大きさの風化砂含む 植物遺存体をわずかに含む SDb1理土  
 9 10TR2/1 黑褐色土 しまる 粘性あり 10TR4/2灰褐色色砂を層状に含む箇所あり 植物遺存体を含む  
 10 10TE4/2 黄褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR2/2灰褐色土をラミナ状に含む SDb1理土  
 11 10TE2/1 黑褐色色粘土 しまりなし 粘性なし 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土)にあり 植物遺存体をわずかに含む SDb1理土  
 12 10TE2/2 黑褐色色粘土 しまりなし 粘性なし 10TR4/2灰褐色色風化砂をラミナ状に含む SDb1理土  
 13 10TE2/2 黄褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR2/1灰褐色土をラミナ状に 10TR4/2灰褐色色砂をレンズ状に含む SDb1理土  
 14 10TE2/2 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 植物遺存体を含む  
 15 10TE2/1 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2灰褐色色砂をラミナ状に含む 径10mm程度の頁岩剝離片を15%程度含む  
 長さ10~40mmの風化砂無数の方向に向いた頁岩剝離片を5%程度含む SDb1理土  
 16 10TE2/2 黑褐色色土 しまる 粘性なし 長さ10~15mmの頁岩剝離片を10%程度含む 剥離片には細長の糸で繋いだものがある SDb1理土  
 17 10TE2/1 黑褐色色土 しまる 粘性なし 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土)  
 18 10TE2/1 黑褐色色土 しまりなし 粘性なし 10TR7/2に高い黄褐色で径3~5mmの風化砂を5%程度含む 地山 田畠 (SDb1以前のウバガ平側からの崩れ込み)  
 19 10TE2/2 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2灰褐色色砂を5~30mmの頁岩剝離片を5%程度含む 地山 田畠  
 20 10TE2/2 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2灰褐色色砂を5~30mmの頁岩剝離片を5%程度含む 地山 田畠  
 21 10TE2/2 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2灰褐色色砂を多く含む箇所あり 地山 田畠  
 22 10TE4/2 黑褐色色土 しまる 粘性なし 長さ10~40mmの頁岩剝離片を多く含む箇所あり 地山 田畠  
 23 10TE2/2 黑褐色色土 しまる 粘性なし 10TR8/2灰白色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土)にあり 10TR7/2灰褐色色砂をラミナ状に含む 進成土 (古い時にウバガ平側から崩れ込んできたもの)

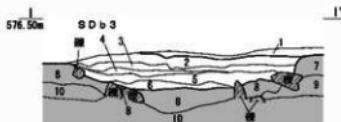


- 1 10TE4/2 黄褐色色砂層 しまりなし 粘性なし 長さ20mm大の頁岩剝離片を5%程度含む 上層の砂は10TR6/2明黄色 (チビ色) に染まる 棚丘 (堆積堆土)  
 2 10TE2/1 黑褐色シルト しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 葦管状炭灰あり SDb1理土  
 3 10TE2/2 黑褐色シルト しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 葦管状炭灰あり SDb1理土  
 4 10TE4/2 黄褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 5 10TE2/2 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 6 10TE2/2 黑褐色色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 7 10TE2/2 黑褐色色砂 しまる 粘性あり 水辺の草と堆積される植物遺存体を中隔壁を中心して帯状に含む 風化砂をラミナ状に含む箇所あり SDb1理土  
 8 10TE2/2 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR8/2灰白色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 9 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 葦管状炭灰あり SDb1理土  
 10 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 11 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 12 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 13 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 14 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 15 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 16 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 17 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 18 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 19 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 20 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 21 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土  
 22 10TE2/1 黑褐色色砂 しまる 粘性やややや 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む 進成土 (耕作土) 10TR7/2に高い黄褐色で径3~7mmの風化砂を7%程度含む SDb1理土

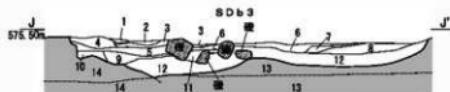


第20図 与島B地点遺跡 溝 (6)

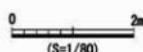
SDb1・2・3断面図 (4)



- 1 10YR3/2 緑褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 粗多く含む 地成土 (耕作土)  
 2 10YR3/2 黄褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10YR7/2Cに多い黄褐色で径3~10mmの風化礫を10%程度含む 畜糞状斑文あり SDb3堆積土  
 3 10YR3/2 黄褐色砂質土 小さくしまる 粘性ややあり 10YR2/2灰白色で径3~5mmの風化礫を含む 10YR2/2灰褐色砂層状に含む SDb3堆積土  
 4 10YR4/2 灰褐色風化砂 しまりなし 粘性ややあり 10YR8/1黒褐色で風化砂を含む 10YR8/2灰白色で径3~12mmの風化礫と小石を粗状に含む箇所あり SDb3堆積土  
 5 10YR3/2 黄褐色風化砂 ややしらる 粘性ややあり 10YR2/2灰褐色風化砂や10YR2/2灰褐色粘土をラミナ状に含む 10YR2/2灰白色で径3~12mmの風化礫  
 6 10YR4/2 灰褐色風化砂 しまりなし 粘性なし この砂層の西側半分は10YR4/3Cに黄褐色(サビ色)に染まる 10YR8/2灰白色で径3~12mmの風化礫を9%程度含む 灰褐色含む 灰褐色下層部に厚さ15~25mmで10YR2/2灰褐色の粘土層あり SDb3堆積土  
 7 10YR4/2 黄褐色粘土 ややしまる 粘性ややあり 一部に10YR2/2灰褐色粘土の塊を含む 地山 田層  
 8 10YR4/2 灰褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 径5~12mmの礫を50%以上含む(この中にには径25mm以上の礫も含まれる) 滝山 田層 (土石流堆積)  
 9 5Y6/2 灰褐色風化砂 ややしまる 粘性ややあり 畜糞状斑文や層次の褐色風化砂(サビ色)の歴史があり 一部に褐色風化色でこぶし大的礫を含む 滝山 田層  
 10 2. 5Y6/2 にい 黄褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 径20~80mmの角礫を30%程度含む 7. 5Y6/6褐色(サビ色)に染まる層あり 滝山 田層

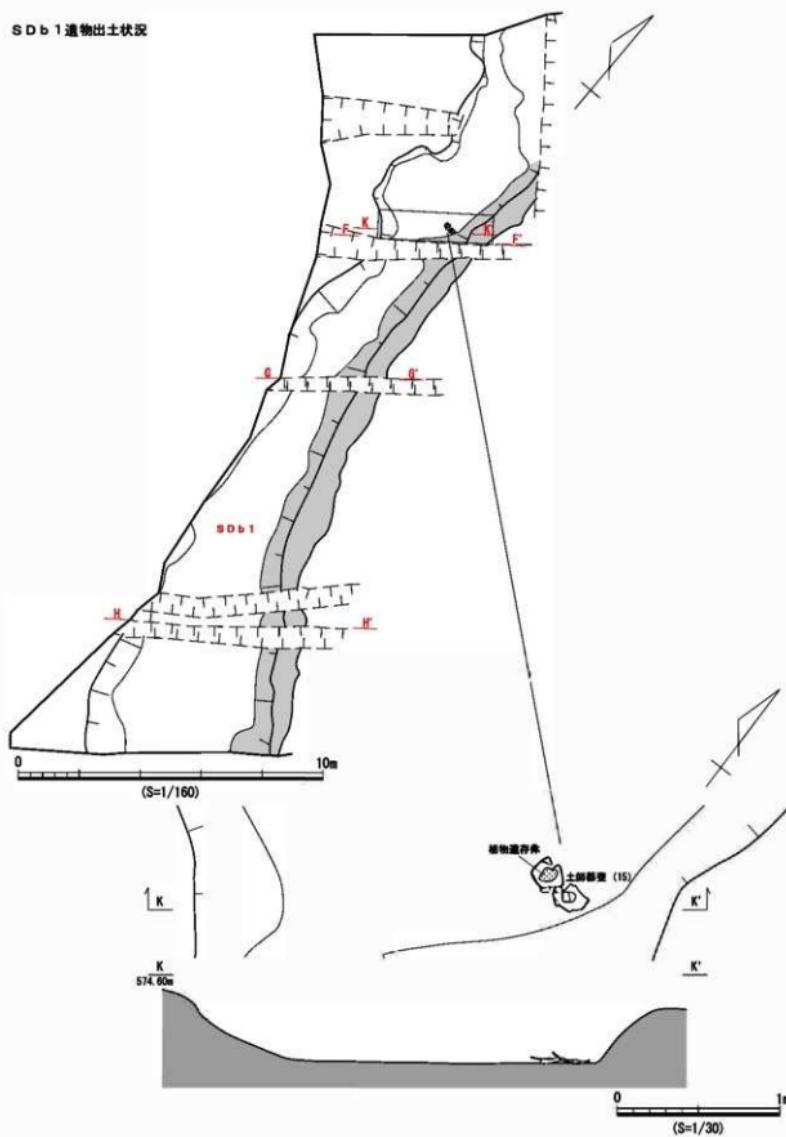


- 1 10YR3/2 黄褐色沙 しまりなし 粘性なし 10YR7/2Cにい黄褐色で径3~10mmの風化礫を10%程度含む SDb3堆土  
 2 10YR3/2 黄褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10YR7/2Cにい黄褐色で径3~10mmの風化礫を10%程度含む SDb3堆土  
 3 10YR2/2 灰褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 10YR7/2Cにい黄褐色で径3~7mmの風化礫を15%程度含む 2層風化砂をラミナ状に含む箇所あり SDb3堆積土  
 4 10YR4/2 黄褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 10YR7/2Cにい黄褐色で径2~8mmの風化礫や頁岩剥離片を10%程度含む SDb3堆積土  
 5 10YR4/2 黄褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 10YR7/2Cにい黄褐色で径3~7mmの風化礫を15%程度含む 2層風化砂をラミナ状に含む箇所あり SDb3堆積土  
 6 10YR4/2 黄褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 10YR7/2Cにい黄褐色で径3~7mmの風化礫を15%程度含む 2層風化砂をラミナ状に含む箇所あり SDb3堆積土  
 7 10YR4/4 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし 10YR8/1灰白色で径3~15mmの風化礫を30%程度含む SDb3堆土  
 8 10YR3/3 黄褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 10YR8/2灰褐色風化砂を層状に含む 10YR7/2Cにい黄褐色や頁岩剥離片を含む  
 9 10YR2/1 黄色土 しまる 粘性あり 径5~20mmの風化礫を含んだ10YR4/2灰褐色風化砂層状に含む SDb3堆土  
 10 10YR2/1 黄色シルト ややしまる 粘性ややあり 10YR7/9灰褐色で径3~5mmの風化礫を5%程度含む SDb3堆土  
 11 10YR4/2 黄褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 10YR2/1灰褐色土や10YR7/9灰褐色土に挟まれた層を5%程度含む SDb3堆土  
 12 10YR4/2 黄褐色風化砂 しまりなし 粘性なし 10YR7/2Cにい黄褐色で径3~7mmの風化礫を15%程度含む SDb3堆土  
 13 2. 5Y6/1 绿褐色砂質土 ややしまる 粘性ややあり 10YR7/2Cにい黄褐色が良土を多く含む 滝山 田層  
 14 2. 5Y6/1 绿褐色砂質土 ややしまる 粘性ややあり 滝山 田層



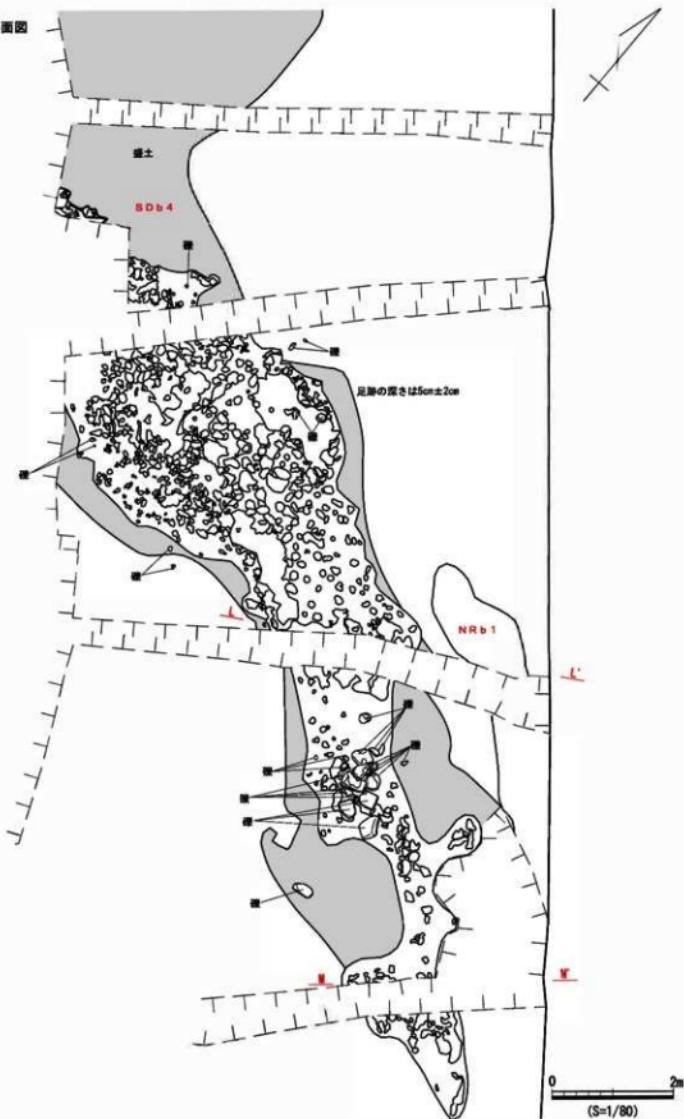
第21図 与島B地点遺跡 溝(7)

SD b 1遺物出土状況



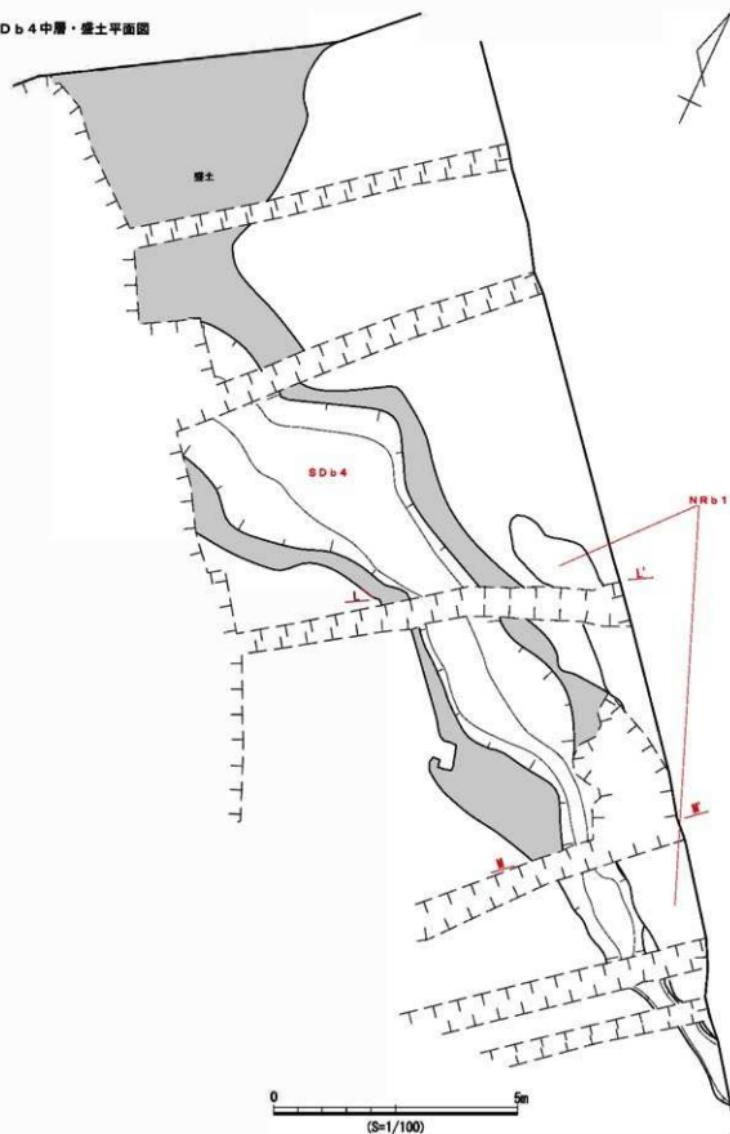
第22図 与島B地点遺跡 溝(8)

SDb 4上層平面図



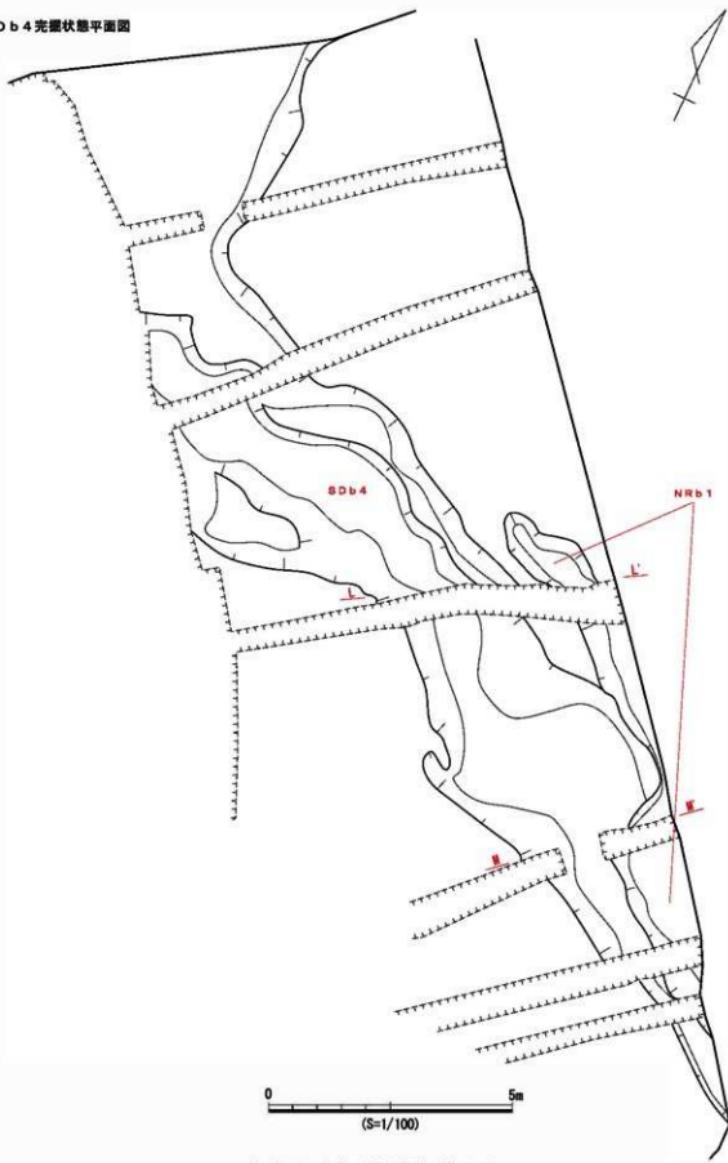
第23図 与島B地点遺跡 溝（9）

SD b 4中層・塗土平面図



第24図 与島B地点遺跡 溝 (10)

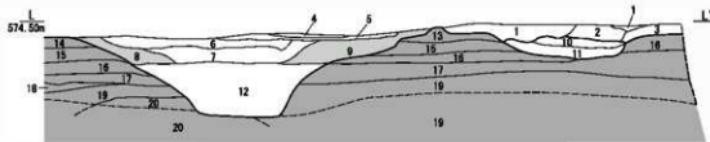
SD b 4 完整状態平面図



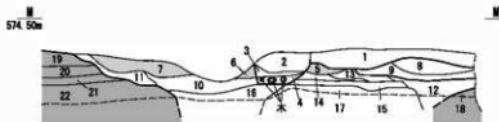
第25図 与島B地点遺跡 溝（11）

### 34 第3章 与島B地点遺跡の調査成果

SD b 4 -NR b 1断面図



1	複孔(暗緑色に伴うもの)
2	オリーブ褐色砂 しまりなし 粘性なし 塗装
3	10TR2/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 2.5TR/2後黄色砂+7.5TR/1灰褐色で径1~15mmの風化砂を5%程度含む 造成土
4	10TR2/3 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 10TR/2後黄色砂を含む 造成土
5	10TR2/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 10TR/2後黄色砂を含む 上部で足跡検出 SD4埋土 (上層)
6	10TR2/4 灰黄色砂質土 しまりなし 粘性なし 上部で足跡検出 SD4埋土 (上層)
7	10TR2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性あり 1.5TR/1後黄色砂を含む 10TR/2後黄色砂を含む 造成土
8	10TR2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
9	10TR2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
10	10TR2/2 黒褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
11	10TR2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
12	10TR2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
13	10TR2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
14	10TR2/3 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
15	10TR2/3 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~15mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
16	10TR2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性あり 2.5TR/2後黄色砂を含む 造成土
17	10TR2/3 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~8mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
18	10TR2/2 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/2後白色で径3~8mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (中層)
19	10TR2/2 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/2後灰褐色で径30~50mmの砂を含む SD4埋土 (中層)
20	10TR2/4 灰黄色砂質土 しまりなし 粘性なし 10TR/2後灰褐色で径30~50mmの砂を含む SD4埋土 (中層)



1	10TR3/2 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり 塗装状斑文あり 造成土
2	10TR3/3 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり 塗装 (暗褐色土)
3	10TR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり 塗装 (暗褐色土)
4	10TR2/2 黑褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 塗装
5	10TR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり 2.5TR/2後灰褐色で径さ50mm程度の頁岩剥離片を含む 10TR/2/2にぶい黄褐色で径5~20mmの風化砂を5%程度含む 造成土
6	10TR2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/7にぶい黄褐色で径3~6mmの風化砂を含む SD4盛土
7	10TR2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5TR/1灰褐色で径1~5mmや10TR/7/2にぶい黄褐色砂を5%程度含む SD4盛土
8	2.5TR/3 黑褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 10TR/2後黑色粘土をミナ状に含む SD4埋土
9	10TR2/2 黑褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 10TR/2後黑色粘土をミナ状に含む SD4埋土
10	10TR2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性あり 10TR/7にぶい黄褐色で径1~2mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (下層)
11	10TR2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/7にぶい黄褐色で径1~2mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (下層)
12	10TR2/3 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/7にぶい黄褐色で径1~2mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (下層)
13	10TR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり 5TR/5にぶい黄褐色で径1~2mmの風化砂を5%程度含む SD4埋土 (下層)
14	10TR2/2 黑褐色土 しまる 粘性あり 10TR/4/2後黄色砂をミナ状に含む SD4埋土 (下層)
15	10TR2/2 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 10TR/2/2後黄色砂をミナ状に含む SD4埋土 (下層)
16	10TR2/2 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 10TR/2/2後黄色砂をミナ状に含む SD4埋土 (下層)
17	10TR2/2 黑褐色土 しまる 粘性あり 10TR/2/2後黄色砂をミナ状に含む SD4埋土 (下層)
18	10TR2/2 黑褐色砂質土 ややしまる 粘性ややあり 10TR/6/2後灰褐色で径3~10mmの風化砂を15%程度含む SD4埋土 (下層)
19	10TR2/3 黑褐色砂質土 しまる 粘性ややあり 10TR/5/2後白色の砂を20%程度含む 塗装状斑文あり 地山 田層
20	10TR2/1 黑褐色土 しまる 粘性あり 10TR/7/2にぶい黄褐色の砂を10%程度含む 塗装状斑文あり 地山 田層

0  
1m  
(S=1/40)

第26図 与島B地点遺跡 溝(12)

## 第3節 遺物

与島B地点遺跡で出土した遺物は、破片数で数えて973点である。材質を基準に大別すると、土器類858点、木器類59点、石器類1点、金属器類1点、植物遺存体54点となる<sup>1)</sup>。実測可能なものをほぼすべて抽出し、54個体図示した（1～54）。

### 1 土器類

出土した土器類破片858点の内訳は、土師器619点、須恵器180点、灰釉陶器38点、山茶碗1点、中近世陶器3点、近世陶磁器12点、近現代磁器3点、分類不能2点である。古墳時代の土師器と古代の須恵器・灰釉陶器に偏る傾向が顕著である。

#### （1）土師器

破片数で数えて619点確認し、23個体図示した。それらのうち、壺3個体、甌2個体を除く18個体を高坏が占めている。

##### 高坏 1～11・23・29～34

図示した高坏は、すべて碗状の坏部と低い脚部からなる碗状坏部低脚高坏である。図示しなかったものも含め出土破片すべてに視野を広げても有段坏部や長脚を具える個体は見当たらず、当遺跡の土師器高坏は例外なくこのタイプで占められる。

坏部は体部・底部ともに丸みを帯び、両者の間に明確な境を持たず、体部がわずかに内彎して碗状を呈する。口縁部のみ外側に短く屈曲して外反する点に特徴がある。脚部は、柱部が斜め下方に開き、内彎気味に開く裾部との間に明瞭な境を持つ。口径は12cm～15cm台、脚部の底径は7～10cm台を測る。今回の調査では完形個体は出土していないが、器高は10cm程度に復元できるであろう。器面調整は横方向のヘラミガキを基本としている。胎土については、砂粒をほとんど含まぬ緻密なものが大部分を占める<sup>2)</sup>。色調は橙色を呈するものが多い。

近隣における既往の調査例から、古墳時代中期の5世紀代の遺物と判断される<sup>3)</sup>。

##### 壺 12・13・35

口頸部破片のみではあるが、3個体確認した。12・35は直立する長い口頸部を持つ直口壺、13は外反する短い口頸部を持つ壺である。胎土及び色調は、3個体とも高坏と共通する。

##### 壺 14・15

破片数では100点以上確認しているが、図示できたのは2個体にとどまる<sup>4)</sup>。15は底部を欠くものの、残存状態良好な個体である。口頸部は緩やかに外反する。胴部の上半は球形であるが、下半は丸みを減じて緩やかな円錐形となるとみられる。口頸部外面及び上端・下端を除く胴部外面の大部分に黒色炭化物が厚く付着する。胴部内面にも部分的に黒色炭化物が付着するが、外面に比べ厚さは薄い。SD b 1から出土した。なお、この個体の中から纖維状の植物遺存体が出土した（第22図）。

#### （2）須恵器

破片数で180点確認し、13個体図示した。内訳は、坏身1個体、返り蓋1個体、摘み蓋2個体、有台坏7個体、短頸壺1個体、長頸瓶1個体である<sup>5)</sup>。古墳時代に属する個体はごく限られ、大部分を占めるのは古代の遺物である。

**坏身 36**

古墳時代の器種である坏身は、1個体のみ確認した。36は小破片であるが、薄手の作りの小型品であり、この器種としては新しい特徴を具える個体との印象を受ける。

**返り蓋 37**

内面に返りを持つ蓋である返り蓋も、確認できたのは1個体のみである。37は摩滅が著しく、返りの長さも定かではないが、口径12.2cmを測る。

**摘み蓋 24・25**

端部を折り返す蓋である摘み蓋は、当地域でも流通量の多い器種であることが知られているが<sup>6)</sup>、当遺跡出土品で図示できるのは2個体にとどまる。24は摘み部分以外のほぼ全体が残存し、口径17.6cmを測る。外面に不明瞭ながら墨書きが認められる。25は扁平な摘みが残存する個体で、口径14.6cm、器高3.2cmを測る。いずれもSD b 2から出土した。

**有台坏 16~18・26~28・38**

有台坏は当遺跡の出土須恵器では最も確認個体数の多い器種で、7個体図示した。当地域でも流通量の多い器種であることが知られているため、そのこと 자체は奇異ではない<sup>7)</sup>。しかし、流通期間の重なる他の須恵器食膳具、すなわち無台坏・無台碗・有台碗・有台盤には図示できる個体が全く見出されなかつたことから、この器種が特に選択されて持ち込まれた可能性は排除できない。

残存状態良好な個体に惠まれていることも、当遺跡の有台坏の特徴である。口径は11.8~15.6cm、器高は3.1~3.7cmを測り、あまり大きなばらつきはみられない。底部外面の切り離し技法については、16では回転糸切り、17ではヘラ切りを用いたことを観察でき、一様ではない。SD b 2から出土した26には、底部外面に不明瞭ながら墨書きが認められる。

**短頸壺 39**

壺の破片はほとんど確認されていないが、39は短頸壺の口縁部から胴部上端にかけての破片である。口径7.2cmを測る。

**長頸瓶 19**

SD b 1から出土した19は、ほぼ完形の長頸瓶である。口径9.7cm、器高24.2cm、台径11.4cmを測る。胴部と頸部の接合に当たっては、胴部に頸部を直に繋ぐのではなく、別作りの粘土円盤を胴部上端に被せた後に頸部を載せて繋ぐ円盤閉塞法<sup>8)</sup>を用いたことを確認できる。

**(3) 灰釉陶器 20・21・40~47**

破片数で38点確認し、碗皿類8個体、瓶類2個体、合わせて10個体図示した。

碗皿類は遺構内からは全く出土していない。包含層出土品のうち比較的の残存状態の良いものを選んで図示したが(40~47)、全形を窺うことのできる個体に恵まれない。44・47では底部外面に回転糸切り痕が認められる。精製品と言えるような特異な個体はない。

SD b 1から出土した20・21は長頸瓶である。下半部のみ残存する20は、底部を須恵器有台坏(16)の内面にはめ込んだ状態で出土した。上半部の残存する21は、19(須恵器長頸瓶)同様、別作りの粘土円盤を胴部上端に被せた後に頸部を載せて繋ぐ円盤閉塞法により、頸部を胴部に繋いでいる。

**(4) その他の土器類 48**

当遺跡の出土土器類で、古墳時代ないし古代に属さないものは極めて少なく、中近世陶器3点、近

世陶磁器 12 点、近現代磁器 3 点、それに分類不能の土器片 2 点がみられるにとどまる。

図示したのは山茶碗 1 個体のみである。48 は北部系山茶碗の小皿である。小破片のため全形を窺うことはできないが、底部外面に回転糸切り痕が認められる。

## 2 木器類

破片数で数えて 59 点出土した。内訳は、櫛 2 点（1 個体）、曲物底板 1 点、板状木製品 9 点、棒状木製品 23 点、杭 4 点、分類不能 20 点である<sup>9)</sup>。古墳時代の櫛（22）が出土したことが特に注目される。残存状態の良いものから 5 個体を選び、図示した。

### （1）櫛 22

S D b 1 下層から出土した 22 は、結歯式豎櫛の頭部である。2 つに破片に分かれた状態で出土したが、残存長 3.7 cm、残存幅 3.9 cm、厚さ 0.3 cm を測る。齒の部分は痕跡程度しか残っていない。残存部分のほぼ全面に黒色の塗膜が認められる。

細長い材を並べて逆U字形に曲げ、帯状の部材により結束したのち、塗膜で固めて作られている。折り曲げの頂点部分を縦糸で括っているか否かは定かでない。束ねられた材の横断面形は概ね縱長の長方形であり、各々、幅 1.2~1.3 mm 前後、高さ 2.0 mm 前後を測る。本数は 14 本を数える。したがって、頭部の下方に台形状に広がる齒の本数は、その倍の 28 本となる。残存部分の下端付近には、横方向に連続する螺旋状の盛り上がりが認められ、それらを貫くように横方向の細長い材の一部が残存する。添え木を添えた上で、齒を糸で括った痕跡と判断される。

分析の結果、束ねられた材はタケ亜科であり、頭部と齒との境に巻かれた帯も同様にタケ亜科であることが明らかとなった。また、黒色の塗膜は漆であることが明らかとなった。分析の詳細は、第 5 章第 3 節に記載する。

帰属時期については、束ねた細長い材を折り曲げて作る豎櫛はほぼ古墳時代に限られるとする全国的傾向<sup>10)</sup>と、古墳時代中期の土師器高杯が大半を占めるという S D b 1 下層の出土土器組成から、古墳時代中期の 5 世紀と考えて問題ないであろう。古墳時代の櫛を確認したのは、飛騨地域ではこれが初めてである。

### （2）曲物底板 49

確認できたのは破片 1 点のみである。49 は小破片であるが、円形の円盤の一部とみられ、円形曲物容器の底板である可能性が高い。

### （3）杭 50~52

破片数で数えて 4 点出土した（個体数でも同数）。打ち込まれるという使用方法の特性上、他器種にも増して新しい時代のものが混在するとみられ、帰属時代が近現代に下るものも含まれる可能性がある。図示した 3 個体（50~52）は、いずれも N14 グリッドで出土した。

### （4）その他の木器類

板状木製品が、破片数で数えて 9 点出土した。全形を窺うことのできる個体や加工痕が明瞭に認められる個体がないため実測図を掲載してはいないものの、薄く小型のものから、厚く大型のものまでみられる。棒状木製品は破片数で 23 点出土したが、個体数では 3 個体程度となるとみられる。全形を窺うことのできる個体は出土していない。そのほか、細かく砕け、本来の形状が判明しない器具・部

材や、加工痕・使用痕の有無を読み取ることができず、自然木と見分けの付かない木片など、以上の分類のいずれとも判定しがたい木質遺物が 20 点出土している。

なお、当遺跡の出土木器類には、一端が炭化し、いわゆる「火付け木」に類似するものが数点程度みられるが、いずれも部分的に熱を受けたに過ぎない自然木や器具・部材の一部と判断し、実測図を掲載していない。

### 3 その他の出土遺物 53・54

土器類・木器類のほか、石器類 1 点、金属器類 1 点、植物遺存体 54 点を確認している。53 は打製石斧である。試掘・確認調査時に出土した。石材は凝灰岩である。54 は近世銭「寛永通寶」である。J11 グリッドで出土した。植物遺存体は溝から出土したものが多く、クルミ、トチノミなどがある。

#### 第3章 第3節 注

- 1) 注記不能の小破片については、遺物数に含んでいない。また、炭化物や木片などで遺物として扱わなかったものが少量ながらある。
- 2) 「出土地点別遺物破片数一覧表」(39 頁)において、「胎土良」とした土師器破片 475 点の大部分を高坏が占め、そのほか壊類を少し含むとみられる。
- 3) 古墳時代中期の碗状坏部低脚高坏については、以下の文献に詳しい。
  - ①国府町教育委員会 1993『半田垣内遺跡 1 次・2 次発掘調査報告書』
  - ②財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡 A 地区』
 なお、野内遺跡 A 地区では碗状坏部低脚高坏とともに有段坏部長脚高坏や碗状坏部長脚高坏が出土しており、有段坏部タイプが碗状坏部タイプに先行することが確認されている。文献②の 131~137 頁を参照されたい。
- 4) 「出土地点別遺物破片数一覧表」(39 頁)において、「胎土粗」とした土師器破片 144 点の大部分は壊とみられる。
- 5) 本書では、須恵器の分類と器種名、それに年代観については、原則として第 1 回東海土器研究会で提示されたものに従つた。東海土器研究会 2000『須恵器生産の出現から酒器 猿投窯・湖西窯編年の再構築』を参照されたい。
- 6) 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡 C 地区』、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡 B 地区』など。
- 7) 前掲注 6) と同じ。
- 8) 北野博司 2001「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第 9 号、北陸古代土器研究会。吉田江美子 2003「須恵器長頸瓶の製作技法—山形県内の窯跡出土資料から—」『(財) 山形県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号、財団法人山形県埋蔵文化財センター。
- 9) 本書における木器類の分類については、野内遺跡 C 地区における分類に準じている。岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡 C 地区』第 1 分冊 163~167 頁を参照されたい。
- 10) 山田昌久編 2003『考古資料大観 第 8 卷 弥生・古墳時代 木・織維製品』小学館、348 頁、小松大秀 1989『日本の美術 第 275 号 化粧道具』至文堂、20 頁など。

第5表 与島日地点遺跡 出土地点別遺物破片数一覧表

出土 差 点	層 位	土器類										木器類			石器類		金属器類		植物 遺 存 体	合 計	
		土器類		領土器		灰陶器		山茶 器	中近世 陶器	近現代 磁器	分類不 明上 器	木器類			石器類		金属器類				
		陶 土 器	灰 土 器	食 器	附 器	灰 陶	黑 陶					板 狀木 製品	棒 狀木 製品	核	分 類不 明木 器	打 制石 斧	古 銅				
SD51	上層	152	34	11	3		3												203		
	中層	47	6	11	55											2		1	124		
	下層	136	89	2	3											3		3	261		
	壁土	3	3		1											3		9	19		
SD52	上層	33																1	34		
	下層	21	1	49														1	71		
SD53	上層			1														2			
	下層		2															20	20		
SD54	上層																	6	6		
	中層																	1	1		
	壁土																	7	7		
	下層	15																7	23		
D9	I			1															1		
D10	I					1													1		
E7	I					1													1		
E9	II					1	1												6		
E10	I	1																	1		
E11	II					1	1												2		
E12	II					1													1		
E13	III底上		1																1		
F7	I			1															1		
F9	I			1	2														4		
F10	II			1	1														4		
F11	I				7	1	1												9		
F14	I				1	3													4		
G9	I			1	1														2		
G10	II			1	2														2		
G11	I			2															1		
H8	I	1		1															2		
H9	I																		1		
H10	III底上		1																1		
H11	I			1															1		
H13	I			2															2		
H14	II		1	2															3		
H8	I	1				1													5		
H9	I	3				1													4		
H10	I			1															1		
H12	I	1			1														2		
J9	II	3	1	2															6		
J11	I				1												1		1		
K9	I	1					3												4		
K10	I	2																	2		
M13	II																	3	3		
N14	I			1	1														2		
N15	I				2	1													3		
N16	I																		5		
O15	I																		5		
O16	I	1		2	1														14		
P13	II		1																1		
P15	I																		2		
P16	I		1																1		
12年度試掘坑1	-	31			3			1									1		36		
12年度試掘坑2	-	20						1											22		
12年度試掘坑3	-				1	1	1					4	2						9		
12年度試掘坑4	-					1						3	1						5		
12年度試掘坑5	-						1	1				1							3		
12年度試掘坑6	-					1	1												2		
12年度試掘坑7	-				1														1		
不明	I				2	1	1												6		
壁土				1															1		
合計		475	144	91	89	34	4	1	3	12	3	2	2	1	9	23	4	20	973		

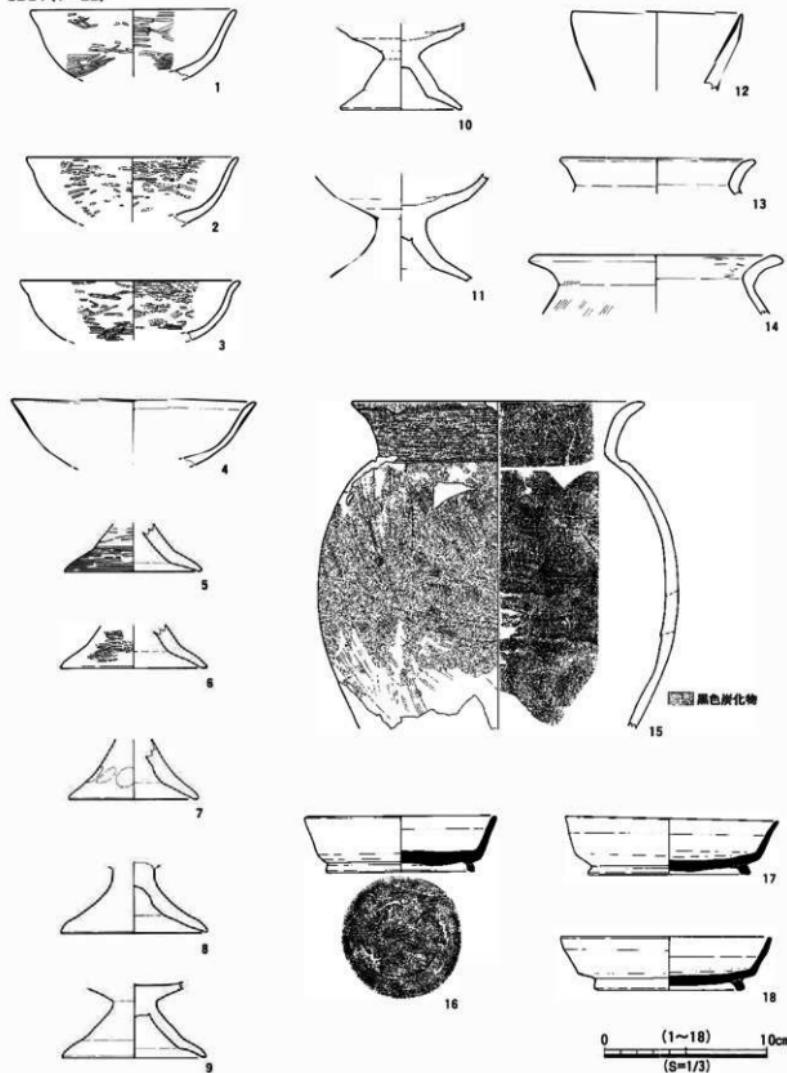
第6表 与島B地点遺跡 遺物類聚表(1)

遺物番号	出土地点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				持因番号	因縁番号	観察所見など
					口径 (長さ)	底高 (厚さ)	底径 (幅)	台径			
1	SDbh 下層	土器類	土師器	高环	12.6	—	—	—	27	9	环部の外表面横方向へラミガキ。
2	SDbh 下層	土器類	土師器	高环	13.0	—	—	—	27	9	环部内外面横方向へラミガキ。
3	SDbh 中層	土器類	土師器	高环	13.5	—	—	—	27	9	环部内外面横方向へラミガキ。
4	SDbh 中層	土器類	土師器	高环	15.0	—	—	—	27	9	环部内外面横溝。
5	SDbh 下層	土器類	土師器	高环	—	—	8.4	—	27		脚部内面上半段横方向ナジ。下横ナジ。脚部外側横方向へラミガキ。外側は炭素焼成により黒色を呈する。
6	SDbh 中層	土器類	土師器	高环	—	—	9.0	—	27		脚部内面ナジ、外側横方向へラミガキ。
7	SDbh 盛土	土器類	土師器	高环	—	—	8.0	—	27		脚部内外面横ナジ。外側には脂質オサの痕跡も認められる。
8	SDbh 上層	土器類	土師器	高环	—	—	9.0	—	27	8	企理織のため調査直後はほとんど見えないが、脚部外側に横方向へラミガキの痕跡が部分的に認められる。
9	SDbh 上層	土器類	土師器	高环	—	—	8.8	—	27	8	企理織のため調査直後はほとんど見えないが、脚部外側に横方向へラミガキの痕跡が部分的に認められる。
10	SDbh 下層	土器類	土師器	高环	—	—	7.5	—	27	6	内外面溝溝。
11	SDbh 中層	土器類	土師器	高环	—	—	—	—	27	11	环部内外面横溝のため調整直後はほとんど見えないが、横方向へラミガキと認められる。底部内面に剥離痕。脚部内面ナジ、外側横方向へラミガキ。
12	SDbh 下層	土器類	土師器	壺	10.6	—	—	—	27	9	口部内外面横横方向へラミガキ。ただし摩滅しており単位は見えない。
13	SDbh 下層	土器類	土師器	壺	12.0	—	—	—	27	9	9 口部内外面横横溝。
14	SDbh 上層	土器類	土師器	壺	15.6	—	—	—	27	9	口部内外面に横方向のハケ目。ただし外側は摩滅のためほとんど見えない。脚部内外面溝溝。外側に横方向のハケ目。口部から脚部にかけての外側に部分的に黒色炭化物付着。
15	SDbh 下層	土器類	土師器	壺	18.0	—	—	—	27	8	口部内外面に横方向のハケ目。脚部内面に横方向のハケ目。ただし下層ではハケ目があまり目立たない。脚部外側に斜め方向のハケ目。内側と外側とはハケ目。脚部の縦に幅があることか。同じ実文を用いてはいないとみられる。口部外側及び上端・下端を除く脚部外側は大部分に黒色炭化物が付着する。外側に比べれば薄い。
16	SDbh 上層・中層	土器類	頬張器	有台坪	11.6	3.4	9.8	9.1	27	8	8 体部内外面回転ナジ。底部外側回転ナジ。底部外側回転ナジ。中央部に横筋を削り痕を残す。内側に200の底部を破された状態で出土。
17	SDbh 中層	土器類	頬張器	有台坪	13.2	3.5	11.4	10.0	27	8	8 体部内外面回転ナジ。底部内面回転ナジ。外側へラ切削跡へラ削り。
18	SDbh 上層	土器類	頬張器	有台坪	12.9	3.2	10.8	9.3	27	8	8 体部内外面回転ナジ。底部内面回転ナジ。中央部にナジを加える。底部外側回転へラ削り後ナ。
19	SDbh 上層・中層	土器類	頬張器	長頸瓶	9.7	24.2	—	11.4	28	8	口部内外面回転ナジ。底部内面回転ナジ。底部外側上半回転ナジ。下半回転へ削り。ただし、回転へラ削りの上端は自然崩れの跡のため確認できず。底部外側ナジ・サエ。口部外側・外側・底部内面上半の大部分に自然剥離付着。脚部内面下半部でも部分的に自然剥離付着。脚部と瓶身の接合は、円盤閉塞法による。
20	SDbh 中層・下層	土器類	灰陶陶器	長頸瓶	—	—	—	—	28		9 瓶身内面回転ナジ。底部内面上半回転ナジ。下半回転へラ削り。底部内面回転ナジ。外側回転へラ削り。底部内面に自然剥離付着。底部を16の内面にはめ込んだ状態で出土。
21	SDbh 上層	土器類	灰陶陶器	長頸瓶	—	—	—	—	28		9 瓶身内面回転ナジ。底部内面回転ナジ。外側回転へラ削り。瓶身内面と外側全面に灰陶。瓶身と瓶身の接合は、円盤閉塞法による。
22	SDbh 下層	木器類	器具	壺	(残存3.7)	(0.3)	(残存3.9)	—	28	9	下端を丸く、歯齒式彫様の瓶部である。瓶身部分のはび全面に黒色漆が塗られている。縞長・対を逆に字形に曲げ、帶状の斜行線上に縞長している。施された材の縞長範囲は、1.2mm以上である。縞長の間隔は、縞長の1.5倍程度である。瓶身部分の下端付近には、模様に連続する縞長状の縞長上昇が認められ、それらを貫くように横方向の縞長・対が複数ある。東洋の材の縞長はタケ巻き。瓶身と壺との境に垂かれた帯もタケ巻き。
23	SDbh 下層	土器類	土師器	高环	—	—	8.4	—	28	8	脚部内外面横溝。

第7表 与島B地点遺跡 遺物観察表（2）

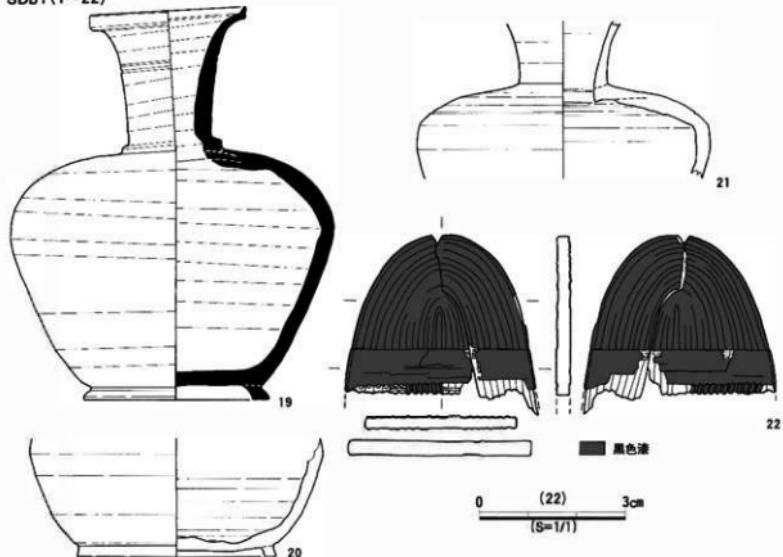
遺物 番号	出土地点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				種類番号	図版番号	観察所見など	
					口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	台径				
24	SD62 下層 SD8 上層	土器類	碗底器	楕円盤	17.6	—	—	—	26	8	天井部内面回転ナデナダ、外面回転ヘラ削り。体部内面回転ナデ、外面3cm/4cmの範囲に自然輪付着。天井部外間に墨書き「口」。	
25	SD62 下層	土器類	碗底器	楕円盤	14.6	3.2	—	—	26	8	天井部内面回転ナデナダ、外面回転ヘラ削り。楕円部外側ナデ、体部内外面回転ナデ。外面に自然輪付着。	
26	SD62 下層 SD8 中層・下層	土器類	碗底器	有台坪	15.6	3.7	12.9	12.1	26	8	体部外面回転ナデ、底部内面回転ナデ後ナデ、外面回転ヘラ削り。底部外間に墨書き「口」。	
27	SD62 下層	土器類	碗底器	有台坪	13.2	3.1	11.4	9.6	26	8	体部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ、外面回転ヘラ削り。体部外面上部に自然輪付着。	
28	SD62 下層	土器類	碗底器	有台坪	13.5	3.3	11.4	10.0	26	8	体部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ、外面回転ヘラ削り。体部外面上部に自然輪付着。	
29	SD64 下層	土器類	土器類	高坪	12.3	—	—	—	26	9	环状外面溝。	
30	試掘坑1 -	土器類	土器類	高坪	15.4	—	—	—	29	9	环状外面溝、外面横方向ヘラスギキ。	
31	試掘坑1 -	土器類	土器類	高坪	—	—	9.0	—	29	8	底部内面ナデ、外面横方向ヘラスギキ。	
32	試掘坑1 -	土器類	土器類	高坪	—	—	8.4	—	29	8	底部内面ナデ、外面横方向ヘラスギキ。	
33	試掘坑1 -	土器類	土器類	高坪	—	—	10.0	—	29	8	底部内面剥離のため調査後不明。外面横方向ヘラスギキ。	
34	試掘坑1 -	土器類	土器類	高坪	—	—	9.2	—	29	9	外面部溝。	
35	試掘坑1 -	土器類	土器類	盤	11.6	—	—	—	29	9	口部外側内横方向ヘラスギキ。	
36	E13 Ⅱ層直上	土器類	碗底器	坪舟	約9.8	—	—	—	29	9	体部内面回転ナデ、口縁部内面回転ナデ、口縫部を除く体部外間に自然輪付着。	
37	H10 Ⅲ層直上	土器類	碗底器	返り皿	12.2	—	—	—	29	9	天井部内面回転ナデ。天井部外側回転ヘラ削り、ただし頂部は回転ナデ。体部外面回転ナデ。摩滅が著しく、内面の残りは本来より多い可能性が高い。	
38	H10 Ⅲ層直上	土器類	碗底器	有台坪	—	—	—	11.3	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面回転ヘラ削り。底部内面平滑化。	
39	試掘坑4 -	土器類	碗底器	短盤蓋	7.2	—	—	—	29	9	口部外側内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。口縫部内面外縫部に自然輪付着。	
40	F11 Ⅰ層	土器類	灰陶器	穂	—	—	—	—	29	9	体部外面回転ナデ。	
41	不明 Ⅰ層	土器類	灰陶器	穂	—	—	—	—	7.2	29	9	底部内面回転ナデ、外面ナデ。内面の体部・底部間に重ね焼成。
42	F11 Ⅰ層	土器類	灰陶器	穂	—	—	—	—	6.4	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面ナデ。内面の体部・底部間に重ね焼成。
43	G9 Ⅰ層	土器類	灰陶器	穂	—	—	—	—	8.4	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面ナデ。
44	F11 Ⅰ層	土器類	灰陶器	穂	—	—	—	—	8.9	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面に回転糸切り痕。
45	E11 Ⅱ層	土器類	灰陶器	皿	—	—	—	—	7.6	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ、外面回転ヘラ削り。
46	F11 Ⅱ層	土器類	灰陶器	皿	—	—	—	—	7.4	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面回転ヘラ削り。
47	G11 Ⅱ層	土器類	灰陶器	不明	—	—	—	—	7.2	29	9	底部内面回転ナデ。中央部内面に凹み切られ痕。底部内面平滑化。
48	F11 Ⅰ層	土器類	山茶碗	小皿	—	—	—	約3.0	—	29	9	体部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外面に回転糸切り痕。紺土織密で灰白色を呈する。北高系山茶碗。
49	不明 Ⅰ層	木器類	器具	曲物底板	(既存6.6)	(0.5)	(既存1.8)	—	29	9	後縁部分は全体の1/3程度みられる。本來の平面形状は円形の可能性が高い。なお、右端は欠失している可能性がある。柱目。	
50	N14 -	木器類	土木部材	枝	(既存50.3)	(4.0)	(4.3)	—	29	—	上端付近は齧食のため原形とどめられない。下端は5方向から斜めに削っているが、先端を尖らせていない。下端は平らな切断面である。芯持。	
51	N14 -	木器類	土木部材	枝	(既存55.3)	(4.8)	(8.0)	—	29	—	上端を欠く。下端は3方向から斜めに削っているが、先端を尖らせていない。下端は平らな切断面である。芯持。	
52	N14 -	木器類	土木部材	枝	(91.1)	(4.0)	(4.3)	—	29	—	下端は5方向から斜めに削っているが、先端を尖らせていない。下端は平らな切断面である。芯持。	
53	試掘坑1 -	石器類	石核石器	打製石斧	(11.6)	(2.0)	(5.3)	—	29	—	石材は矽長岩。重量150.5kg。	
54	J11 Ⅰ層	金属性器	古鏡	近世鏡	(2.6)	(0.1)	(2.5)	—	29	—	銅製。「寛永通宝」。重さ2.7g。	

溝  
SDb1(1~22)

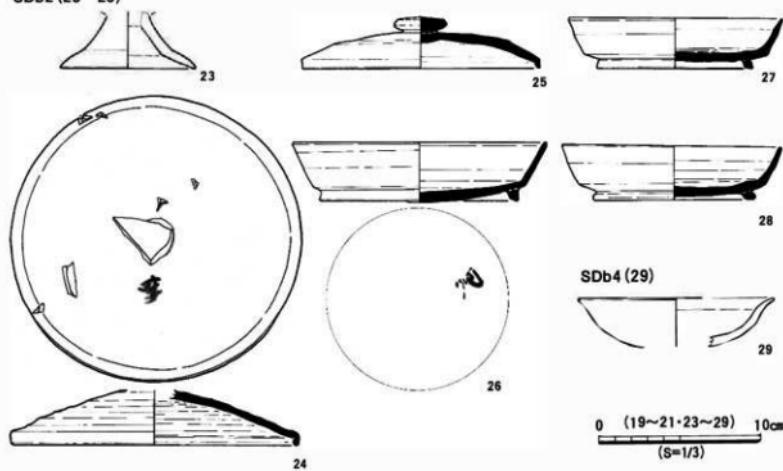


第27図 与島B地点遺跡 遺構内出土遺物（1）

SDb1(1~22)

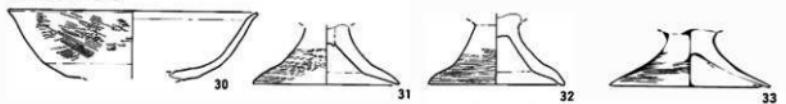


SDb2(23~28)

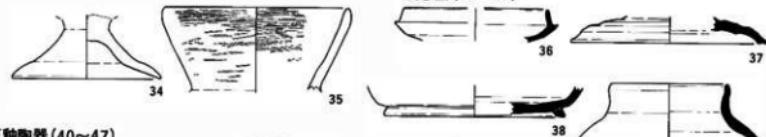


第28図 与島日地点遺跡 遺構内出土遺物 (2)

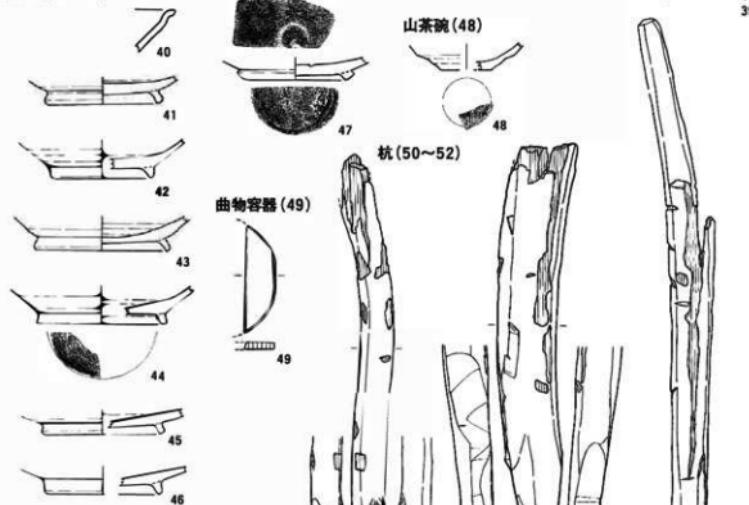
土器(30~35)



須恵器(36~39)



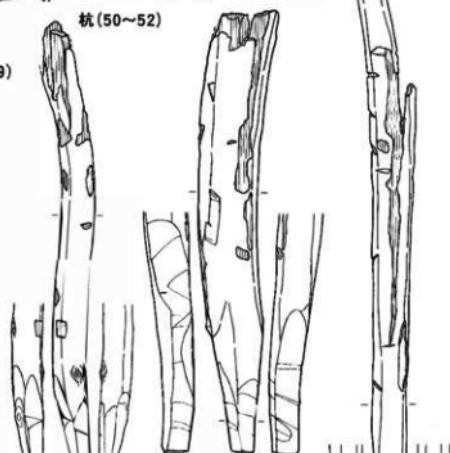
灰釉陶器(40~47)



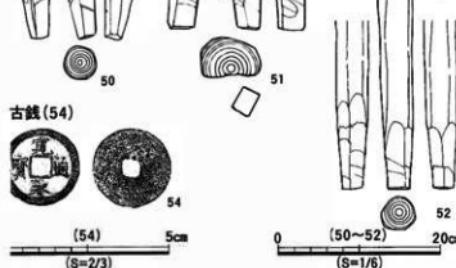
山茶碗(48)



杭(50~52)



打製石斧(53)



古銭(54)



(54) 5cm  
(S=2/3)

0 (50~52) 20cm  
(S=1/6)

29図 与島B地点遺跡 包含層出土遺物

## 第4章 与島C地点遺跡の調査成果

### 第1節 基本層序

調査前の与島C地点遺跡発掘区は、全域が水田であり、調査区の西側には山に沿うように水路が流れる。調査区は西から東に傾斜する。調査西側部分の標高値は約 578.4m と高い。一方、調査東側部分の標高値は約 576.1m と低く、比高差は 2.3m ある。

表土層（I層）は近世以降の水田耕作に伴う造成土である。その下に沼状地埋土（II層）、遺物包含層（III層）が堆積する。試掘・確認調査（第2図）の結果では、西側の試掘坑1・試掘坑2において地表面から 50 cm 程掘り下げた段階で沼状地埋土（II層）を確認している。層厚は 20 cm 程度であるが、南側の山際は 50 cm と厚く堆積する。また、基本層序1（第30図）では、沼状堆積物の下層で遺物包含層を確認している。一方、北側に位置する試掘坑3～7においては、沼状地埋土（II層）は堆積せず、地表面から 30～60 cm 程掘り下げた段階で包含層（III層）を確認している。このことから、調査区の南側の山際は、現在と同じように水が流れ、湿地・沼地化し、これに伴う土が堆積したと思われる。

調査ではIV層上面を遺構検出面として調査をした。発掘調査による遺構検出面から推定する旧地形（第31図）では、西から東に向かって傾斜し、南側はやや谷状に窪む。最下層の地山層（IV層）は周辺のウバガ平遺跡・野内遺跡・三枝城跡などと同じく、濃飛流紋岩の岩盤が風化してきた砂質シルト層を基本としているが、与島B地点遺跡と比べ、供給される風化礫は径 50 cm 以内と小さく、礫径もばらつきが少ない。このことから、谷部分からの土砂が徐々に堆積したと考えられる。また、基本層序3の6層のように粘質土や微細砂をラミナ状に含む細砂及び粘土層であることから、II層と同様に比較的緩やかな水の流れか、沼地や湿地のような静水状態で堆積した可能性がある。

なお、今回の調査では、各遺構の断面実測時などに、適宜、地山（IV層）を断ち割り、土層の堆積状況を確認しているので、本書でも分層線及び土層注記をそのまま掲載した。



写真1 基本層序1

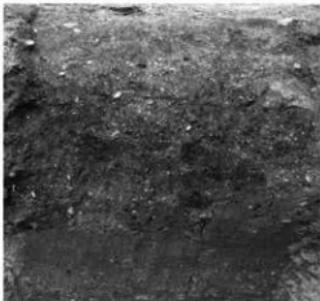
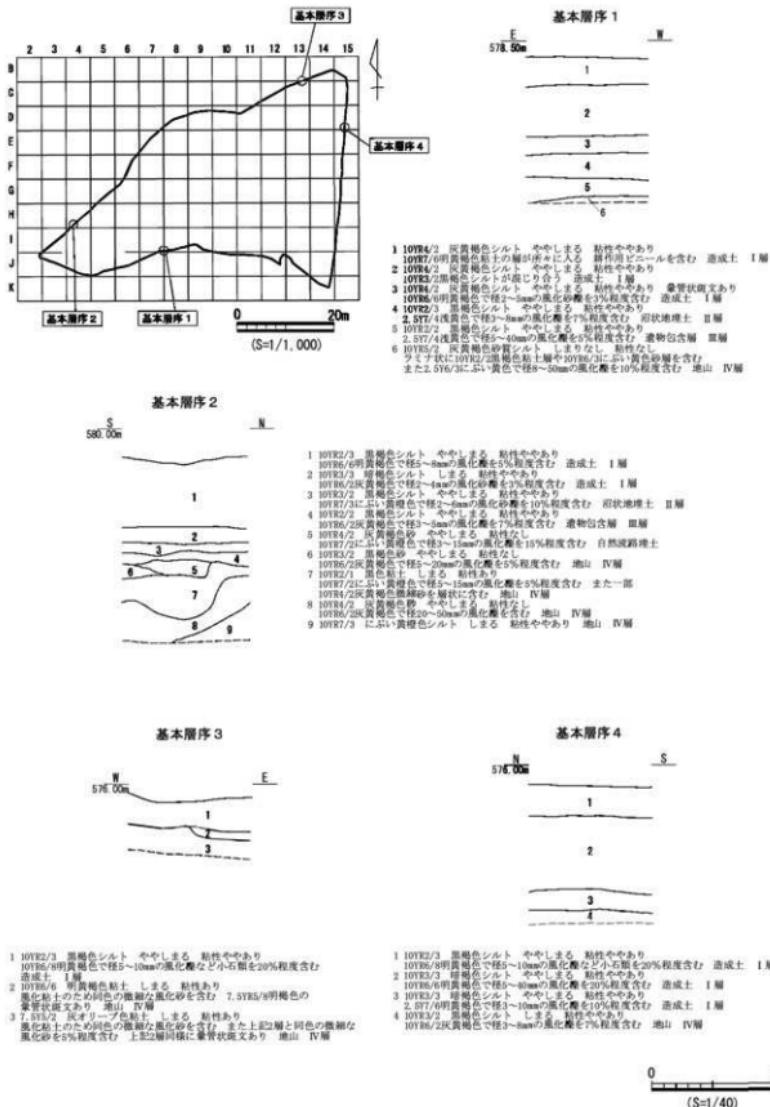


写真2 基本層序2



第30図 与島C地点遺跡 基本層序

## 第2節 遺構

与島C地点遺跡で検出した遺構は、ピット（S P）23基、土坑（S K）72基、自然流路（N R）1基、合わせて96基である。本書では、遺構記号のあとに与島C地点遺跡所属であることを明示するため「c」を加え、例えば与島C地点遺跡1号土坑であれば「S K c 1」のように表示している。

### 1 ピット（第36図～第38図）

建物・柱列の柱穴などの可能性のある穴は23基検出し、第36図～第38図にすべて図示した。それらのうち、柱根が残存するものは4基を数える（S P c 7・8・9・10）。

ピットの並びの検証からは、明確に掘立柱建物跡と認定できる組み合わせは確認できなかつた。しかし、包含層からも柱根が出土していることから（196～198）、当遺跡の場合、柱穴のすべてが痕跡をとどめていたわけではないことは明らかである。発掘区内にいくつかの掘立柱建物が存在した可能性は高いと捉えるべきであろう。ピット内からの出土遺物自体は僅少であるものの、発掘区内の出土遺物の大半を占めるのが須恵器・灰釉陶器であることから、それらを古代に属する遺構とみて差し支えない。さらに、第6章において詳述するが、出土遺物の組成等に三枝城跡発掘区で検出された山林寺院跡の出土遺物と多くの共通点が認められることに注目すべきである。三枝城跡の山林寺院跡と存続時期が重なる可能性は高い。確証はないとはいえ、当発掘区に寺院の関連施設が存在した可能性を視野に入れるべきであろう。

### 2 土坑（第39図）

ピット以外の穴を土坑とした。検出72基のうち、9基を選んで第39図に図示した。特記すべき特徴を見出せるものはないが、上記のとおり、当遺跡では掘立柱建物跡の検出が困難であったことから、土坑に分類した遺構の中に柱穴がいくらか含まれる可能性は高いと思われる。

### 3 自然流路（第40図～第45図）

N R c 1は、人為的な制御が認められない流水痕跡である。検出部分の長さ54.00m、幅3.10m、深さ0.12mを測る。ほぼ等高線に直交して延びており、山側からの湧水が平地側に流れた痕跡とみられる。

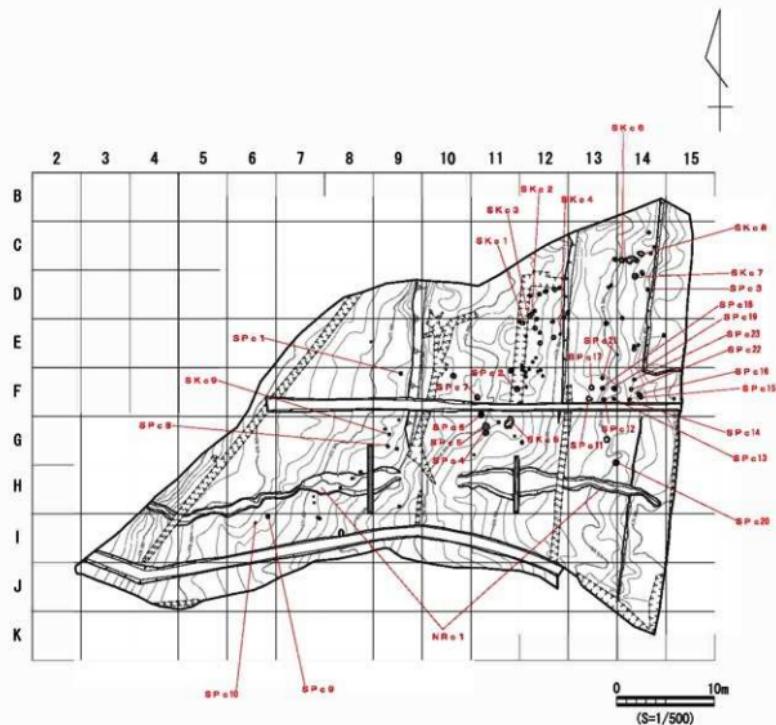
出土遺物は多く、破片数で467点を数える。これは当遺跡の出土遺物総数2,710点の17.2%に当たる。内訳は、土師器123点、須恵器254点、灰釉陶器5点、木器類3点、植物遺存体82点である。サブトレンチを設けた2区域、すなわち8H～9Hグリッドと11Hグリッドにおいて、特に集中して出土している（第42図～第45図）。須恵器のうち帰属時代が古墳時代に溯源するものは稀であり、大部分は古代の遺物である。そのほか、从具とされる鉄鉢が3個体も出土していること（89～91）、漆の使用に関わる可能性のある個体が少なくないこと（63・76・77・84）、以上2点を目立つ特徴として挙げることができる。それらの多くは、当発掘区内に存在したとみられる建物跡や、当遺跡の上方に位置する三枝城跡発掘区の山林寺院跡からの流れ込み品であろう。

第8表 与島C地点遺跡 遺構一覧表(1)

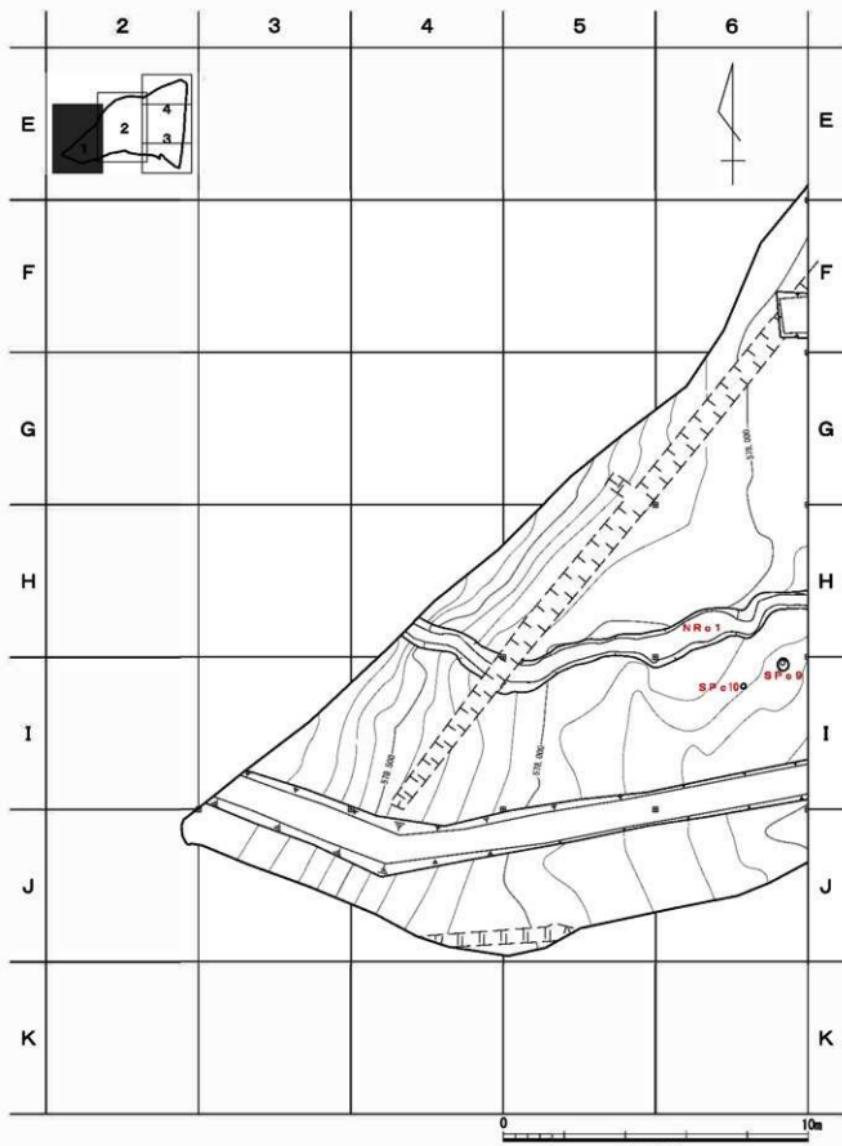
種別	遺構番号	登録番号	検出ゾーン	大きさ(m)			出土遺物	先後関係
				東西	南北	長軸長		
						IV層		
ピット	SPe1	8	F	IV層		0.32	0.30	0.24
	SPe2	27	I	F	IV層	0.55	0.50	0.42 土師器2、灰陶陶器1、木器類8、植物遺存体1
	SPe3	128	I	D	IV層	0.36	0.34	0.22 木器類1
	SPe4	68	I	G	IV層	0.56	0.47	0.17
	SPe5	69	I	G	IV層	0.70	0.64	0.27 瓢箪器1、木器類1
	SPe6	71	I	F+G	IV層	0.59	0.56	0.28 木器類4
	SPe7	13	I	F	IV層	0.54	0.46	0.24 木器類1
	SPe8	145	I	G	IV層	0.27	0.15	0.25 木器類1
	SPe9	150	I	I	IV層	0.40	0.36	0.32 木器類1
	SPe10	151	I	I	IV層	0.14	0.10	0.20 木器類1
	SPe11	163	I	F	IV層	0.56	0.48	0.04 木器類1
	SPe12	164	I	F	IV層	0.36	0.36	0.18
	SPe13	165	I	F	IV層	0.33	0.27	0.07
	SPe14	166	I	F	IV層	0.23	0.27	0.12
	SPe15	167	I	F	IV層	残存0.30	0.38	0.29 木器類1
	SPe16	175	I	F	IV層	0.46	0.42	0.50
	SPe17	168	I	F	IV層	0.51	0.48	0.21
	SPe18	169	I	F	IV層	0.49	0.36	0.22
	SPe19	170	I	F	IV層	0.52	0.45	0.24
	SPe20	173	I+I+	G	IV層	0.60	0.52	0.34
	SPe21	174	I	F	IV層	0.33	0.28	0.14
	SPe22	177	I	F	IV層	0.31	0.30	0.12
	SPe23	178	I	F	IV層	0.32	0.25	0.12
土坑	SKc1	24	I	E	IV層	0.42	0.34	0.05 瓢箪器2、灰陶陶器1
	SKc2	47	I	D	IV層	0.40	0.32	0.13 瓢箪器1
	SKc3	48	I	D	IV層	残存0.43	0.33	0.15
	SKc4	74	I	E	IV層	0.21	0.20	0.10 土師器1
	SKc5	83	I	G	IV層	1.25	0.85	0.09 灰陶陶器1、木器類2、植物遺存体1
	SKc6	112	I	C	IV層	0.54	0.46	0.07 瓢箪器1
	SKc7	126	I	D	IV層	0.60	0.52	0.15 瓢箪器4
	SKc8	131	I	C	IV層	0.66	0.51	0.08 瓢箪器1
	SKc9	156	I	G	IV層	0.28	0.19	0.17 瓢箪器1
	SKc10	137	I	H	IV層	0.12	0.11	0.11 植物遺存体1
	SKc11	138	I	H	IV層	0.17	0.15	0.18 植物遺存体1
	SKc12	149	I	I	IV層	0.52	0.22	0.06 植物遺存体17
	SKc13	152	I	I	IV層	残存0.70	0.47	0.12
	SKc14	154	I	H	IV層	0.22	0.21	0.12
	SKc15	153	I	H	IV層	0.23	0.18	0.13 木器類22
	SKc16	139	I	H	IV層	0.30	0.25	0.10
	SKc17	5	I	E	IV層	0.18	0.16	0.14
	SKc18	157	I	G	IV層	0.21	0.17	0.10
	SKc19	142	I	G	IV層	0.26	0.26	0.07
	SKc20	159	I	G	IV層	0.17	0.15	0.06
	SKc21	144	I	H	IV層	0.28	0.26	0.10
	SKc22	12	I	F	IV層	0.82	0.42	0.08
	SKc23	80	I	G	IV層	0.20	0.16	0.08
	SKc24	155	I	G	IV層	0.30	0.26	0.04
	SKc25	85	I	G	IV層	0.18	0.17	0.05
	SKc26	90	I	G	IV層	0.41	0.26	0.31

第9表 与島C地点遺跡 遺構一覧表(2)

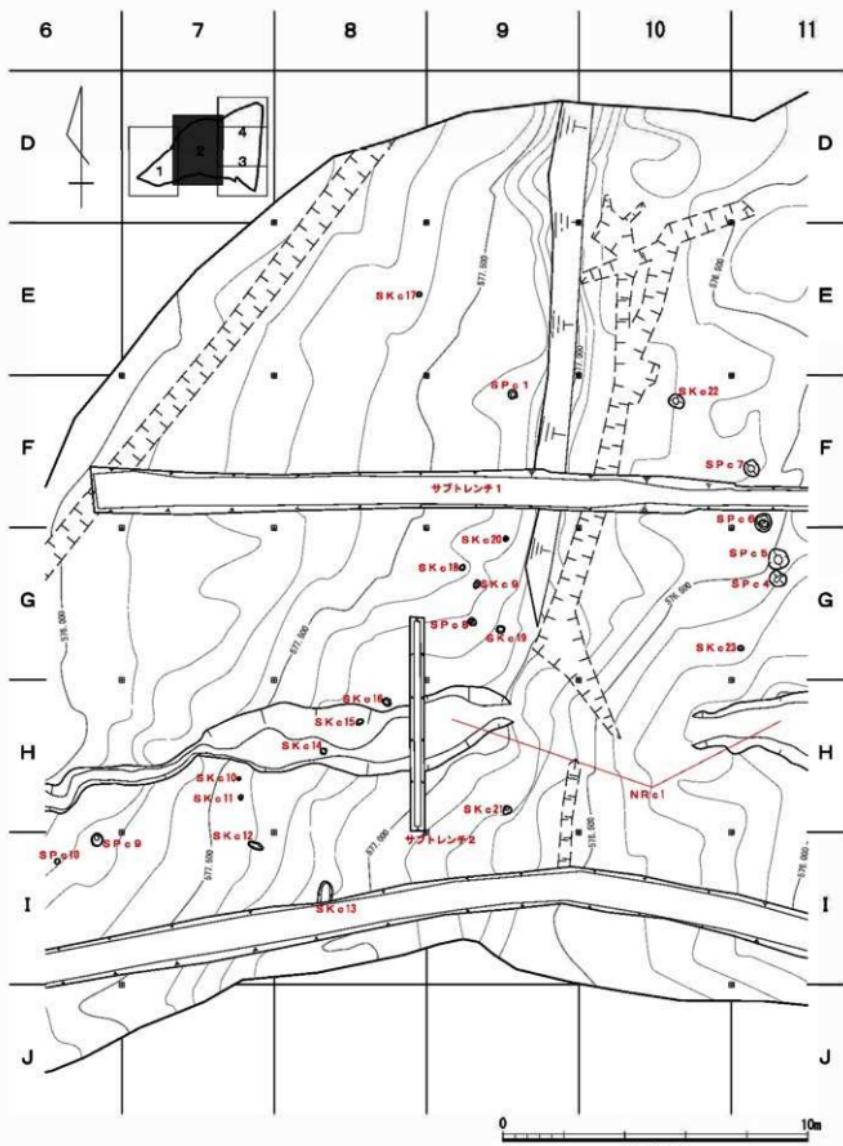
種別	遺構番号	登録番号	検出グリッド 東西 南北	検出手	大きさ(m)			出土物	先後関係		
					大きさ(m)						
					長軸長	短軸長	深さ				
土坑	SKc27	16	11 F	IV層	0.57	0.46	0.12				
	SKc28	172	11~12 F	IV層	0.52	残存0.20	0.16	土師器1			
	SKc29	17	12 E	IV層	0.29	0.28	0.10				
	SKc30	18	12 F	IV層	0.29	0.25	0.08				
	SKc31	23	11~12 E	IV層	0.32	0.20	0.09				
	SKc32	38	12 E	IV層	0.27	0.19	0.13				
	SKc33	54	12 F	IV層	0.23	0.22	0.12	木器類10			
	SKc34	31	12 F	IV層	0.29	0.25	0.25				
	SKc35	32	12 F	IV層	0.28	0.26	0.08				
	SKc36	33	12 F	IV層	0.36	0.24	0.15				
	SKc37	34	12 E	IV層	0.24	0.24	0.07	須恵器1			
	SKc38	147	12 E	IV層	0.22	0.19	0.10				
	SKc39	52	12 F	IV層	0.14	0.12	0.07				
	SKc40	51	12 F	IV層	0.28	0.23	0.14				
	SKc41	53	12 F	IV層	0.24	0.19	0.09				
	SKc42	37	12 E	IV層	0.41	0.38	0.16				
	SKc43	42	12 E	IV層	0.31	0.21	0.15				
	SKc44	41	12 E	IV層	0.42	0.41	0.10				
	SKc45	46	12 D~E	IV層	0.40	0.29	0.17	須恵器1			
	SKc46	73	12 E	IV層	0.45	0.40	0.12	須恵器3、植物遺存体1			
	SKc47	79	12 E	IV層	0.39	0.26	0.11				
	SKc48	121	13 G	IV層	0.54	0.54	0.11				
	SKc49	116	13 E	IV層	0.44	0.34	0.24				
	SKc50	140	13~14 E	IV層	0.26	0.16	0.08				
	SKc51	117	14 D~E	IV層	0.33	0.30	0.15	土師器2			
	SKc52	136	14 E	IV層	残存0.34	0.38	0.19		SKc53より古い		
	SKc53	135	14 E	IV層	0.29	0.29	0.16		SKc52より新しい		
	SKc54	125	14 E	IV層	0.28	0.24	0.11				
	SKc55	158	14 E	IV層	0.33	0.29	0.11				
	SKc56	171	15 F	IV層	0.22	0.21	0.21				
	SKc57	101	12 D	IV層	0.36	0.33	0.09				
	SKc58	102	12 D	IV層	0.49	0.34	0.08				
	SKc59	95	12 D	IV層	0.34	0.26	0.15				
	SKc60	98	12 D	IV層	0.37	0.30	0.14				
	SKc61	99	12 D	IV層	0.36	0.34	0.12	須恵器1			
	SKc62	100	12 D	IV層	0.47	0.36	0.22				
	SKc63	106	12 D	IV層	0.47	0.41	0.12	土師器1			
	SKc64	107	12 D	IV層	0.31	0.27	0.07				
	SKc65	114	13 D	IV層	0.26	0.23	0.06				
	SKc66	113	13 D	IV層	0.34	0.22	0.19				
	SKc67	111	13 C	IV層	0.44	0.42	0.10				
	SKc68	129	14 C	IV層	1.42	0.74	0.13	土師器1			
	SKc69	127	14 D	IV層	0.50	0.32	0.22				
	SKc70	110	14 C	IV層	0.30	0.30	0.14				
	SKc71	133	14 C	IV層	0.28	0.26	0.16	木器類1			
	SKc72	134	14 C	IV層	0.28	0.24	0.14	須恵器1			
自然流路	NRc1	176	4~14 H-I	IV層	残存54.60	3.10	0.12	土師器123、須恵器254、灰釉陶器5、木器類3、植物遺存体82			



第31図 与島C地点遺跡 発掘区全域図

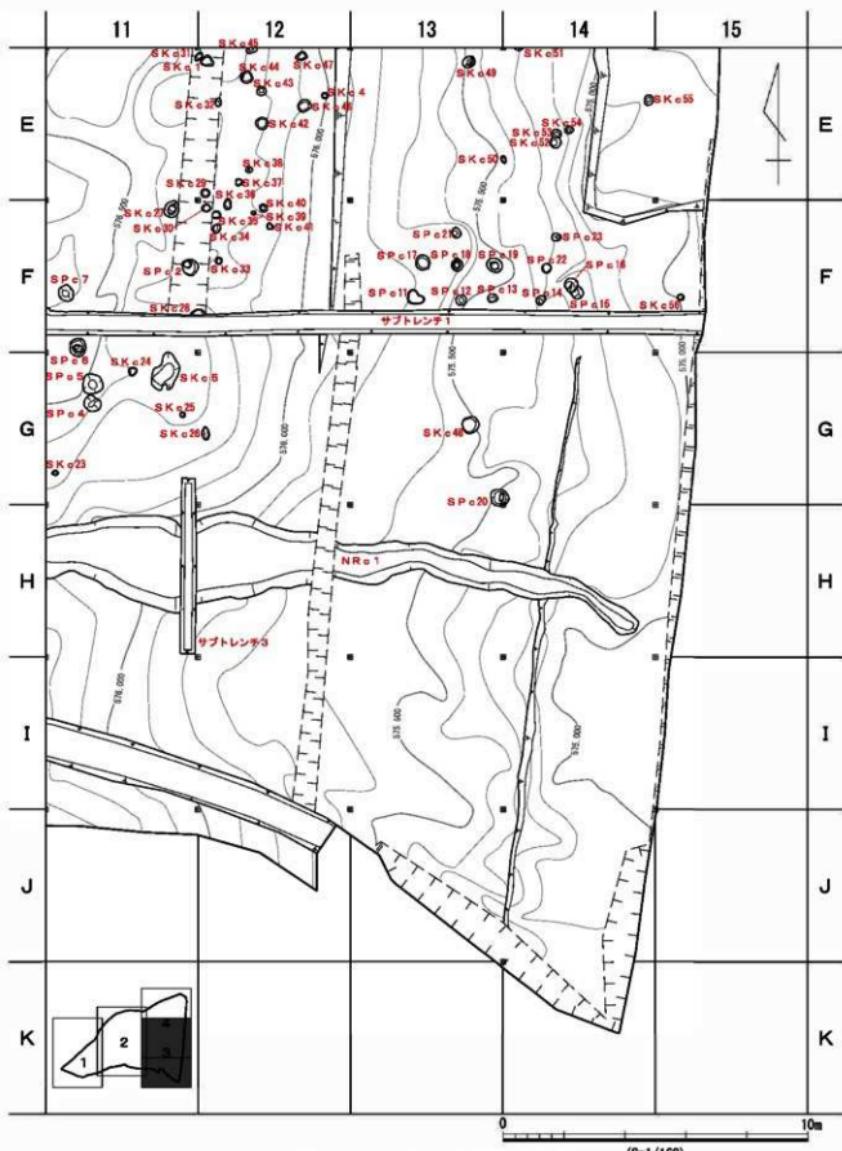


第32図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(1) (S=1/160)

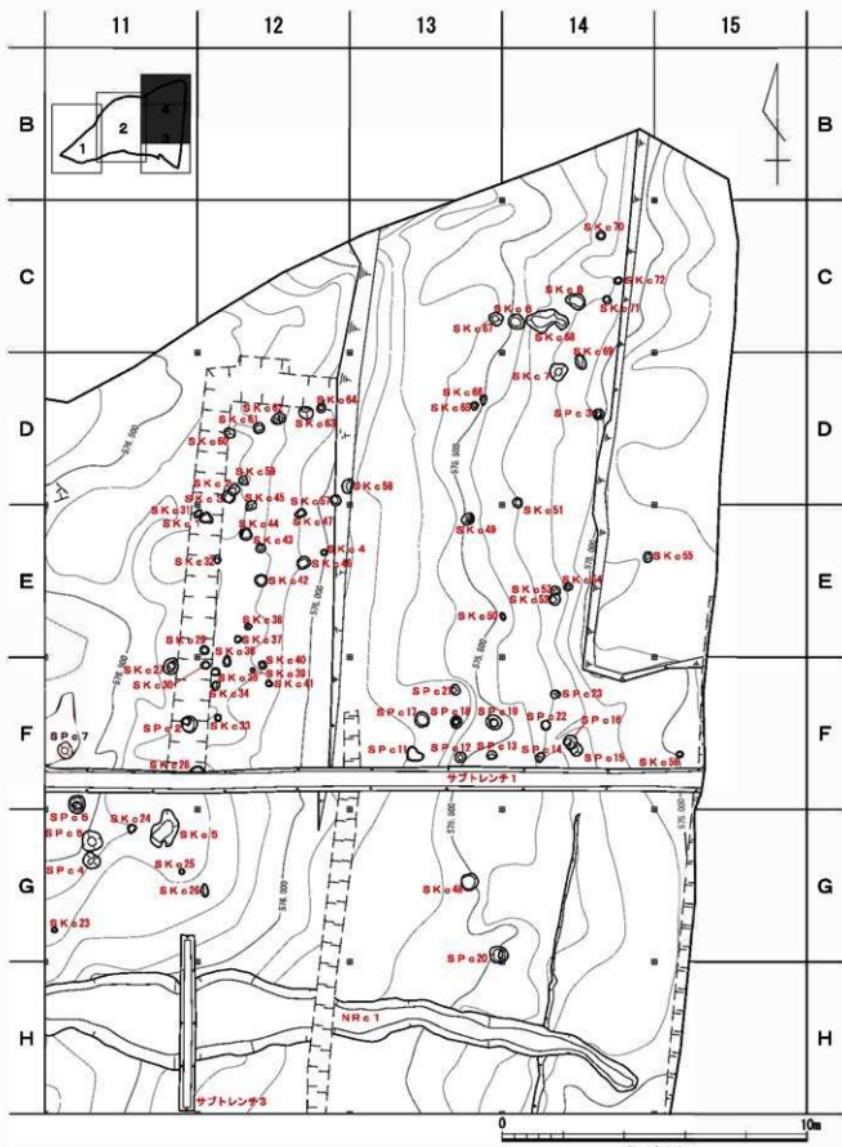


第33図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(2)

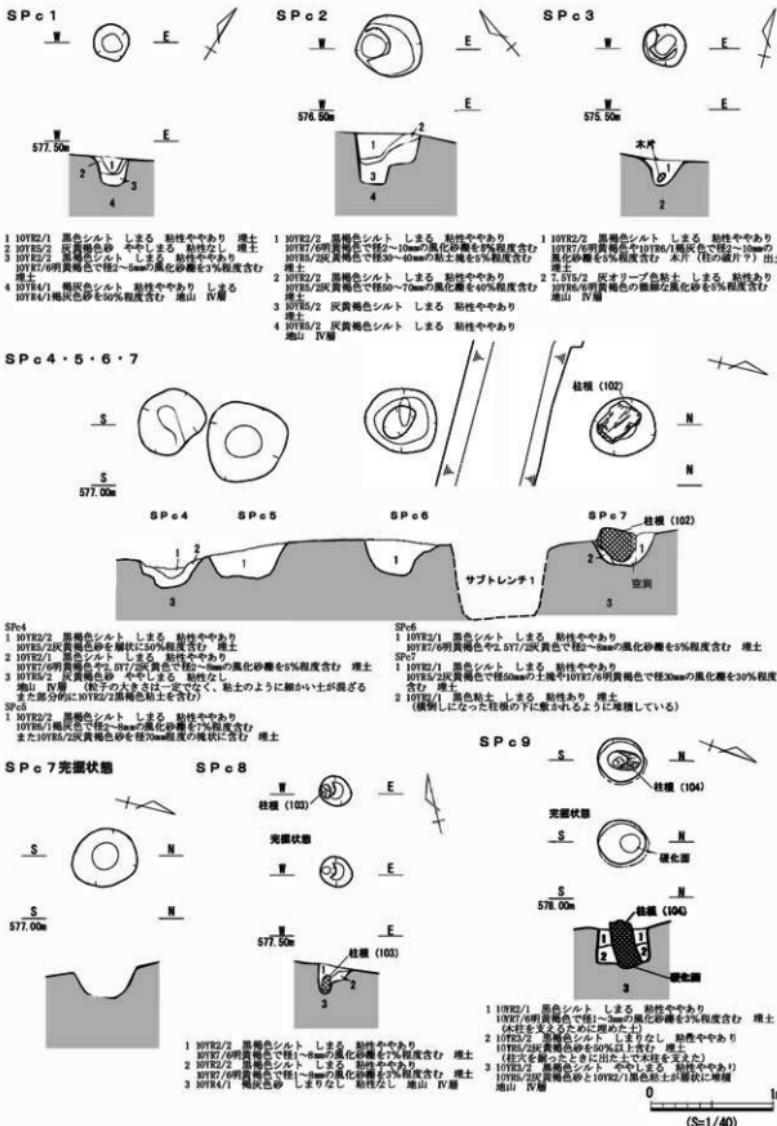
(S=1/160)



第34図 与島C地点造跡 発掘区全域分割図(3)

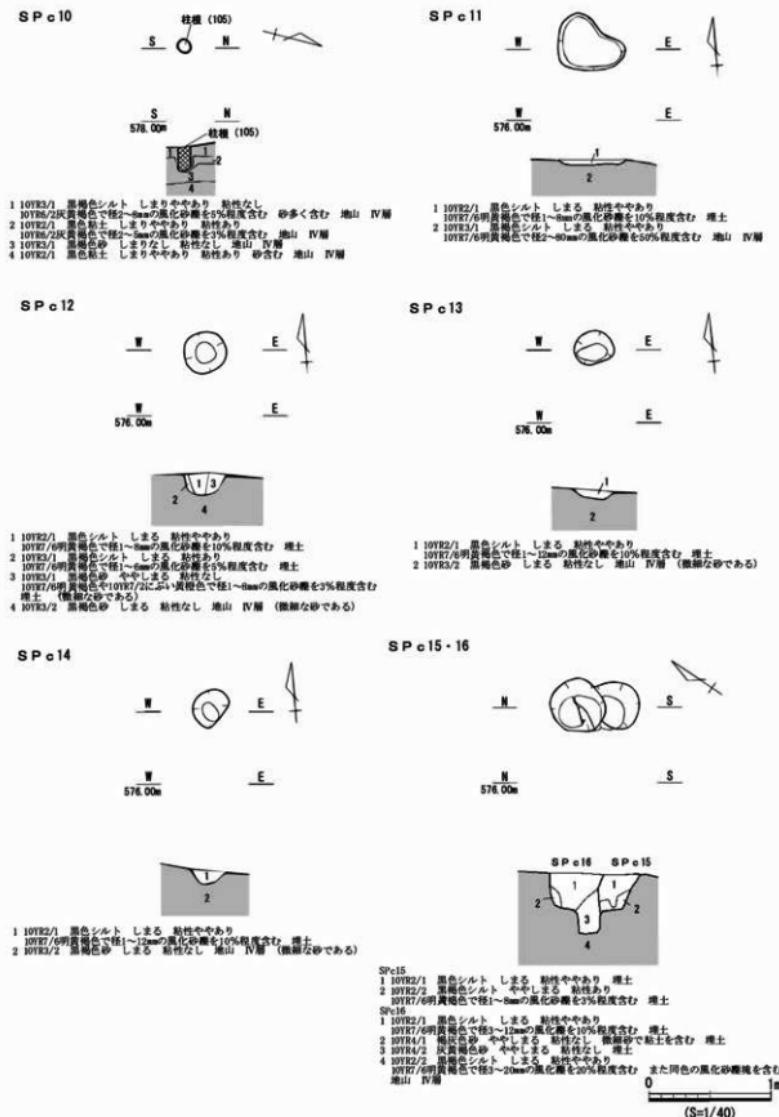


第35図 与島C地点遺跡 発掘区全域分割図(4)



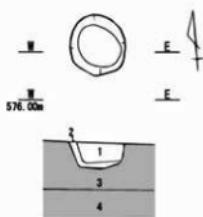
第36図 与島C地点遺跡 ピット(1)

## 56 第4章 与島C地点遺跡の調査成果



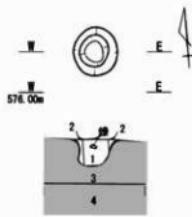
第37図 与島C地点遺跡 ピット(2)

S P c 17



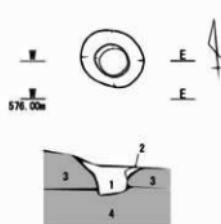
- 1 10YR2/1 黒色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6 明黄褐色で径1~4mmの風化砂礫を10%程度含む 墓土
- 3 10YR2/1 黒色シルト しまる (柱の周りに入れた土)
- 4 10YR7/3に二、三種色で径1~4mmの風化砂礫を5%程度含む 墓土
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト しまる 新色なし 地山 IV層 (微細な砂である)
- 6 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり 同色の粘土含む 地山 IV層 (微細な砂である)

S P c 18



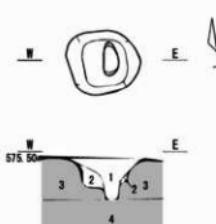
- 1 10YR2/1 黒色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6に二、三種色で径1~4mmの風化砂礫を10%程度含む 墓土
- 3 10YR2/2 黄褐色シルト しまる (柱の周りに入れた土)
- 4 10YR2/2 黄褐色シルト しまる 粘性なし 墓土 IV層 (微細な砂である)
- 5 10YR2/2 黄褐色シルト しまる 粘性ややあり 同色の粘土含む 地山 IV層 (微細な砂である)

S P c 19



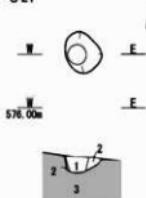
- 1 10YR2/1 黒色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6 明黄褐色で径1~4mmの風化砂礫を10%程度含む 墓土
- 3 10YR2/1 黒色シルト しまる (柱の周りに入れた土)
- 4 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし 地山 IV層 (微細な砂である)
- 5 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり 同色の粘土含む 地山 IV層 (微細な砂である)

S P c 20



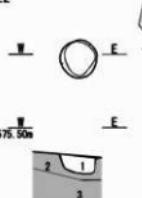
- 1 10YR2/1 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6に二、三種色で径1~4mmの風化砂礫を10%程度含む 墓土 (柱の周り)
- 3 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性あり
- 4 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし
- 5 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし
- 6 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (微細な砂である)
- 7 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし
- 8 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (微細な砂である)

S P c 21



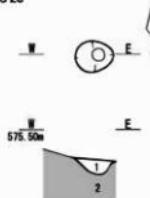
- 1 10YR2/1 黑色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6 明黄褐色で径1~4mmの風化砂礫を10%程度含む 墓土
- 3 10YR2/1 黑色シルト しまる 粘性ややあり
- 4 10YR7/6 明黄褐色で径1~4mmの風化砂礫を10%程度含む 墓土
- 5 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (柱の周りの土)
- 6 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし
- 7 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (柱の周りの土)

S P c 22



- 1 10YR4/1 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6に二、三種色で径1~4mmの風化砂礫を含む 墓土
- 3 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし
- 4 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (柱の周りの土)
- 5 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (柱の周りの土)
- 6 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (柱の周りの土)

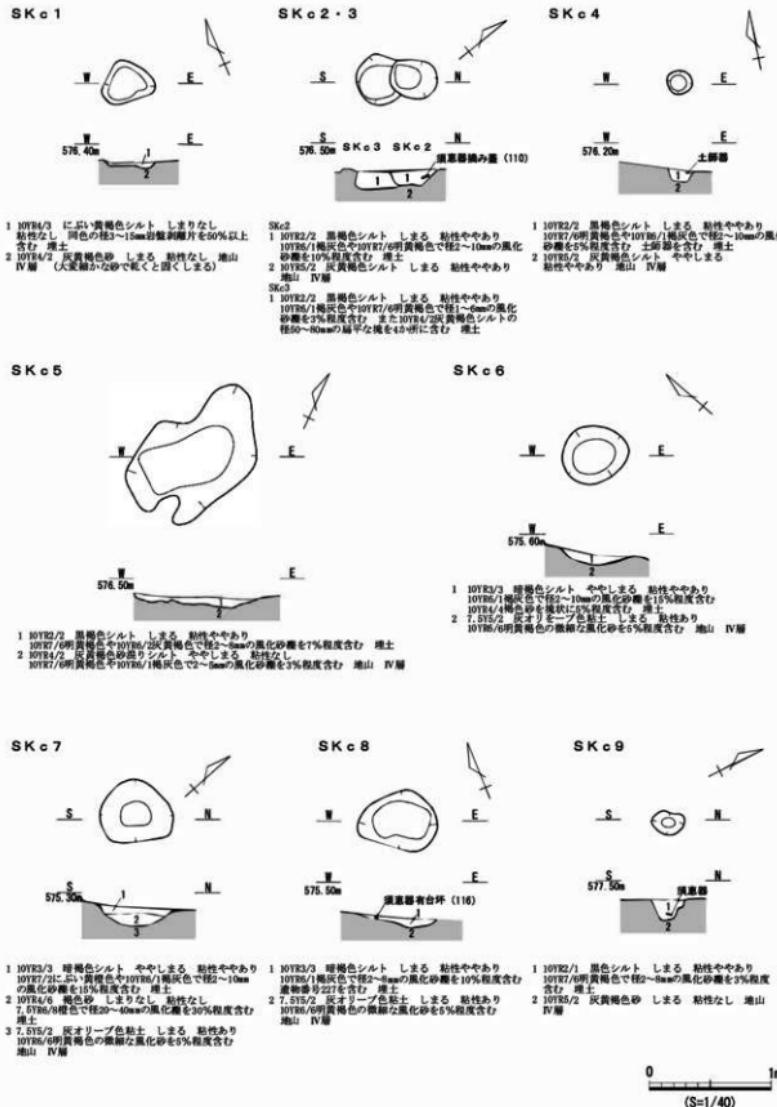
S P c 23



- 1 10YR4/1 黑褐色シルト しまる 粘性ややあり
- 2 10YR7/6に二、三種色で径1~4mmの風化砂礫を含む 墓土
- 3 10YR2/2 黑褐色シルト しまる 粘性なし
- 4 10YR2/2 黑褐色シルト しまる (柱の周りの土)

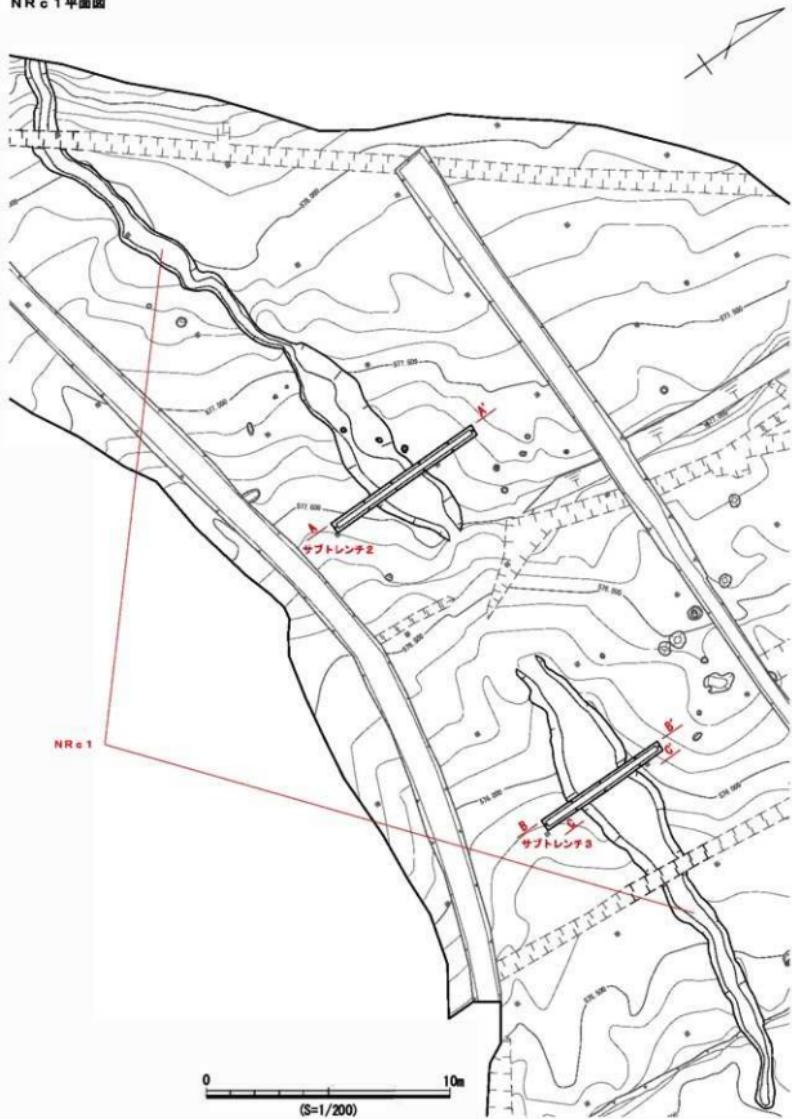
0 1m  
(S=1/40)

第38図 与島C地点遺跡 ピット(3)



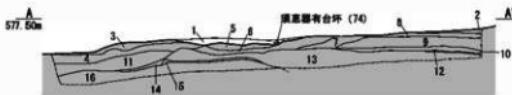
第39図 与島C地点遺跡 土坑

NR c 1 平面図



第40図 与島C地点遺跡 自然流路（1）

## NRC-1断面図



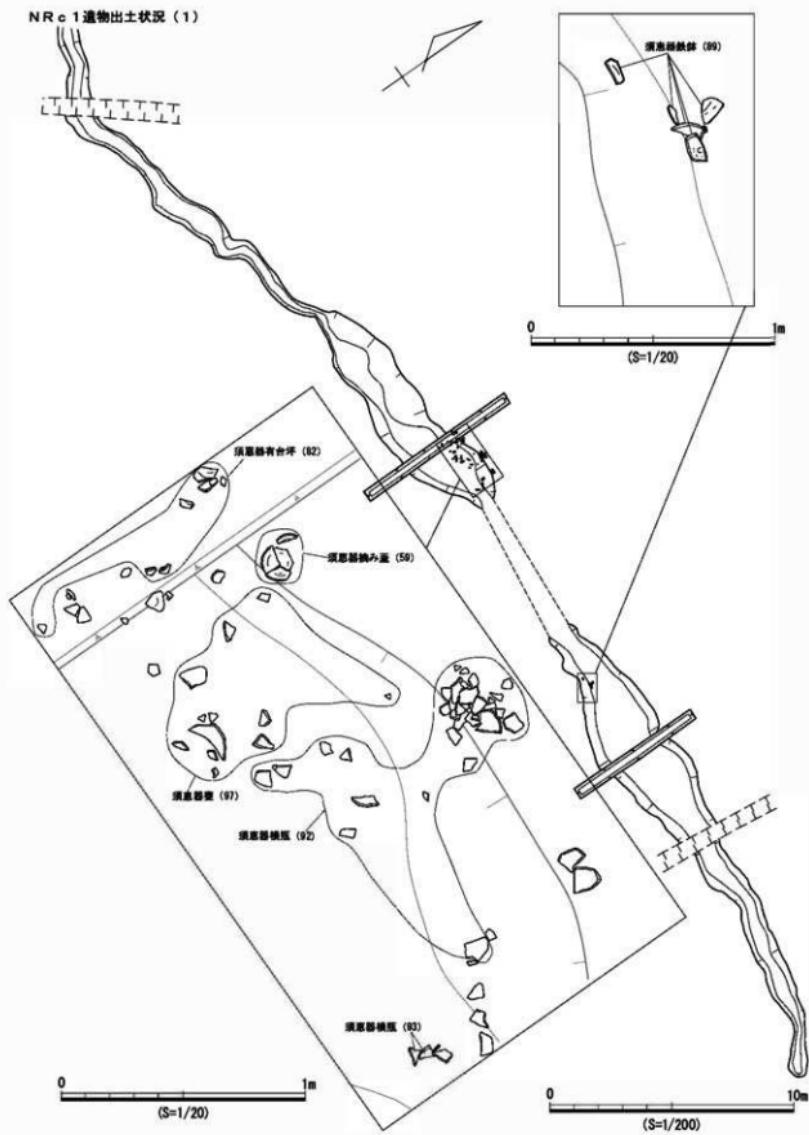
- 1 30TR4/2 黄褐色砂 ややしまる 粘性なし 30TR2/1 黒色粘土塊を含む NRC-1堆土 (廃物を含む サブトレシチ2の掘削中にこの層以外の層からの遺物の出土なし)
- 2 30TR4/1 黑色粘土 ルート しまる 粘性ややあり 地山 (同色の鐵色砂と粘土が層面を合て構成されている)
- 3 30TR4/2 黑色粘土 ルート しまる 粘性ややあり 地山 (同色の鐵色砂と粘土が層面を合て構成されている)
- 4 30TR3/2 黑色粘土 ややしまる 粘性ややかたり 10TR2/2 黑褐色粘土塊を多く含む 地山 IV層
- 5 30TR5/2 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2c-S1 黄褐色で径4~10mmの風化砂礫を5%程度含む 全体の40%程度の面積が7.5TR8/8明褐色に染まった風化砂礫を含む 地山 IV層
- 6 30TR4/2 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR2/2 黑褐色や0TR2/2 黑褐色の軽土塊を含む 地山 IV層
- 7 30TR2/2 黑色粘土 しまる 粘性ややあり 10TR3/1 黑褐色粘土が多く含む 10TR7/2c-S1 黄褐色で径2~5mmの風化砂礫を3%程度含む 地山 IV層
- 8 30TR2/1 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR2/2c-S1 黄褐色で径1~3mmの風化砂礫を3%程度含む 地山 IV層
- 9 30TR5/1 黑色粘土 ややしまる 粘性あり 10TR7/2c-S1 黄褐色で径10~20mmの風化砂礫を含む 地山 IV層
- 10 30TR2/1 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR3/1 黑褐色砂を層面に含む 地山 IV層
- 11 30TR2/1 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR3/1 黑褐色砂を層面に含む 地山 IV層
- 12 30TR4/1 黑色粘土 しまる 粘性あり 地山 IV層
- 13 30TR4/1 黑色粘土 ややしまる 粘性なし 7.5TR8/8明褐色に染まった層あり 地山 IV層
- 14 30TR4/2 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし 2.5TR6/6明褐色で径10~20mmの風化砂礫を含む 地山 IV層
- 15 30TR2/1 黑色粘土 ややしまる 粘性あり 地山 IV層
- 16 30TR5/3 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし 2.5TR6/6明褐色で径3~35mmの風化砂礫を50%以上含む 地山 IV層



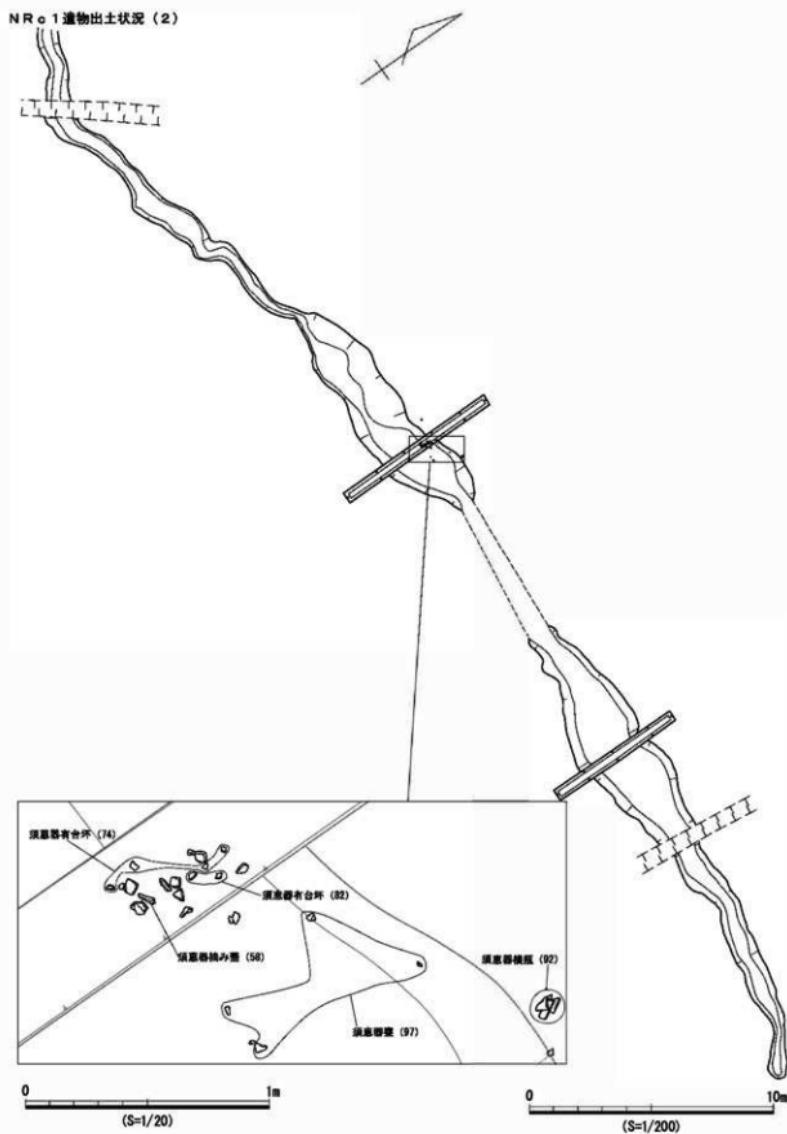
- 1 10TR4/1 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR8/2c 黄褐色の鐵細砂がラミナ状に堆積 NRC-1堆土
- 2 10TR2/1 黑色粘土 しまる 粘性あり NRC-1堆土
- 3 10TR4/2 黄褐色鐵細砂 しまりなし 粘性なし 10TR2/2 黄褐色粘土がラミナ状に堆積 地山 IV層
- 4 10TR4/3 黄褐色鐵細砂 しまりなし 粘性なし 上記2より大粒の砂で径2~4mmで同色の風化砂礫を50%程度含む 地山 IV層
- 5 10TR2/2 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR7/2c-S1 黄褐色で径2~5mmの風化砂礫を5%程度含む 地山 IV層
- 6 10TR2/2 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR7/2c-S1 黄褐色で径2~5mmの風化砂礫を5%程度含む 地山 IV層
- 7 10TR3/2 黄褐色砂 しまりなし 粘性なし 10TR7/2c-S1 黄褐色で径2~5mmの風化砂礫を5%程度含む 地山 IV層
- 8 10TR2/2 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR8/2c 黄褐色の鐵細砂が層面に含む層あり 地山 IV層
- 9 10TR2/2 黑色粘土 しまる 粘性あり 10TR8/2c 黄褐色の鐵細砂が層面に含む層あり 地山 IV層
- 10 10TR2/1 黑色粘土 ややしまる 粘性あり 10TR7/2c 黄褐色砂を塊状に含む層あり 10TR7/2c-S1 黄褐色で径2~6mmの風化砂礫を5%程度含む 地山 IV層
- 11 10TR3/3 塙褐色砂 しまりなし 粘性なし 地山 IV層
- 12 10TR2/1 黑色粘土 ややしまる 粘性あり 上記1層よりも大粒(1~2cm)の10TR7/2c 黄褐色風化砂礫を50%程度含む 地山 IV層
- 13 10TR3/1 黑褐色砂 ややしまる 粘性ややあり 10TR7/2c-S1 黄褐色で径1~3mmの風化砂礫を5%程度含む 10TR2/2 黑褐色粘土塊を含む箇所あり 地山 IV層  
(粘土を含む箇所中の層であるが粘性やしまりをもつ)

0 2m  
(S=1/80)

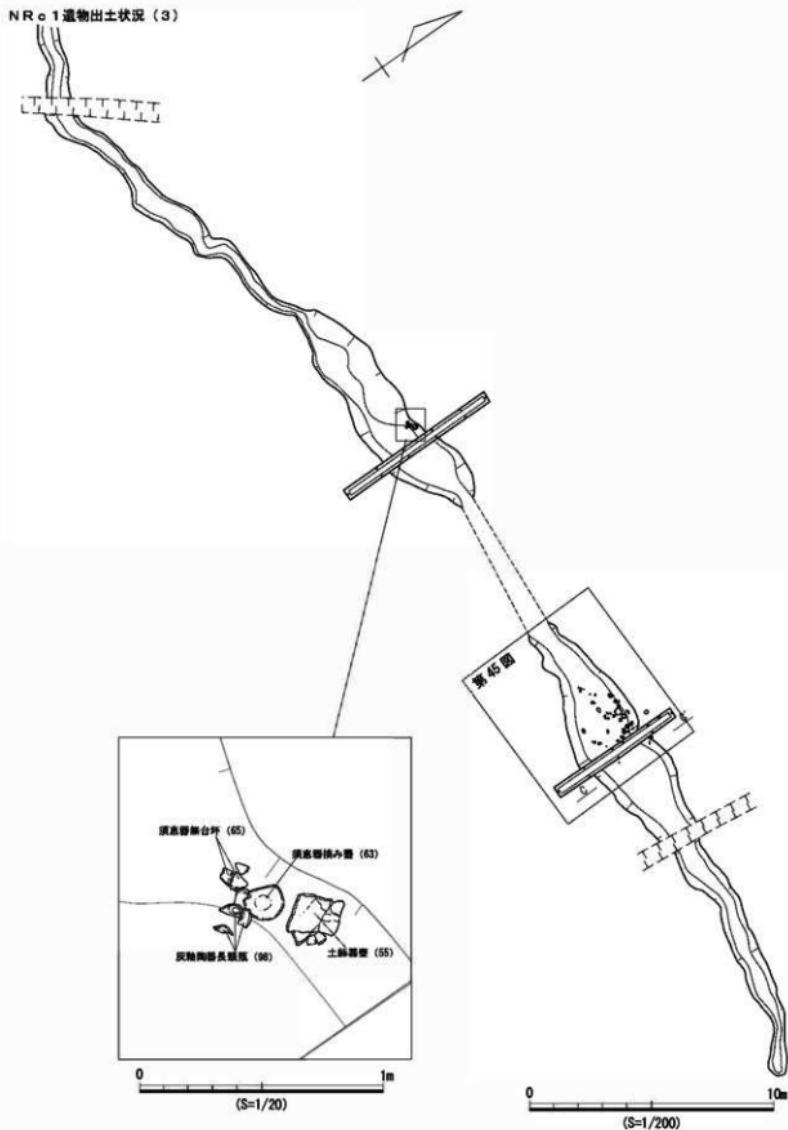
第41図 与島C地点遺跡 自然流路 (2)



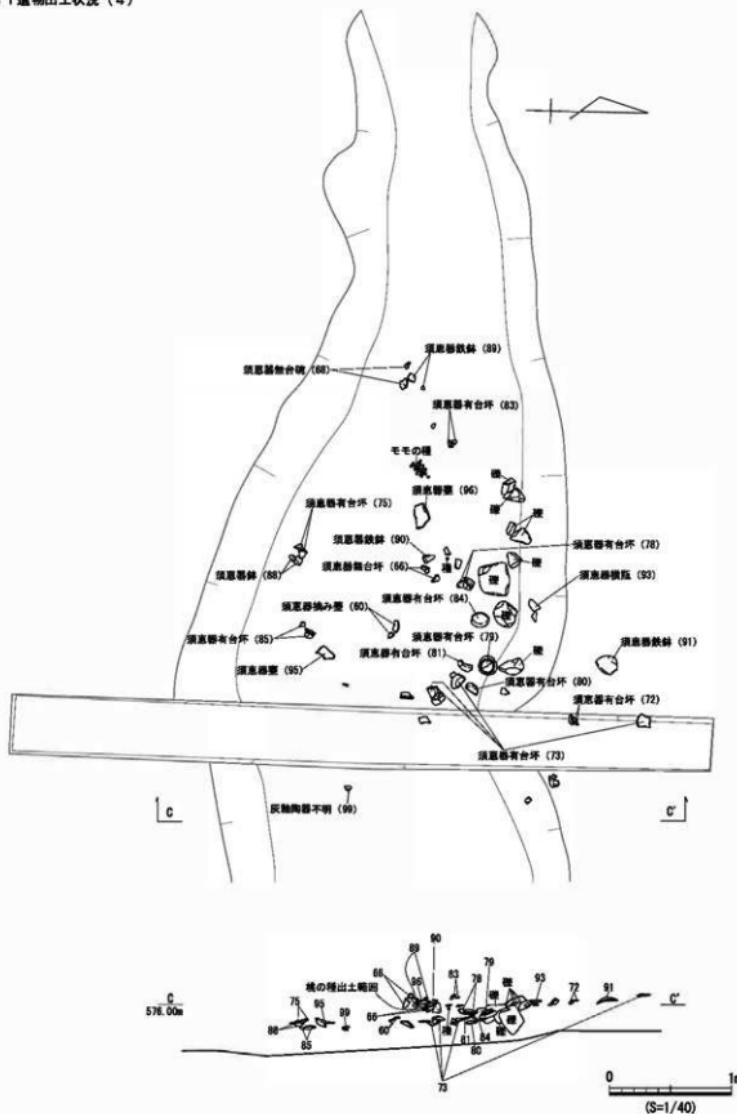
第42図 与島C地点遺跡 自然流路 (3)



第43図 与島C地点遺跡 自然流路 (4)



## NR c 1 遺物出土状況 (4)



第45図 与島C地点遺跡 自然流路 (6)

## 第3節 遺物

与島C地点遺跡で出土した遺物は、破片数で数えて2,710点である。内訳は、土器類2,160点、木器類376点、石器類9点、金属器類7点、植物遺存体158点である<sup>1)</sup>。古代の遺物が大半を占める。実測可能なものをほぼすべて抽出し、162個体図示した(55~216)。

### 1 土器類

土器類破片2,160点の内訳は、土師器281点、須恵器1,750点、灰釉陶器85点、土師質土器1点、輸入磁器5点、山茶碗2点、中近世陶器17点、近世陶磁器16点、近現代磁器2点、分類不能1点である。須恵器が土器類全体の81.0%を占めており、帰属時代面では古代に偏る傾向が顕著である。

#### (1) 土師器 55・56・117・118

破片数で281点確認しているが、図示できたのは壺4個体にとどまる。与島B地点遺跡の場合とは異なり、古墳時代の高壺は確認されず、他器種にも明確に古墳時代の特徴を窺える個体はみられない。

ある程度、全形を窺うことができるるのは、NR c 1から出土した56の壺のみである。口径11.1cmを測る小型品で、斜め上方に開く口頭部と球形の胴部を具える。また、NR c 1では大型の長胴壺とみられる破片も出土している(55)。この個体の口頭部は確認されていないが、包含層出土品には長胴壺の口頭部である可能性の高い破片がみられる<sup>2)</sup>(117・118)。

#### (2) 須恵器

破片数で1,750点確認し、85個体図示した。内訳は、壺蓋2個体、壺身1個体、返り蓋1個体、摘み蓋13個体、無台壺7個体、無台碗9個体、有台壺30個体、有台盤3個体、壺2個体、鉄鉢3個体、鉢3個体、横瓶2個体、長頸瓶2個体、壺6個体、それに器種不明1個体である。古墳時代に属するものは少数で、大半は古代の遺物である。

#### 壺蓋 57・119

古墳時代の器種である壺蓋は、2個体のみ確認した。57と119は、いずれも小型品とみられ、この器種としては新しい特徴を備える個体との印象を受ける。

#### 壺身 120

同じく古墳時代の器種である壺身は、1個体のみ確認した。120は残存状態良好で、口径9.2cm、器高3.2cm、底径8.6cmを測る。底部外面に回転ヘラ削りの痕跡が明瞭に認められる。

#### 返り蓋 121

返り蓋も1個体確認した。121は口径16.0cmに復元でき、口縁部内面に、ごく短い返りを備える。

#### 摘み蓋 58~64・110・114・122~125

摘み蓋は13個体図示した。口径は、最小14.9cm、最大19.6cmを測るもの、15cm台から17cm台に偏る傾向が認められ、あまり大きなばらつきはみられない。

63は、内面端部に部分的に黒色の付着物が認められる。分析の結果、付着物は生漆の劣化したもののが可能性が高いことが判明した。詳しくは第5章第5節を参照されたい。

#### 無台壺 65~67・108・115・126・127

当遺跡で出土した無台の食器具は碗形のものが主流であり、典型的な壺形のものは殆どみられ

ない。比較的底径が大きく体部の傾きが急なものを無台杯に分類したが、碗形態に近いものが多い。

7個体図示した。底部の切り離しについては、これらの中に糸切りと確認できる個体はなく、66・67・108・127ではヘラ切りを用いたことが判明している。全形を窺うことができるのは、65・66の2個体のみである。いずれも口径12cm台、底径7cm台を測る。66では、薄い3枚の粘土板を合わせて作られたことが断面観察から読み取れる。

126の内外面には付着物が認められ、特に内面では厚い。分析を実施したところ、付着物は内外面とも生漆の可能性が高いとの結果を得ている。詳しくは第5章第5節を参照されたい。

#### **無台碗 68・128~135**

9個体図示した。口径は11~14cm台、底径は4~8cm台とばらつきがみられるが、器高については、最小3.4cm、最大4.9cmにとどまり、4cm前後に偏る傾向が認められる。底部外面の切り離し技法については、ヘラ切りによるものと回転糸切りによるものとが混在する<sup>3)</sup>。珍しい例として、134を上げることができる。この個体の底部外面には、回転糸切り痕とみられる弧状の痕跡がわずかに認められるが、大部分はナデ調整とヘラ削り調整により消されている。

68では、口縁部内面に墨とみられる黒色付着物が認められる。また、この個体と128では、底部外面にヘラ書きが認められる。なお、当遺跡では高台を持つ碗である有台碗は確認されていないが、その可能性のある個体として148を上げることができる。この個体は底部内面に墨の付着が認められることから、硯に転用されたとみられる。

#### **有台杯 69~87・113・116・136~144**

与島B地点遺跡と同様、有台杯は最も確認個体数の多い器種である。30個体図示した。口径は最小10.4cmから最大15.9cmまで、器高は最小3.1cmから最大5.7cmまで、台径は最小7.1cmから最大11.9cmまでを測り、いずれもばらつきを示す。底部外面の切り離し技法については、74・78・79・80・87では回転糸切りであることが確認される一方で、明らかにヘラ切りを用いた個体も混在する（137）。

墨の付着が認められるものが3個体あり（75・87・144）、それらのうち87・144は転用硯とみなされる。76・77・84にも黒色の付着物が認められるが、分析の結果、それらは生漆の可能性が高いことが判明した。84では、底部に走る亀裂を取り巻くように内外面に付着しており、さらに割れ口にも認められることから、補修のための接着剤としての使用が想定される。

#### **有台盤 145~147**

3個体図示した。全形を窺うことのできる唯一の個体である145は、口径13.4cm、器高2.4cm、台径8.2cmを測る。短い口縁部は直立気味に立ち上がる。

#### **壺 149・150**

当遺跡では壺はあまり出土しておらず、図示した2個体が確認個体のほぼすべてである。149は内側に屈曲する頸部を具える小型品で、内面に墨の付着が認められる。

#### **鉄鉢 89~91**

金属器の鉢を模倣した仏具とされ「鉄鉢」と通称される鉢が、N R c 1から3個体出土した。唯一、全形を窺える89は、強く内彎する口縁部と緩やかな尖底を器形の特徴とする。90・91についても、残存部分の形状から、同様の器形となる可能性が高い。いずれも外面に回転ヘラ削り調整を施す部位が認められ、作りは比較的丁寧である。

このような特殊器種が3個体もまとめて出土することは珍しい。しかし、当遺跡上方の三枝城跡発掘区で検出された山林寺院跡では漆塗りの鉢<sup>④</sup>が出土していることを念頭に置くなら、不可解なことではない。寺院関連遺物と捉えるべきであろう。

#### 鉢 88・151・152

鉢以外の鉢は、3個体ある。最も残存状態の良い88は、平底ではあるものの、鉢を小型にしたような器形である。出土地点は89～91と同じくNR c 1であり、あるいはこれも仏具の一種と捉えるべきかもしれない。

#### 横瓶 92・93

当遺跡ではNR c 1出土品中に2個体確認した。92・93は、残存する破片から、いずれも横向きの胴部の上部に口頸部が接続する器形に復元でき、横瓶とみて誤りはない。胴部最大径は、92が19～20cm、93が18cm前後と推定される。この事例のように複数の横瓶がまとめて出土することは、当地域では稀である。

#### 長頸瓶 94・153

確認できたのは、図示した2個体のみである。153については、人為的な施釉が認められないことと褐灰色を呈することから、須恵器に分類した。

#### 皿 95～97・101・112・154

全形を窺うことのできる個体はないため、遺構内出土品の主なものなど図示した。NR c 1からは、96・97のような大型品のほか、95のような小型品も出土している。

#### (3) 灰釉陶器 98～100・109・111・155～169

確認破片数は85点にとどまる。20個体図示した。

碗は11個体図示したが、全形を窺うことのできる個体はない。皿は2個体図示した。166は、当遺跡の灰釉陶器中、全体形状と大きさの判明する唯一の個体である。口径12.8cm、器高3.1cm、台径7.0cmを測る。底部外面に墨書の可能性のある黒色部分が認められる。なお、碗か皿か判別困難であるが、164は、三日月形ではなく角形の高台を具えるとともに、残存部分の内面全面に均質な施釉が認められることから、精製品と判断される個体である。

98・168・169は長頸瓶である。98と169は、円盤閉塞法により頸部と胴部を接合したことが窺える。

#### (4) その他の土器類 170～175

当遺跡では、主体を占める土師器・須恵器・灰釉陶器のほか、土師質土器1点、輸入磁器5点、山茶碗2点、中近世陶器17点、近世陶磁器16点、近現代磁器2点、分類不能1点が出土している。

170は、土師質土器の皿である。ほかの土師質の土器より新しい時代に属すると判断し、土師器とは別分類とした。171～173は青磁碗である。青磁碗は当遺跡上方の三枝城跡発掘区でも5個体出土している<sup>⑤</sup>。174は、北部系山茶碗の碗である。175は、天目茶碗である。小破片のため定かではないが、胎土が余り精良ではないことなどから、大窯期ないし近世の製品との印象を受ける<sup>⑥</sup>。

## 2 木器類

木器類破片数376点の内訳は、曲物底板3点、曲物側板2点、栓1点、箸1点、火付け木19点、串状木製品5点、板状木製品76点、棒状木製品28点、建築部材1点、柱根7点、杭21点、器具部材4

点、端材<sup>はざい</sup>3点、分類不能 205点である<sup>7)</sup>。柱根が比較的多いことと、1個体のみではあるが細かな加工を施した器具具材(194)がみられることが注目される。

#### (1) 曲物底板 176

破片3点が出土しているが、それらは同一個体が割れたものであり、確認個体は1個体である。176は、直径8.2cm、厚さ0.6cmを測る円盤である。樹種はヒノキとの同定結果を得ている。

なお、当遺跡では木器類の主要個体について樹種同定を実施している。以下、本章では結果のみ記すが、詳細については第5章第4節を参照されたい。

#### (2) 曲物側板 177

177は厚さ0.2cmを測る短冊状の薄板である。同一地点から、継じ合わせのための樹皮紐も出土している。

#### (3) 桿 178

確認できたのは、図示した1個体のみである。178は、幅広の頭部と円柱状の軸部からなり、長さ9.6cmを測る。同様の器具は、野内遺跡C地区でも出土している<sup>8)</sup>。

#### (4) 箸 179

179は、箸として使用された可能性のある細長い棒状の器具である。幅0.6cmを測り、断面形は不整な四角形である。野内遺跡C地区において、類似品が多数出土している<sup>9)</sup>。なお、これ以外にも、残存状態が良好でないため「棒状木製品」や「分類不能」に分類したものの中に、同様の器具の可能性のある破片が数点程度みられる。

#### (5) 火付け木 106・180~188

端部に炭化が認められる小型の木片を火付け木とした。破片数で19点(個体数でも同数)出土した。ただし、野内遺跡C地区の場合とは異なり、細長く薄い串状を呈するものはほとんどみられず、長さ・幅、それに加工方法等に大きなばらつきが認められる。そのため、それらの中には、単に部分的に熱を受けたにすぎない自然木や器具・部材も含まれるものと思われ、それらすべてを着火具ないし祭祀具とみなすわけにはいかないと判断する。

全体様相を網羅できるよう選び、10個体図示した。樹種同定を実施した2個体(106・180)については、いずれもヒノキとの結果を得ている。

#### (6) 串状木製品 189~191

細長く平らな串状に加工された木片を串状木製品とした。189~191は、いずれも下端を削って尖らせている。ただし、加工が特に丁寧というわけではない。

#### (7) 板状木製品 192

板状に加工された木片を板状木製品とした。破片数で数えて76点出土したが、それらには曲物側板の一部となる可能性のある薄く小型のものから、建築部材の可能性のある厚く大型のものまで含まれる。図示した192は、長さ20.9cm、幅2.1cm、厚さ1.1cmを測る小型の板である。樹種はヒノキとの同定結果を得ている。

#### (8) 棒状木製品 193

棒状に加工された木片を棒状木製品とした。破片数で数えて28点出土したが、それらには箸の可能性のある小型のものから建築部材の可能性のある大型のものまで含まれる。図示した193は、断面六

角形の細長い棒である。樹種はヒノキとの同定結果を得ている。

#### (9) 器具部材 194・195

建物より小型の調度品などを構成する部材を器具部材とした。該当するのは、破片数で数えて4点(2個体)である。

194は残存長3.5cmの小型品であるが、細かな加工が施された特異な個体である。本来は頭部がふくらむ中空の円筒形とみられる。頭部には縦方向の細かな装飾を削り出しており、その下には、横方向の平行する段差を削り出している。樹種については、クマシデ属クマシデ節との同定結果を得ている。同様の特徴を具える製品は知られておらず、用途不明品と言わざるを得ないが、繊細な作りであることから、屋内で使われる器具の部材である可能性が高い。例えば、荘厳具の懸蓋、すなわち仏像などの上に懸垂される笠状の荘厳具の、放射状に開く基の部分などとなる可能性を考えてよいものと思われる<sup>10)</sup>。そうした推測が妥当であるなら、当遺跡の上方で見出された山林寺院跡との関連性が高いと考えられる。

#### (10) 柱根 102~105・196~198

ピット内に残存した柱の根本部分を柱根とした。出土した7個体を、すべて図示した。それらのうち196~198の3個体は据えられた状態ではなく、包含層から出土している。このことは、当遺跡は木質遺物が残存する条件には恵まれていたものの、遺構の残存状況そのものは決して良好ではないことを示唆している。

樹種については、102がヒノキ、103がマツ属複雑管束亞属、104・198がクリ、197がコナラ節との同定結果を得ている。野内遺跡C地区では柱根はすべてクリ材であり<sup>11)</sup>、樹種選択に大きな違いをみせている。

#### (11) 建築部材 199

建物を構成する可能性の高い大型の部材を建築部材とした。柱根以外でその可能性の高いものは、掲載した1個体のみである。199は、上端に枘を削り出し、残存部下半には枘孔を設けている。また、右側面と裏面左半には段差を設け、表面の中央よりやや右には幅の狭い溝を設けるなど、細かな加工を施している。樹種については、マツ属複雑管束亞属との同定結果を得ている。

#### (12) 杣 107・200~205

破片数で数えて21点出土した。ただし、上層から打ち込まれるという使用方法の特性上、他器種にも増して新しい時代のものが混在するとみられ、それらの中に帰属時代が現代に下るものも含まれる可能性が高い。全体様相を網羅できるよう選び、7個体図示した。107・200・204のような下端を尖らせただけの芯持の個体と、201・202・205のような板状の個体に大別できる。

#### (13) 端材 206~208

厚み調整や面加工を施した板・角材等の一端を、長さ調整のため切り落として生じた木片を端材とした。野内遺跡C地区ではそのような木片が多数出土しており<sup>12)</sup>、当遺跡の出土木器類中、図示した3個体を同様の遺物と考えた。206~208はいずれも短く、より長い板の端部を切り取ることにより生じたものとみられる。

#### (14) 分類不能木器

細かく碎け、本来の形状が判明しない器具・部材や、加工痕・使用痕の有無を読み取ることができ

ず、自然木と見分けのつかない木片などを一括する。破片数で数えて 205 点に上り、これは出土木器類総数 376 点の 54.5%に当たる。特記すべき個体はみられず、実測図は掲載していない。

### 3 石器類 209～211

石器類 9 点の内訳は、打製石斧 3 点（3 個体）、砥石 2 点（2 個体）、剥片類 4 点である。打製石斧 1 個体と砥石 2 個体を図示した。209 は緑色片岩の打製石斧、210・211 は砂岩の砥石である。211 には多数の敲打痕が認められる。

### 4 金属器類 212～216

金属器類 7 点の内訳は、古銭 3 点、煙管 2 点、分類不能 2 点である。

古銭はいずれも渡来銭で、214 は嘉祐通寶（北宋、1056 年初鑄）、215 は元祐通寶（北宋、1086 年初鑄）である。216 については、破損のため定かではないが、元豐通宝（北宋、1078 年初鑄）の可能性が高い。212 は煙管の吸口、213 は雁首である。いずれも真鍮製とみられる。出土地点が離れているため、同一個体とは考え難い。

### 5 植物遺存体

N R c 1 では、多数の植物遺存体が出土した。なかでも注目されるのは、モモの種が 1 箇所でまとまって出土したことである<sup>10</sup>。第 45 図に出土状況を図示した。

- 1) 土器類では、注記不能の小破片については遺物数に含んでいない。また、当遺跡ではトチノミ・クリ・モモなど植物の種が多数出土しているが、それらの全てを遺物数に含んでいるわけではない。
- 2) 近隣遺跡では、三枝城跡の山林寺院跡において土師器長胴甕の残存状態良好な個体がまとまって出土している。岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』111 頁などを参照のこと。
- 3) 近隣遺跡における須恵器無台碗の器形変化や底部切り離し技法については、以下の文献を参照されたい。
  - ①財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡 B 地区』
  - ②小瀬忠司 2011「飛驒の須恵器と灰釉陶器」『研究事業報告（平成 22 年度版）』岐阜県ミュージアムひだ
- 4) 前掲注 3) 文献所載の 193。
- 5) 前掲注 3) 文献所載の 25・26・71・203・204。
- 6) 天目茶碗については、佐藤公保氏（愛知県教育委員会）から御教示を賜った。
- 7) 与島 B 地点遺跡と同じく、木器類の分類については野内遺跡 C 地区における分類に準じている。岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡 C 地区』第 1 分冊 163～167 頁を参照されたい。
- 8) 前掲注 7) 文献所載の 1567・1568。ただし、形状は一致しない。
- 9) 前掲注 7) 文献 178～179 頁などを参照されたい。
- 10) 194 については、山田昌久氏（首都大学東京）に実見していただき、御教示を賜った。
- 11) 前掲注 7) 文献 183 頁など。
- 12) 前掲注 7) 文献 188 頁など。
- 13) 第 45 図に図示した植物がモモであることについては、藤根久氏（株式会社パレオ・ラボ）から御教示を賜った。







## 74 第4章 与島C地点遺跡 遺物調査結果

第13表 与島C地点遺跡 遺物調査表(1)

遺物 番号	出土地点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				博物 館番 号	國立 民族 学 院 番 号	総合所見など
					口径 (長さ)	高さ (厚さ)	底径 (幅)	台数			
55	NRel -	土器類	土器類	甕	-	-	-	-	46		腹部内面横方向板ナデ(浅いながらケ日も認められる)、外面部に観方向のハケ日。
56	NRel -	土器類	土器類	甕	11.1	-	-	-	46	10	内外面とも摩滅と付着物のため、調整不明。外面部に黒色風化物が着る。
57	NRel -	土器類	須恵器	壺蓋	11.4	-	-	-	46	11	体部内外面回転ナデ。
58	NRel -	土器類	須恵器	楕円壺	15.0	3.3	-	-	46	10	天井部内面回転ナデ、中央部にナデを加える。天井部外表面回転ナデ、側面、楕円部内面回転ナデ。外面部縁部のみに輪状に自然釉が付着しており、重ね痕がみられる。
59	NRel - H9 IV層直上	土器類	須恵器	楕円壺	15.4	-	-	-	46	10	天井部内面回転ナデ、外表面回転ナデ削り、体部内外面回転ナデ。外面部縁部のみに輪状に自然釉が付着しており、重ね痕がみられる。
60	NRel - H11 IV層直上	土器類	須恵器	楕円壺	14.9	-	-	-	46	11	体部内外面回転ナデ。焼成ややあく灰白色を呈する。
61	NRel - H11 IV層直上	土器類	須恵器	楕円壺	17.0	-	-	-	46	11	天井部内面回転ナデ後ナデ、外表面削り削り、体部内外面回転ナデ。
62	NRel -	土器類	須恵器	楕円壺	16.8	-	-	-	46	11	天井部内面回転ナデ、外表面削り削り。体部内外面回転ナデ。
63	NRel -	土器類	須恵器	楕円壺	16.7	3.6	-	-	46	9-10	天井部内外面回転ナデ。体部内外面回転ナデ。外面部に自然釉が着る。別個体の一部が墨色に着色する部分では半円状に墨跡がついている。内面部縁部に部分的に黒色の付着物が認められるが、分析の結果、漆の可能性が高いことが判明した。
64	NRel -	土器類	須恵器	楕円壺	18.8	-	-	-	46	11	内面回転ナデ。外面部は薄く自然釉付着のため、調整不明。
65	NRel -	土器類	須恵器	無台坪	12.0	3.8	7.2	-	47	10	内外面摩滅のため、調整不明。焼成あく、にぶい褐色を呈する。
66	NRel - H11 IV層直上 H12 IV層直上	土器類	須恵器	無台坪	12.7	4.7	7.4	-	47	10	体部内外面回転ナデ、底部内面回転ナデ、中央部にナデを加える。底部外表面削り削りナデ。
67	NRel -	土器類	須恵器	無台坪	-	-	7.0	-	47	11	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面削り削りナデ。
68	NRel - E15 I層 H11 IV層直上	土器類	須恵器	無台輪	11.7	3.4	6.8	-	47	9-10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面削り削りナデ。底部内面平滑化。底部外表面に直書きのハグラ書き。口縁部内面に墨とみられる墨色の付着物が認められる。
69	NRel -	土器類	須恵器	有台坪	11.0	3.5	8.2	7.1	47	11	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。
70	NRel - H12 IV層直上	土器類	須恵器	有台坪	12.4	3.5	9.2	8.2	47	11	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面ナデ。
71	NRel -	土器類	須恵器	有台坪	13.3	3.5	10.8	10.2	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面削り削り。内面部にも炭素着色に墨跡を呈する部分が多い。
72	NRel - H12 -	土器類	須恵器	有台坪	13.5	3.5	11.8	10.1	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面削り削り。
73	NRel - H11 IV層直上	土器類	須恵器	有台坪	13.0	5.7	10.3	9.1	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面削り削り。
74	NRel -	土器類	須恵器	有台坪	13.2	4.0	11.0	9.7	47	10	体部内面回転ナデ。体部外表面回転ナデ、下半回転ナデ削り。底部内面回転ナデ後ナデ。底部内面回転ナデ削り、中央部に回転系切痕を残す。底部に焼き跡が多い。体部外表面に部分的に自然釉付着。
75	NRel - H11 IV層直上	土器類	須恵器	有台坪	12.5	3.7	11.1	9.3	47	9-10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ、外表面回転ナデ。底部下半回転する内面に墨とみられる墨色付着物が認められる。転用範囲。
76	NRel -	土器類	須恵器	有台坪	14.2	3.3	11.3	10.6	47	9-11	体部内外面回転ナデ。内外面とも炭素着色により墨色を呈する部分が多い。体部外表面に墨色の付着物が認められるが、分析の結果、漆の可能性が高いことが判明した。付着物は口縁部の細かな破損部にも認められる。77と同一個体の可能性あり。
77	NRel -	土器類	須恵器	有台坪	14.2	3.1	11.3	10.6	47	9-10	体部内外面回転ナデ。底部外表面回転ナデ。外表面摩滅。焼成ややあく灰白色を呈するが、外表面にも炭素着色による墨色を呈する部分も多い。内面部に部分的に墨色の付着物が認められるが、分析の結果、漆の可能性が高いことが判明した。付着物は口縁部の細かな破損部にも認められる。77と同一個体の可能性あり。
78	NRel -	土器類	須恵器	有台坪	13.4	3.5	11.2	10.0	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外表面回転ナデ削り。中央部に回転系切痕を残す。

第14表 与島C地点遺跡 遺物観察表（2）

遺物番号	出土点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				博物館番号	国版番号	観察所見など
					口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	台径			
79	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	14	3.6	12	11.1	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外表面回転ヘラ削り、中央部にむすびから回転系刃削れ。施成ややあく灰白色を呈するが、炭素に着色により墨色を呈する部分が多い。
80	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	14.4	4	-	10.0	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外表面回転ヘラ削り。中央部にむすびから回転系刃削れ。施成ややあく灰白色を呈するが、炭素に着色により墨色を呈する部分が多い。
81	NRe1 - H11 IV層直上	土器類	須恵器	有台坪	14.8	3.7	11.6	10.4	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。外表面回転ヘラ削り。施成ややあく灰白色を呈する。
82	NRe1 - H9 IV層直上	土器類	須恵器	有台坪	14.4	3.8	11.5	10.4	47	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデナダナダ。施きゆみが著しく、高台は半分以上剥離している。
83	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	14.4	3.6	11.4	10.0	47	11	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部内面平滑化。
84	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	14.8	3.7	12.8	11.6	48	9+10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。中央部にナデを加え、底部外表面削りで削り、底部内面平滑化。底部内外表面の器底の走る部分を削り落とし墨色の施色が認められる。逆に、削れ口の一部に回転の跡物が認められ、それは修理痕の可能性がある。他の外側・底部内面の施削付近には付着物が剥離した痕跡が認められ、本部はこの部位でより面的に付着してた可塑性が高い。分析の結果、外側付着物付近であり、内面についてもその可能性が高いことが判明した。
85	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	14.6	4.0	12.3	11.0	48	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面回転ヘラ削り。底部内面平滑化。
86	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	15.9	5.0	12.9	11.9	48	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外表面回転ヘラ削り。
87	NRe1 -	土器類	須恵器	有台坪	-	-	-	11.0	48	11	底部内面回転ナデ。底部外表面回転ヘラ削り、中央部に回転系刃削れを残す。底部外表面付着物。
88	NRe1 -	土器類	須恵器	体	12.8	4.5	8.6	-	48	11	体部内外面回転ナデ。ただし、部分的に回転ヘラ削れを残す。底部外表面下回転ナデ、下平回転ヘラ削り。底部内面回転ナデ。底部外表面ナデ。ただし、同縁部は工具を用いたナダとみられる。施成ややあく灰黄色を呈する。
89	NRe1 - G11 III層 H11 IV層直上 H12 IV層直上 試掘坑4 -	土器類	須恵器	鉄鉢	19.4	12.2	-	-	48	11	外表面回転ナデ。ただし、外側中央部は回転ヘラ削り。
90	NRe1 -	土器類	須恵器	鉄鉢	-	-	-	-	48	11	内面回転ナデ。中央部を除く外表面回転ナデ、外側中央部回転ヘラ削り。
91	NRe1 - H11 IV層直上 H12 IV層直上	土器類	須恵器	鉄鉢	22.0	-	-	-	48	11	内面回転ナデ。外面上平回転ナデ、下平回転ヘラ削り。口部部を残す内面の大部に自然剥離付着。
92	NRe1 - G13 III層 H9 IV層直上	土器類	須恵器	横瓶	-	-	-	-	48	11	全形を残すことはできないものの、横向きの脚部の上部に口部部が接着する跡所に復元できる。脚部内径は20mm、脚部外径は19-20mmと測定される。脚部内面に同心円状の凹凸がある。外側に格子状の叩き痕、いずれも自然な並び。ただ、左足外側と右脚外側では回転ナデにより削されている。脚部外側に部分的に自然剥離付着。
93	NRe1 - H9 IV層直上 H10 III層 不明 I層-供土	土器類	須恵器	横瓶	-	-	-	-	49	11	全形を残すことはできないものの、横向きの脚部の上部に口部部が接着する跡所に復元できる。あまた正確には復元できないが、脚部最大径部の前後端部に複数の凹凸がある。脚部内面に同心円状の凹凸がある。中央部に十字穴の突起をもつ。外側に格子状の叩き痕。ただし、右脚ではいずれも回転ナデにより削されている。脚部外側に部分的に自然剥離付着。
94	NRe1 -	土器類	須恵器	長颈瓶	11.0	-	-	-	49	11	口部内外面回転ナデ。
95	NRe1 - H12 III層	土器類	須恵器	甕	14.5	-	-	-	49	11	口部内外面回転ナデ。底部内面に同心円状の当て具底。外側に平行筋状の叩き痕。
96	NRe1 -	土器類	須恵器	甕	33.7	-	-	-	49	11	口部内外面回転ナデ。椎部のほぼ全面に自然剥離付着。
97	NRe1 -	土器類	須恵器	甕	-	-	-	-	49	11	脚部-底部内面に同心円状の当て具底。各部位の上端附近に、2つの突起が認められる。また、底部附近の施削のない当て具底1箇所から、当て具の直径は2cm以上であることが分かる。脚部-底部外側に格子状の叩き痕。

第15表 与島C地点遺跡 遺物調査表(3)

遺物番号	出土地点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				博物館番号	国庫番号	総合所見など
					口径 (長さ)	高さ (厚さ)	底径 (幅)	台形			
98	NRe1 -	土器類	灰陶陶器	長頸瓶	8.4	-	-	-	49		口部内外面回転ナデ。腹部上半内外面回転ナデ。外延存部のほぼ全面と口部内面に灰釉。頸部と胸部の接合は、円錐墳墓法による。
99	NRe1 - G12 Ⅳ層	土器類	灰陶陶器	不明	12.4	-	-	-	49	11	口部内外面回転ナデ。内面に灰釉。ただし剥落する部分が多い。蓋・底盤の口部開口。
100	SPe2 1層	土器類	灰陶陶器	壺	-	-	-	-	49		体部内外面回転ナデ。焼成ややあく灰白色を呈する。あるいは灰窓器。
101	SPe5 1層	土器類	灰窓器	壺	-	-	-	-	49		焼の剥離であろうが、ごく薄い。内面に同心円状の当て具痕。外縁に格子状の叩き目。
102	SPe7 -	木器類	建築部材	柱板	(38.7) (22.6) (24.0)	-	-	-	50	12	全周にわたって下端付近に加工痕が認められるほか、下端から30cmあたりの位置において、横方向の溝状の加工が認められる。ヒノキ。芯持。
103	SPe8 -	木器類	建築部材	柱板	(10.0) (6.6) (7.7)	-	-	-	50		みかん竹材の一端を切り落とした残材にも見えるが、出土状況から柱板と判断した。下端部のみやや平滑であるが、上端部・右側面・裏面は粗い。マツ風捲縞束装飾。かかん割れ。
104	SPe9 -	木器類	建築部材	柱板	(44.5) (15.2) (17.5)	-	-	-	50	12	下端面に削り加工痕が認められる。残存部分の上端付近は、一回り細くなっている。クリ。芯持。
105	SPe10 -	木器類	建築部材	柱板	(20.0) (11.2) (10.0)	-	-	-	50		下端面に削り加工痕が認められる。芯持。
106	SPe11 1層	木器類	火付け木	火付け木	(11.5) (0.7) (1.1)	-	-	-	50	12	下端のみ炭化しているヒノキ。芯持。
107	SPe15 -	木器類	土木部材	柱	(残存43.0) (5.7) (7.1)	-	-	-	50		上端・下端を丸く。下端2.6cmから始めに削っている。芯持。
108	SKel 1層	土器類	灰窓器	無台坪	-	-	7.0	-	51	11	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外縁へア切り後ナデ。
109	SKel 1層	土器類	灰陶陶器	不明	-	-	12.7	-	51	11	骨・肌痕の剥離下平さら底面にかけての破片。紹・色調から灰陶陶器と考えが、灰窓器の可能性もある。底部内面回転ナデ。残存部上端のみ回転ナデ。外表面回転へア削り。頸部外縁に部分的に自然剥離(あるいは施された灰窓か)。
110	SKel 2層 D13 Ⅳ層底上 H12 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	拂み塗	17.1	3.5	-	-	51	11	天井部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。拂み頭回転ナデ。体部内外面回転ナデ。
111	SKel 5 1層	土器類	灰陶陶器	碗	13.0	-	-	-	51		体部内外面回転ナデ。内面の残存部全面に灰釉。
112	SKel 6 1層	土器類	灰窓器	壺	-	-	-	-	51		焼の剥離破片。内面に同心円状の当て具痕。外縁に格子状の叩き目。
113	SKel 7 1層-2層 D14 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	有台坪	15.0	-	12.1	-	51	11	体部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削りと回転ナデを併用。
114	SKel 7 1層	土器類	灰窓器	拂み塗	-	-	-	-	51		体部内外面回転ナデ。
115	SKel 7 2層	土器類	灰窓器	無台坪	-	-	約7.4	-	51		体部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。被成やや剥離(青色を呈する)。
116	SKel 8 1層	土器類	灰窓器	有台坪	-	-	約8.0	-	51		底部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。
117	D12 Ⅳ層	土器類	土師器	壺	-	-	-	-	52		頸部外縁に幾力のヘア削りがわずかに認められる。
118	H12 Ⅳ層底上	土器類	土師器	甕	-	-	-	-	52		口部内外面回転ナデ。頸部外縁に横方向のハケ目が外縁に範囲向外のハケ目。
119	E12 Ⅲ層	土器類	灰窓器	壺蓋	-	-	-	-	52		天井部内面回転ナデ。外表面調整不明。天井部外縁に自然剥離が付着することから芯持と判断したが、有芽などの可能性もある。
120	H9 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	壺身	9.2	3.2	8.6	-	52	10	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。体部内外面回転ナデ。
121	E13 Ⅲ層	土器類	灰窓器	返り蓋	16.0	-	-	-	52		天井部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。拂み頭回転ナデ。体部内外面回転ナデ。
122	H8 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	拂み塗	-	-	-	-	52		天井部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。拂み頭回転ナデ。体部内外面回転ナデ。
123	D12 Ⅲ層 G11 Ⅲ層 G11 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	拂み塗	15.0	2.1	-	-	52		天井部内面回転ナデ後ナデ。外表面回転ヘア削り。拂み頭回転ナデ。体部内外面回転ナデ。
124	G11 1層-IV層底上 H10 Ⅳ層底上 H11 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	拂み塗	16.4	2.6	-	-	52		天井部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。拂み頭回転ナデ。体部内外面回転ナデ。
125	G11 Ⅳ層底上	土器類	灰窓器	拂み塗	19.6	-	-	-	52		天井部内面回転ナデ後ナデ(工具併用)。外表面回転ヘア削り。体部内外面回転ナデ。外表面部のみに輪状に自然剥離が付着しており、蓋ね痕跡もみられる。

第16表 与島C地点遺跡 遺物観察表（4）

遺物 番号	出土地点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				博物 番号	国版 番号	觀察所見など
					口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	台径			
126	H11 IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	—	—	7.9	—	82	9	内面は付着物のため調査不明。底部外表面回転ナダ。底部外表面ナダ。内面に黒色・褐色・黄褐色の付着物が、外面には褐色・黄褐色の付着物が認められ、特に内面ではない。分析の結果、底部外表面付着と外面褐色付着物については誰の可能性が高いことが判明した。造成あく淡黄色を呈する。
127	H11 IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	—	—	6.4	—	82		体部内外面回転ナダ。底部内面ナダ、外へ切り後ナダ。
128	H11 III層	土器類	須恵器	無台壺	—	—	6.9	—	82		体部内外面回転ナダ。底部内面ナダ、外へナダ。
129	H12 IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	12.2	3.5	6.6	—	82		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外へナダ。
130	試掘坑4-	土器類	須恵器	無台壺	11.4	4.9	4.8	—	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外に回転未切底。底部内面平滑化。造成良好で暗灰色を呈するが、底部中央外表面のみ赤褐色を呈する。
131	H12 IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	11.6	3.9	4.8	—	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外に回転未切底。
132	H12 IV層直上 G12 III層	土器類	須恵器	無台壺	12.2	3.5	6.2	—	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外へ切り後ナダ。底部内面平滑化。
133	G12 III層 H12 III層-IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	13.2	4.4	6.2	—	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外に回転未切底。
134	G12 IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	14.0	4.5	8.0	—	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外へナダへナダ。ただし、底面外表面に回転未切底がわずかに認められる。
135	G12 IV層直上	土器類	須恵器	無台壺	14.0	4.0	7.6	—	83		体部内外面回転ナダ。造成あく淡黄褐色を呈する。
136	G12 III層 G15 III層	土器類	須恵器	有台壺	10.4	3.7	9.8	8.2	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外へナダへナダへナダ。
137	試掘坑4-	土器類	須恵器	有台壺	11.2	3.3	10.3	9.2	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、中央部にナダを加える。底部外表面へナダ切後回転へナダ。
138	H12 IV層直上	土器類	須恵器	有台壺	11.4	3.6	9.0	8.4	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外回転へナダ。
139	G11 I層-III層	土器類	須恵器	有台壺	11.4	3.9	9.1	7.8	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外へナダ。底部内面平滑化。
140	G11 III層 IV層直上	土器類	須恵器	有台壺	14.0	3.8	11.3	9.6	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外回転へナダ。底部内面平滑化。底部から底部にかけての内面に、ごく薄いものの黒色付着が認められる。
141	H11 IV層直上	土器類	須恵器	有台壺	14.0	3.8	11.6	10.8	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ後ナダ、外回転へナダ。底部内面平滑化。
142	G11 IV層直上	土器類	須恵器	有台壺	14.4	3.9	12.5	11.0	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ。底部内面平滑化。
143	H11 IV層直上	土器類	須恵器	有台壺	14.4	4.0	12.3	10.6	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外回転へナダ。
144	H14 III層	土器類	須恵器	有台壺	—	—	—	10.6	83	9	底部内面回転ナダ、外回転へナダ。底部内面平滑化。底部外面上に墨付乳頭状突起。
145	G12 IV層直上 H11 IV層直上	土器類	須恵器	有台盤	13.4	2.4	12.7	8.2	83	10	口縁部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外回転へナダ。
146	H11 III層	土器類	須恵器	有台盤	—	—	—	8.4	83		体部内外面回転ナダ。内面には部分的にナダが加える。底部内面回転ナダ、外回転へナダ。底部内面平滑化。
147	H12 IV層直上	土器類	須恵器	有台盤	—	—	13.6	9.5	83		体部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外回転へナダ。ただし、底部外面上には部分的に回転未切底を残す。底部内面平滑化。
148	H12 IV層直上	土器類	須恵器	不明	—	—	—	10.1	83	9	体部を欠ぐ。有台盤である可能性が高い。中央部を除く底部内面回転ナダ、中央部ナダ。中央部を除く底部外表面回転へナダ。中央部に回転未切底を残す。底部内面平滑化。底部内面の大半を剥離の一部に埋め替る。軋用器。
149	H9 IV層直上	土器類	須恵器	壺	11.0	—	—	—	83	9-10	口縁部内外面回転ナダ。底部内外面回転ナダ。口縁部内面に墨付乳頭。
150	E12 III層 E12 IV層直上	土器類	須恵器	壺	11.0	—	—	—	83		口縁部内外面回転ナダ。口縁部内面と頸部外表面に自然釉付着。
151	I3 IV層直上	土器類	須恵器	鉢	—	—	—	—	83		体部内外面回転ナダ。ただし、外表面中央に部分的に回転へナダが認められる。
152	H12 IV層直上	土器類	須恵器	鉢	—	—	15.0	—	84		内外面潔誠。造成あく淡黄色を呈する。あるいは瓶か。
153	H11 IV層直上 試掘坑4-	土器類	須恵器	長頸瓶	10.8	—	—	—	84	10	口縁部内外面回転ナダ。

第17表 与島C地点遺跡 遺物観察表(5)

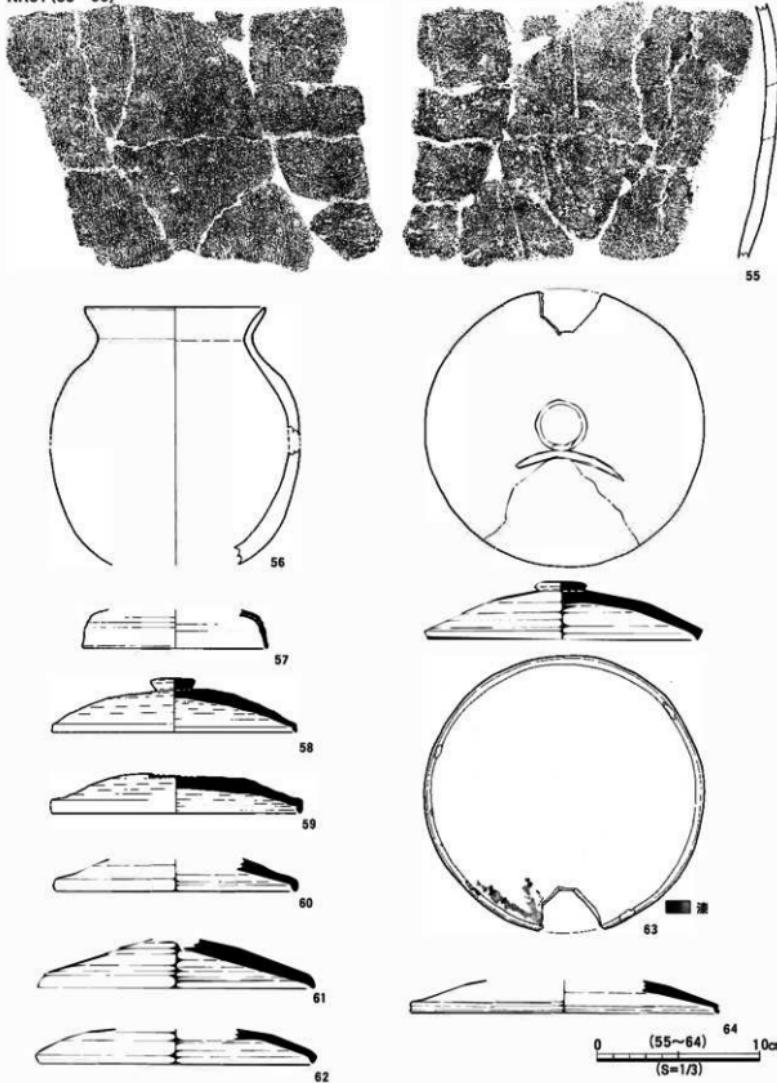
遺物番号	出土地点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				博物館番号	国版番号	総合所見など
					口径 (長さ)	高さ (厚さ)	底径 (幅)	台形			
154	不明 1層	土器類	須恵器	甕	—	—	—	—	54	頭部外面回転ナデ。頭部内面に同心円状の当て具痕。外間に格子状の叩き痕。頸部外面に自然輪付着。	
155	FU IV層直上 G13 IV層直上	土器類	灰陶陶器	甕	14.0	—	—	—	54	体部内面回転ナデ。体部内面に灰釉。	
156	H11 Ⅲ層	土器類	灰陶陶器	甕	13.0	—	—	—	54	体部内外面回転ナデ。	
157	E13 Ⅲ層	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	7.0	—	54	体部内外面回転ナデ。	
158	J12 IIb層	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	—	6.4	54	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。中央部にナデを加える。底面外周部に灰釉。底部内面平滑化。底部外周に平行線状のへア書き。	
159	H13 I 層	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	—	6.2	54	体部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。体部内面に灰釉。	
160	試掘坑4 -	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	—	8.0	54	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外表面ナデ。底部内面平滑化。	
161	G13 IV層直上	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	—	8.6	54	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外表面ナデ。体部内面に灰釉。	
162	E13 Ⅲ層 E13 IV層直上	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	—	7.8	54	体部内外面回転ナデ。	
163	G15 II層	土器類	灰陶陶器	甕	—	—	—	—	54	体部内外面回転ナデ。施成あく浅黄褐色を呈する。	
164	C15 I 層	土器類	灰陶陶器	平明	—	—	—	8.8	54	底部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。内面の残存部分全体に灰釉。碗が底の底部破壊。	
165	E12 Ⅲ層	土器類	灰陶陶器	不明	—	—	—	9.2	54	体部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。底部内面回転ナデ。体部内面に灰釉。碗底。	
166	H12 Ⅲ層	土器類	灰陶陶器	皿	12.8	3.1	—	7.0	54	体部内面回転ナデ。外表面回転ヘア削り。底部内面回転ナデ。底部内面に灰釉。底部外周に不規則な墨書きの可能性のある色部分が認められる。	
167	H11 Ⅲ層	土器類	灰陶陶器	皿	13.6	—	—	—	54	体部内外面回転ナデ。体部内面平滑化。	
	P13 I層 G12 Ⅲ層 H12 Ⅲ層 H13 Ⅲ層 試掘坑4 -	土器類	灰陶陶器	長頸瓶	—	—	—	—	54	口部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外表面は施釉のため調整不良。口部内外面に灰釉。底部外周に灰釉。	
168	H10 Ⅲ層 G10 Ⅲ層	土器類	灰陶陶器	長頸瓶	—	—	—	—	54	頭部内外面回転ナデ。頭部内面回転ナデ。外表面は施釉のため調査不良。頭部前面の一部と頸部外周の残存部全面に灰釉。頭部と頸部の結合は、円盤閉鎖法による。	
170	G12 Ⅲ層	土器類	土質灰土器	皿	約8.0	1.2	約8.0	—	54	体部内外面ナデ(回転を終わらせたららわし)。	
171	H4 Ⅲ層	土器類	輸入器器	青磁碗	—	—	—	—	54	体部内面に青磁釉。体部外周に磁道運文字。	
172	F12 IV層直上	土器類	輸入器器	青磁碗	—	—	—	—	54	体部内面に青磁釉。体部外周に磁道運文字。	
173	H4 II層	土器類	輸入器器	青磁碗	—	—	—	—	54	体部内面に青磁釉。体部外周に磁道運文字。	
174	E14 IV層直上	土器類	山茶碗	碗	—	—	—	—	54	体部内外面回転ナデ。北部系山茶碗。	
175	H12 Ⅲ層	土器類	中世陶器	天日茶碗	—	—	—	—	54	体部外周下端部を除く残存部全面に灰釉。体部外周下端部回転ヘア削り。	
176	J8 Ⅲ層	木器類	器具	曲物底板	(8.2)	(0.6)	(8.1)	—	55	ほぼ完形の底盤であるが、組合のための釘孔などは認められない。ヒカリ。板目。	
177	G9 IV層直上	木器類	器具	曲物側板	(残存20.3)	(0.2)	0.6	—	55	左端をなく。ぐく薄い短冊状の板であり、やや彎曲している。ケビキは認められない。なお、図示していないが、組じ合わせのための接縫部同一地点から出土している。板目。	
178	H11 IV層直上	木器類	器具	栓	(9.6)	(1.9)	(3.9)	—	55	ほぼ完形の底盤である。ただし、頭部は裏面により原形が複数なされている。木製の栓である。本体の側面は方形でない。丸方形容みられる。頭部の栓付け部は、円柱形である。軸部は2段式。木製栓操作している。頭部上面付近に、帯状に変色する部分があり、これは漆装痕の可塑性がある。ヒカリ。芯虫。	
179	J14 Ⅲ層	木器類	器具	箋	(残存9.3)	(0.5)	(0.6)	—	55	上端・下端を欠く。断面は不正な四角形である。芯虫。	
180	H11 IV層直上	木器類	器具	火付け木	(19.4)	(0.9)	(1.5)	—	55	12 下端のみ炭化している。ヒカリ。芯虫。	
181	J7 IV層直上	木器類	器具	火付け木	(19.3)	(0.8)	(0.9)	—	55	下端のみ炭化している。芯虫。	
182	H13 IV層直上	木器類	器具	火付け木	(16.5)	(1.0)	(1.1)	—	55	下端のみでなく中央部にも炭化部分が認められる。芯虫。	
183	H12 Ⅲ層	木器類	器具	火付け木	(11.0)	(0.7)	(1.0)	—	55	下端のみ炭化している。上端は段差を持って斜めに切断されている。芯虫。	
184	J7 IV層直上	木器類	器具	火付け木	(9.0)	(0.6)	(1.0)	—	55	下端のみ炭化している。芯虫。	
185	G12 Ⅲ層	木器類	器具	火付け木	(7.5)	(0.3)	(0.9)	—	55	下端のみ炭化している。芯虫。	
186	H11 Ⅲ層	木器類	器具	火付け木	(5.5)	(1.0)	(2.0)	—	55	下端のみ炭化している。上端は比較的きれいに斜めに切断されている。芯虫。	

第18表 与島C地点遺跡 遺物観察表（6）

遺物 番号	出土点・層位	大分類	種別	器種	大きさ(cm)				博物 館番号	国版 番号	総務所見など
					口径 (長径)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	台径			
187	I12 Ⅲ層	木器類	器具	火付け木	(5.6) (1.2)	(1.5)	-	-	55		下端の辺縁全体が凹化している。上端はきれいに斜めに切削されている。芯持。
188	I7 IV層直上	木器類	器具	火付け木	(5.7) (0.6)	(0.9)	-	-	55		下端のみ奥化している。芯虫。
189	I7 IV層直上	木器類	器具	串状木製品	(21.3) (0.9)	(2.5)	-	-	55		下端の右側面を斜めに削り、先端を尖らせている。表面より裏面の方が平滑である。
190	F11 Ⅲ層	木器類	器具	串状木製品	(残存18.4)	(1.2)	(2.5)	-	55		上端を大きく、下端の表面／左側面／右側面を斜めに削り、先端を尖らせている。板目。
191	F11 Ⅲ層	木器類	器具	串状木製品	(残存13.6)	(0.9)	(1.0)	-	55		上端を大きく、下端の左側面を斜めに削り、先端を尖らせている。板目。
192	H11 IV層直上	木器類	器具	板状木製品	(20.9)	(1.1)	(2.1)	-	55	12	断面は不整な平行四辺形である。芯虫は部材部分。ヒキ。芯持。
193	I8 Ⅲ層	木器類	器具	棒状木製品	(残存36.0)	(1.0)	(1.5)	-	55	12	下端を大きく、断面は不整な六角形である。ヒキ。芯虫。
194	I7 Ⅲ層	木器類	器具部材	不明	(残存3.5)	(残存2.5)	(4.0)	-	55	12	下端を大きく、裏面の尖端を丸く削られたが、本来は頭部がくらくら中空の円筒形とみられる。頭部には模方向の細かな凹凸を削り出している。その下には、模方向の平行する段差を削り出している。カツラノ属クサゲノ属。芯虫。
195	G12 Ⅲ層	木器類	器具部材	不明	(6.1)	(1.3)	(2.4)	-	55		裏面は欠けている可能性がある。上端を斜めに削り出しているが、右側と左側で段差が認められる。板目。
196	H11 IV層直上	木器類	建築部材	柱根	(31.2)	(10.9)	(11.0)	-	56		裏面は削食している。下端面に相応加工痕が認められる。芯持。
197	D13 IV層直上	木器類	建築部材	柱根	(49.0)	(12.2)	(16.2)	-	56	12	下端付近に細い加工痕が認められる。下端面にはほとんど加工痕は認められない。コラマ属ナラの。芯持。
198	D13 IV層直上	木器類	建築部材	柱根	(23.9)	(17.9)	(21.0)	-	56	12	下端面は滑らかである。長軸に対して斜めである。横断面は曲線的ではなく、角張っている。タガ。芯持。
199	E15 IV層直上	木器類	建築部材	不明	(残存31.5)	(残存6.5)	(12.2)	-	56	12	下端を大きく、上端の裏面も大部分削り取られているとみられる。上端に柄を取り出している。裏面は斜めに削り、右側面と前面左方に段差が付いている。また裏面の中より右には、板の突起を設けている。マツ属原木束面直面。芯虫。
200	H14 IV層直上	木器類	土木部材	杭	(残存28.1)	(3.2)	(6.0)	-	56		上端を大きく、下端は2方向から斜めに削り、先端を尖らせていない。部分的に皮膜が残存する。芯持。
201	E15 IV層直上	木器類	土木部材	杭	(残存31.4)	(2.1)	(5.7)	-	56		上端を大きく、下端は2方向から斜めに削り、先端を尖らせている。板目。
202	E15 IV層直上	木器類	土木部材	杭	(残存35.1)	(2.4)	(6.2)	-	56		上端を大きく、下端は2方向から斜めに削り、先端を尖らせている。板目。
203	E15 IV層直上	木器類	土木部材	杭	(残存45.7)	(2.0)	(4.7)	-	56		上端・下端を大きく、下端は4方向から斜めに削り、先端を尖らせている。板目。
204	F14 IV層直上	木器類	土木部材	杭	(残存47.4)	(5.1)	(6.4)	-	56		上端を大きく、下端は4方向から斜めに削り、先端を尖らせている。芯持。
205	E15 IV層直上	木器類	土木部材	杭	(残存58.6)	(2.3)	(6.4)	-	56		上端を大きく、下端は2方向から斜めに削り、先端を尖らせている。裏面左側に刀物による傷が13箇所認められる。板目。
206	I13 Ⅲ層	木器類	加工材	端材	(5.0)	(0.9)	(3.6)	-	57		裏面・裏面はやや程いい、左端面・左側面は滑面である。
207	F3 Ⅲ層	木器類	加工材	端材	(3.6)	(1.0)	(3.7)	-	57		裏面は少部分、欠けしている可能性がある。それ以外の各面は比較的滑である。板目。
208	J6 Ⅲ層	木器類	加工材	端材	(4.5)	(0.6)	(3.6)	-	57	12	裏面はやや程いいが、それ以外の各面は滑面である。板目。
209	J9 -	石器類	石核石器	打製石斧	(10.6)	(2.0)	(4.6)	-	57	12	石材は砂岩片岩。重さ136.4g。
210	I8 IV層直上	石器類	石核石器	砥石	(9.4)	(2.0)	(8.4)	-	57	12	裏面は裏面・左側面の裏面。石材は砂岩。重さ168.8g。
211	H10 IV層直上	石器類	石核石器	砥石	(23.2)	(8.0)	(13.0)	-	57	12	石材は貴重な「白御前・裏面の3面」。裏面下端附近裏面上半などに多数の敲打痕。裏面中央やや下方に抜削付痕。石材は砂岩。重さ2,600g。
212	G14 Ⅲ層	金属器類	煙管	吸口	(7.9)	(1.2)	(1.2)	-	57	12	部分的に金色の光沢が認められる部分が多いことから、真鍮製とみられる。首部は丸めた金属板をねじで成形されており、火薬との間に接合部が認められる。首部内に細く刻まれた植物籠目が残っており、簡單的可能性がある。重さ12.0g。
213	I8 I層	金属器類	煙管	煙首	(5.1)	(1.5)	(4.2)	-	57	12	金色の光沢が認められる部分が多いことから、真鍮製とみられる。首部は丸めた金属板をねじで成形されており、火薬との間に接合部が認められる。首部内に細く刻まれた植物籠目が残っており、簡單的可能性がある。重さ7.6g。
214	G12 IV層直上	金属器類	古鏡	渡来鏡	(2.4)	(0.1)	(2.4)	-	57	12	銅製。吉祐通宝(北宋、1056年初鑄)。重さ3.6g。
215	G12 IV層直上	金属器類	古鏡	渡来鏡	(2.4)	(0.1)	(2.4)	-	57	12	銅製。天祐通宝(北宋、1068年初鑄)。重さ3.0g。
216	I7 Ⅲ層	金属器類	古鏡	渡来鏡	(2.3)	(0.1)	(2.3)	-	57	12	銅製。破損のため定かではない。元祐通宝(北宋、1078年初鑄)の可能性が高い。重さ2.3g。

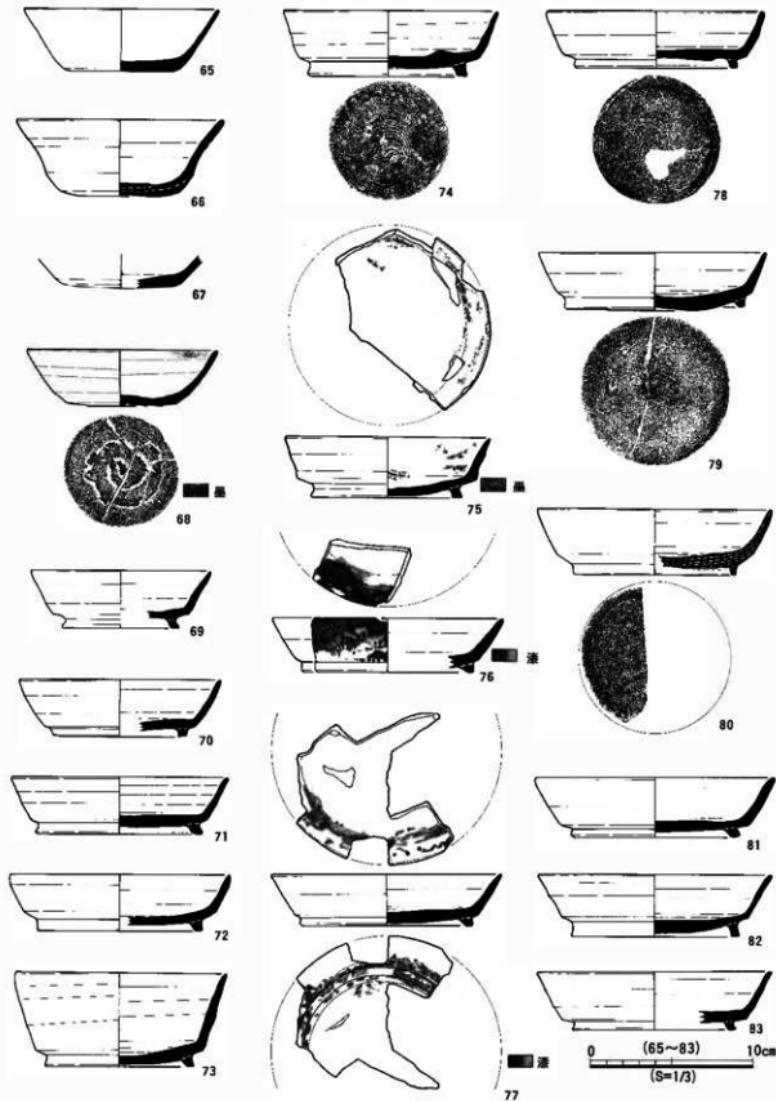
自然流路

NRc1(55~99)



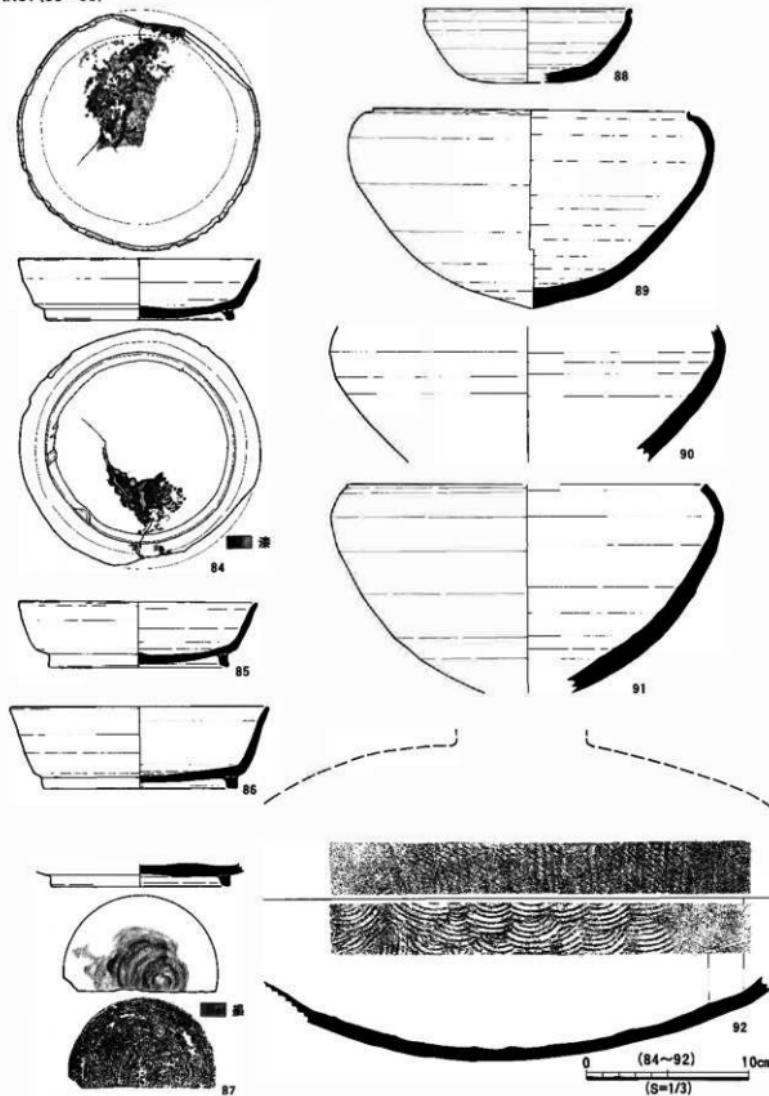
第46図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物（1）

NRc1 (55~99)



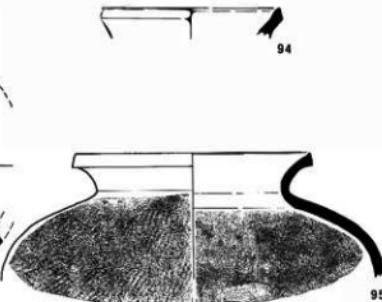
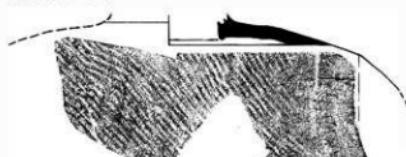
第47図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物（2）

NRc1(55~99)



第48図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物（3）

NRc1(55~99)



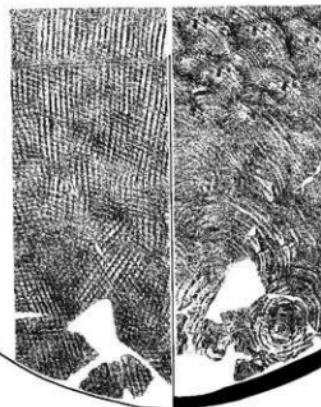
93

94

95



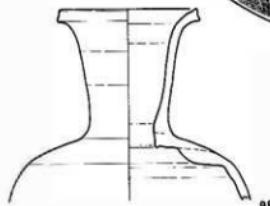
96



97

ピット  
SPc2(100)

100

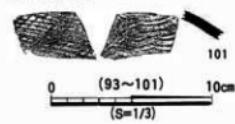


98



99

SPc5(101)

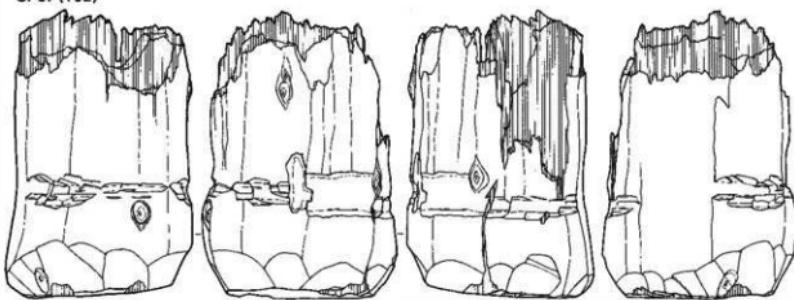


101

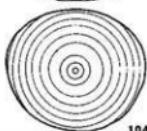
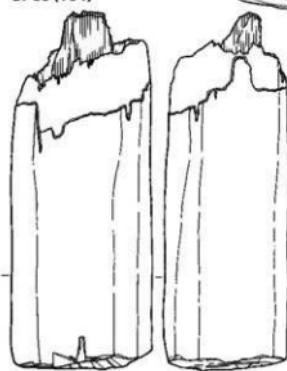
0 (93~101) 10cm  
(S=1/3)

第49図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物 (4)

SPc7(102)



SPc9(104)



SPc10(105)



105

SPc11(106)



106

■炭化

106

0 (106) 10cm  
(S=1/3)

SPc8(103)



103

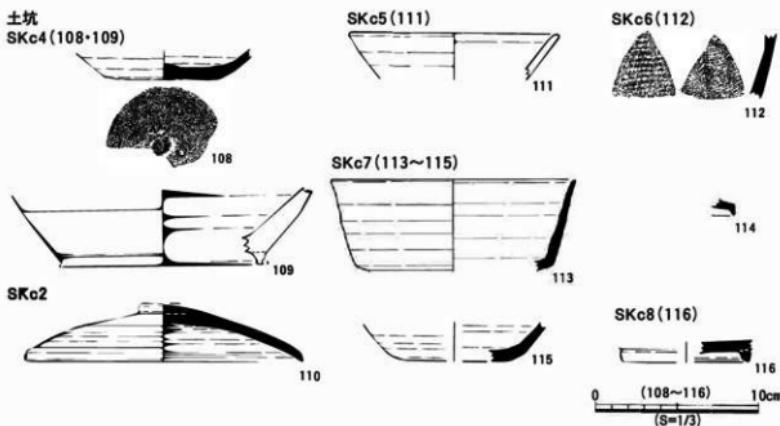
SPc15(107)



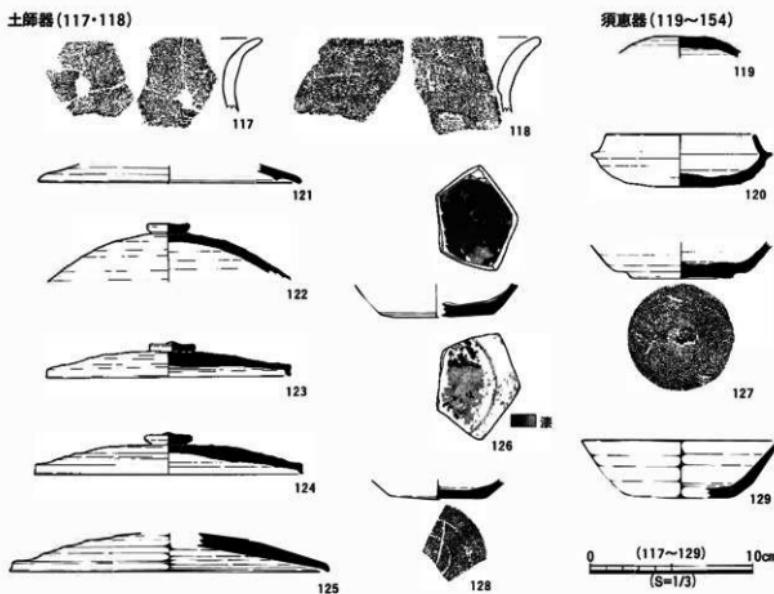
107

0 (102~105~107) 20cm  
(S=1/6)

第50図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物（5）

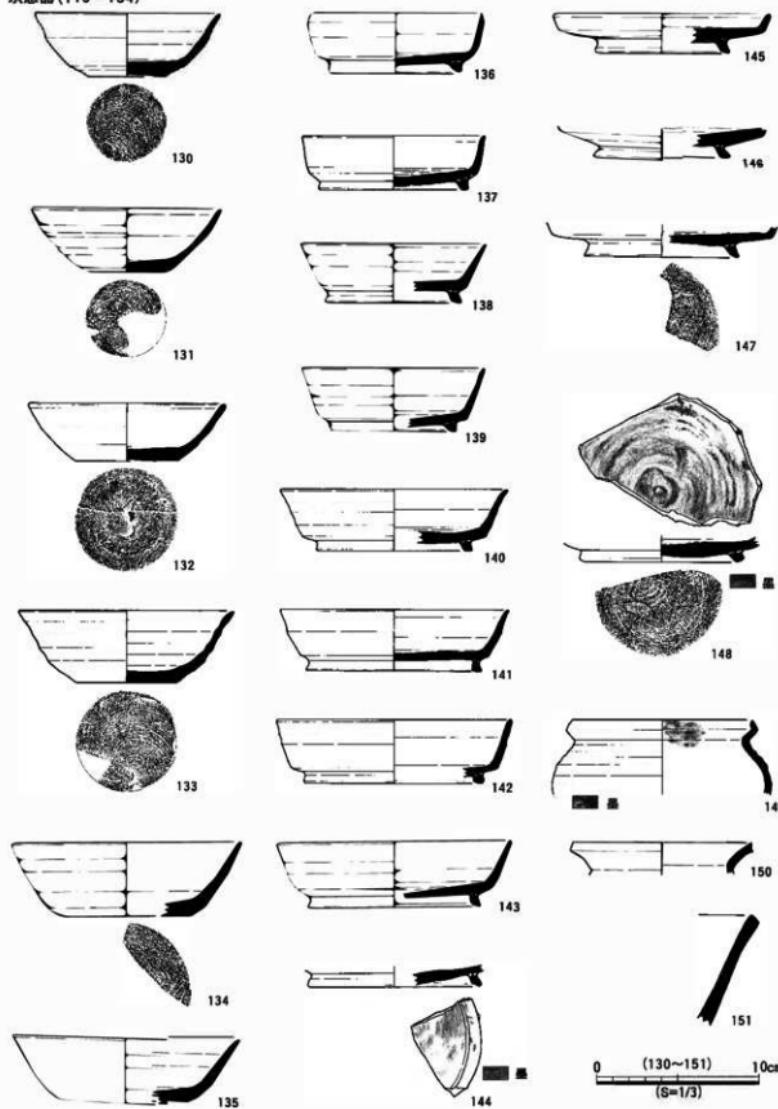


第51図 与島C地点遺跡 遺構内出土遺物 (6)



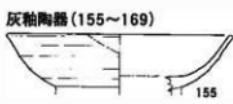
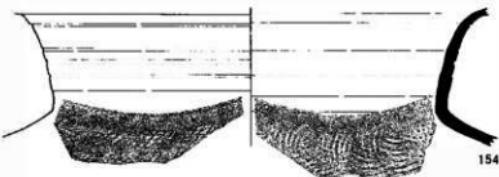
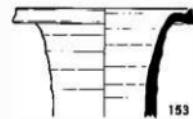
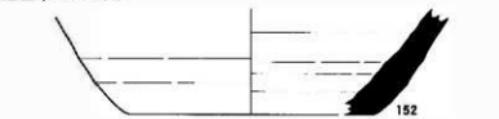
第52図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物 (1)

須恵器(119~154)

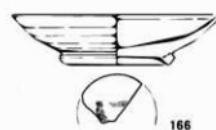
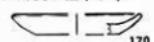


第53図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(2)

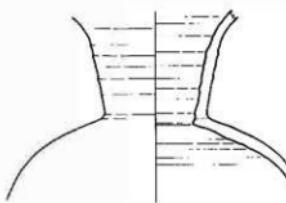
## 須恵器(119~154)



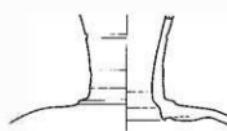
## 土師質土器(170)



## 輸入磁器(171~173)



## 山茶碗(174)

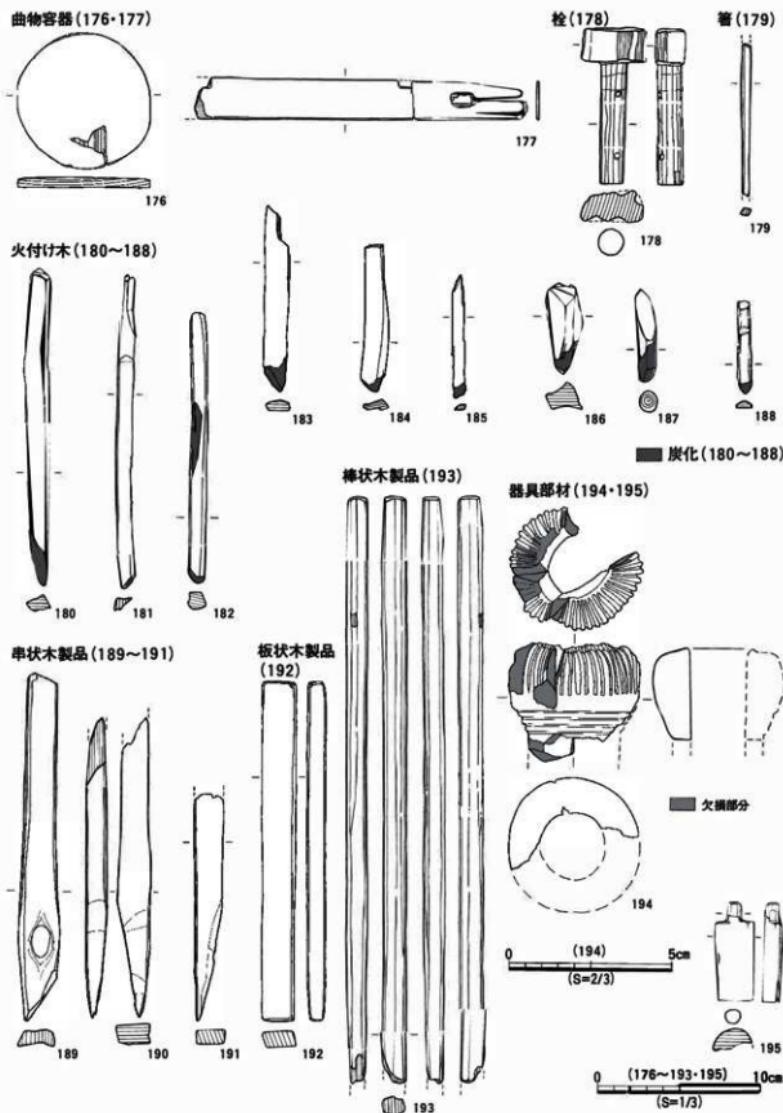


## 中近世陶器(175)



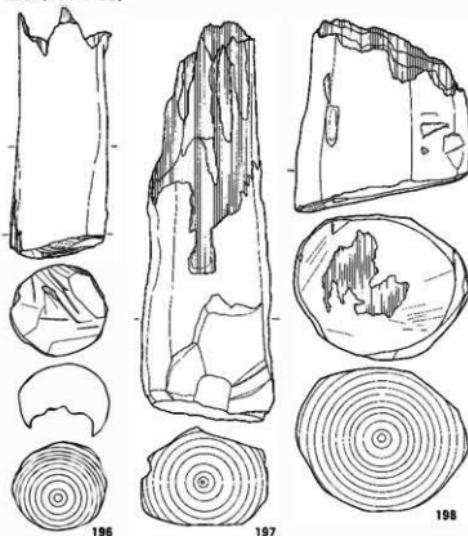
0 (152~175)  
(S=1/3) 10cm

第54図 与島C地点遺跡・包含層出土遺物(3)

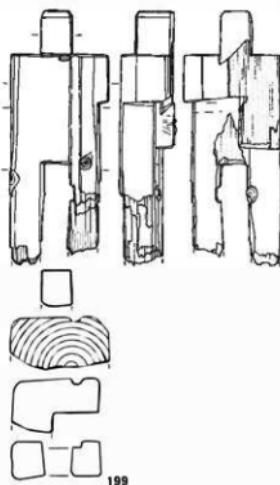


第55図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物 (4)

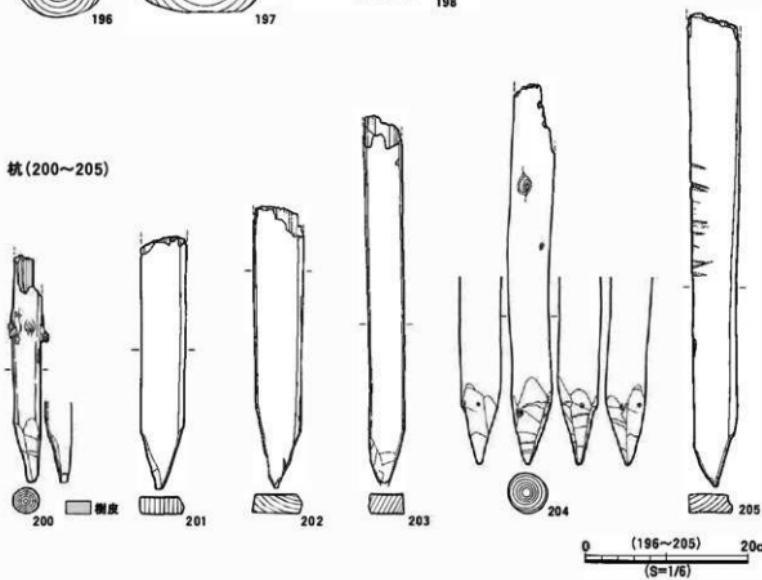
柱根(196~198)



建築部材(199)

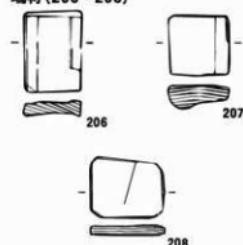


杭(200~205)

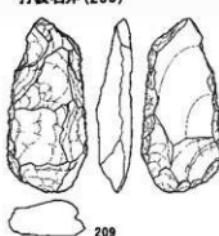


第56図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物(5)

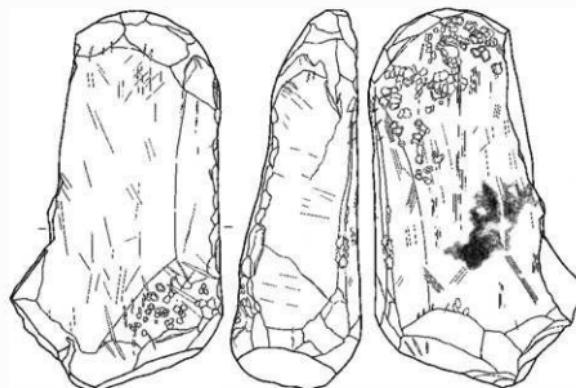
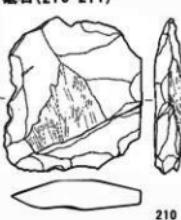
壺材(206~208)



打製石斧(209)



砥石(210・211)



■ 黒色炭化物

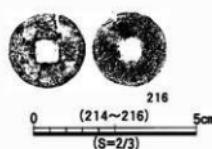
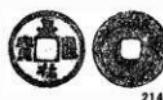


煙管(212・213)



0 (206~213) 10cm  
(S=1/3)

古錢(214~216)



0 (214~216) 5cm  
(S=2/3)

第57図 与島C地点遺跡 包含層出土遺物 (6)

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 与島B地点遺跡の花粉化石

#### 1 はじめに

与島B地点遺跡の発掘調査で、土師器、須恵器、近世陶器、古鏡の他、4条の溝を検出した。この発掘調査に際して2地点より土壤試料を採取し、この土壤試料について古植生を検討する目的で花粉分析を行った。分析は鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

#### 2 試料と分析方法

分析用試料は、SD b 4 の L-L' 断面（第26図上）より採取された4試料（試料番号③～⑥）と SD b 1 の G-G' 断面（第20図上）の1試料（試料番号②）の計5試料である。各試料について、試料③（6層）は灰黄褐色の砂で、黒褐色の有機質粘土が多く混入している。試料④（7層）は砂混じりの黒色有機質粘土～有機質粘土混じり砂、試料⑤（12層）は黒灰色の砂質有機質粘土～有機質粘土混じり砂である。試料⑥（15層）は黒褐色の砂質有機質粘土～有機質粘土混じり砂で、先の3試料の地山層にあたる。試料②（11層）は黒褐色の泥炭で、自然流路の底にあたる。花粉分析はこれら5試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重4～6g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成してを行い、その際サフラニンにて染色を施した。

#### 3 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉38、草本花粉21、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計62である。これら花粉・胞子の一覧を第19表に、またそれらの分布を第58図に示した。なお、分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図及び表においてハイフンで結んだ分類群は、それら分類群間の区別が困難なものを示し、バラ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため、便宜的に草本花粉に括して入れてある。

##### （1）L-L' 断面（試料③～⑥）

検鏡の結果、花粉化石の産出傾向に違いが認められたことから花粉化石群集帯（下位よりI、II）を設定し、その特徴を以下に示す。

花粉帯I（試料⑥）はハンノキ属とコナラ属コナラ亜属の優占で特徴づけられる。次いでコウヤマキ属が多く、出現率は10%を越えている。その他、マツ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科（以後

ヒノキ類と略す)、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、ニレ属—ケヤキ属、カエデ属が1%を越えて得られている。草本類ではカラマツソウ属が最も多く、出現率は20%を越えている。次いで約15%を示しているタンボボ亜科が多く、イネ科とヨモギ属が5%前後得られている。また単条型胞子がやや多く検出されている。

花粉帯II(試料③～⑤)はコナラ亜属の優占で特徴づけられ、出現率は20%前後を示している。次いでヒノキ類、スギ、クリ属が多く、10%前後の出現率を示している。一方、I帶で優占していたハンノキ属は激減しており、コウヤマキ属も大きく出現率を下げている。またマツ属複維管束亞属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)、クマシデ属—アサダ属、カエデ属、トチノキ属が3試料とも1%以上を示している。その他、クルミ属、ウルシ属、ブドウ属、イボタノキ属などが観察されている。草本類で10%を越える分類群はなく、その中ではヨモギ属が最も多く得られている。また試料③で水生植物のサジオモダカ属が若干観察されている。I帶で多く検出されていたカラマツソウ属やタンボボ亜科は激減しており、単条型胞子も半減している。

#### (2) G—G'断面(試料②)

コナラ亜属の優占で特徴づけられ、出現率は約45%を示している。次いで約17%を示しているクリ属が多く、ヒノキ類、アカガシ亜属、スギ、ブナが続いている。草本類で10%を越える分類群は無く、その中ではカラマツソウ属やツリフネソウ属が5%を越えて得られている。

### 4 与島B地点遺跡周辺の古植生

#### (1) L—L'断面

設定した花粉帯を基にプラント・オパール分析結果を合わせ、遺跡周辺の古植生について示す。

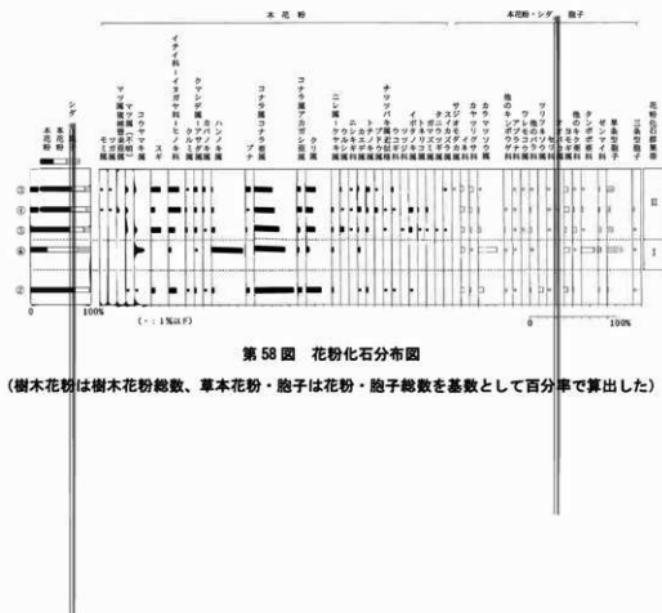
花粉帯Iの頃の遺跡周辺丘陵部ではコナラ亜属を中心にクリ属、ニレ属—ケヤキ属、カエデ属などの落葉広葉樹林が広く成立していたと推測される。また、コウヤマキ属などの針葉樹類も分布していたとみられ、常緑広葉樹のアカガシ亜属も一部に生育していたと推測される。一方、低地部ではハンノキ属が多く見られ、河畔林や湿地林を形成していたものと推測される。さらにそうした湿地や地下水位の高い所にヨシ、ツルヨシといったヨシ属が生育していたとみられ、また比較的乾いたところにはカラマツソウ属やタンボボ亜科、ヨモギ属、ウシクサ族(スキ、チガヤなど)、シダ類が生育する草地が存在していたと推測される。

花粉帯IIの頃になると、試料採取地点は流路が形成されるなど、低地部は河川の影響を強く受けたことが推測される。それまで河畔林や湿地林を形成していたハンノキ属はその影響をまともに受けたとみられ、わずかに残るくらいに減少したと推測される。同様に草地を形成していたカラマツソウ属、タンボボ亜科、ウシクサ族、シダ類はその生育地を大きく狭めたとみられる。こうした影響は丘陵部にもあったと推測され、一部に形成された荒地にスギやヒノキ類が侵入し、分布を拡大したものと推測される。しかしながら丘陵部ではコナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が依然として優勢であったとみられる。この落葉広葉樹林について、コナラ亜属はやや縮小傾向を示すが、反対にこの時期に入つて、クリ属やクマシデ属—アサダ属、トチノキ属などはやや生育地を広げたようである。また常緑広葉樹のアカガシ亜属も一部に生育していたとみられる。こうした森林の林縁部付近には中・低木類のウルシ属、ニシキギ科、ツツジ科、イボタノキ属、ガマズミ属、タニウツギ属などが生育していた

と推測される。さらにこれらの樹木に絡まるようにブドウ属やスイカズラ属といったつる植物が生育していたとみられ、下草の存在でクマザサ属型のササ類（ミヤコザサ、チマキザサなど）も分布を広げていたことが推察される。

## （2）G—G' 断面

花粉分析結果をみると、上記の花粉帶IIと似た産出傾向を示しており、試料採取層準（11層）堆積期の遺跡周辺丘陵部はL-L'断面の花粉帶II期と同様の植生、すなわちコナラ亜属を中心にはブナ、クリ属、クマシデ属—アサグ属、ニレ属—ケヤキ属、トチノキ属などが生育する落葉広葉樹林が広く成立していたと推測される。また針葉樹のスギやヒノキ類、常緑広葉樹のアカガシ亜属も一部に生育していたとみられる。この時期の流路周辺では好湿性のツリフネソウ属が群落を形成していたものと推測され、その周辺の比較的乾いたところにカラマツソウ属やヨモギ属、イネ科などが草地を形成していたとみられる。



第58図 花粉分布図

（樹木花粉は樹木花粉總数、草本花粉・胞子は花粉・胞子總数を基數として百分率で算出した）

第19表 産出花粉化石一覧表

和名	学名	③	④	⑤	⑥	⑦
<b>樹木</b>						
ヒノキ属	<i>Abies</i>	1	2	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	1	-	-	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	1	-	-	-
マツ属單被管葉木属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>	1	-	-	-	-
マツ属複被管葉木属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	4	8	4	-	4
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	7	7	7	2	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	6	5	7	13	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i> japonica D. Don	23	10	23	-	9
クルメイ科-イタガ科-ヒノキ科	<i>T. C.</i>	26	32	15	-	19
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	1	-	-
ケルミ属	<i>Juglans</i>	2	3	4	-	1
クマシダ属-アサガホ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	8	6	6	1	4
カバノキ属	<i>Betula</i>	6	4	1	-	2
シロノキ属	<i>Alnus</i>	5	5	41	6	-
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	11	2	3	-	9
コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	44	51	57	39	97
コナラ属アカシキコナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	9	12	6	2	10
クリ属	<i>Castanea</i>	24	18	20	4	37
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	4	3	2	3
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	-	-	1	-	-
カバノキ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	1
ウルシ属	<i>Ulmus</i>	3	2	8	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	3	-	1	-	-
ニシキギ科	<i>Celastraceae</i>	2	2	2	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	4	9	3	3	2
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	9	6	5	-	4
ブナ科	<i>Vitis</i>	2	8	3	-	-
ツツジ科近似種	c. <i>Stewartia</i>	-	1	1	-	1
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	4	1	-	-	2
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	-	-	2	-	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	1	-	-	-	-
イボクノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	11	7	-	2
トキリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	3	1	-	-
ニワトコ属近似種	c. <i>Sambucus</i>	1	2	-	-	-
タヌキモ属	<i>Vitis</i>	-	4	2	-	-
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	1	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	1	-	2	-	-
<b>草本</b>						
サジオモガカ属	<i>Alliaria</i>	3	-	-	-	-
クマザサ属	<i>Gramineae</i>	11	14	12	18	11
カワツリソウ科	<i>Cyperaceae</i>	-	7	2	3	-
サナエタケ属-ウチギカエ属	<i>Polygonaceae</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	-	-	-
イタドリ属	<i>Polygonaceae</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	1	-	-
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	-	1	-	-	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	1	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thlaspi</i>	3	4	9	86	18
他のソウ科	<i>other Brassicaceae</i>	-	2	4	1	1
アオノリソウ属	<i>Cruciferae</i>	2	2	2	3	1
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	1	-	1	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	2	4	7	1	3
マメ科	<i>Leguminosae</i>	8	14	3	2	2
フウロソウ属	<i>Geraniaceae</i>	3	-	-	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	16
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	2	1	1	-	2
セイヨウバコ属	<i>Plantago</i>	-	1	-	-	-
オミナシソウ属	<i>Patrinia</i>	-	1	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	15	20	7	26	12
他のキク属科	other Tubuliflorae	2	5	14	3	3
タンボボ科	<i>Liguliflorae</i>	1	7	3	62	-
<b>藻類</b>						
ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	5	5	10	14	3
单孔型孢子	<i>Monolete spore</i>	26	12	22	70	3
三孔型孢子	<i>Trilete spore</i>	-	6	3	3	1
<b>樹木花粉</b>						
草木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	208	220	200	111	215
シダ植物孢子	<i>Nonarboreal pollen</i>	68	86	72	205	72
花粉・孢子	<i>Sporites</i>	30	23	35	87	7
花粉・孢子総数		306	329	307	403	294
不明花粉		Unknown pollen	21	21	34	51

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

## 第2節 与島B地点遺跡のプラント・オパール

### 1はじめに

与島B地点遺跡の発掘調査で、水田稲作の存否を確認する目的で土壤試料を採取した。以下にはこの土壤試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、稲作の存否について検討した。分析は鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

### 2 試料と分析方法

分析用試料はL—L'断面（第26図上）より採取された4試料（試料番号③～⑥）である。各試料について、試料③（6層）は灰黄褐色の砂で、黒褐色の有機質土が多く混入している。試料④（7層）は砂混じりの黒色有機質粘土～有機質粘土混じり砂、試料⑤（12層）は黒灰色の砂質有機質粘土～有機質粘土混じり砂である。試料⑥（15層）は黒褐色の砂質有機質粘土～有機質粘土混じり砂で、先の3試料の地山層にある。プラント・オパール分析はこれら4試料について以下の手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピーブ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレバーラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピーブが300個に達するまで行った。

### 3 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーブ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第20表）、それらの分布を第59図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検査の結果、試料④より1400個のイネのプラント・オパールが検出された。最も多く得られているのはクマザサ属型で、試料③では約40,000個を示しており、上位に向かい増加する傾向がみられる。次いでウシクサ族が多く、試料③では約26,000個を示している。キビ族は上位3試料で9,000個前後とやや多く検出されており、ヨシ属は2,500個～8,500個を示している。その他ではネザサ節型が上部試料で若干検出されている。

第20表 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
③	0	4,200	39,600	8,500	7,100	25,500	18,400
④	1,400	1,400	18,100	2,800	9,700	8,400	9,700
⑤	0	0	6,300	2,500	8,900	13,900	10,100
⑥	0	0	8,100	5,800	1,200	7,000	4,600

#### 4 稲作について

上記したように、イネのプラント・オパールが試料④より若干検出されている。ここでイネの検出個数について示すと、イネのプラント・オパールが試料 1g 当り 5,000 個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。与島 B 遺跡では試料④（7 層：水田耕土）より 1,400 個と上記の 5,000 個には達していない。また水田耕土と推測されている 6 層の試料③ではイネのプラント・オパールは検出されていない。以上のことから、少なくとも試料採取地点における稲作の可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断される。

#### 5 遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているクマザサ属型のササ類（ミヤコザサ、チマキザサなど）については、主に森林の下草的存在で生育していたと推測される。同試料を用いて行われている花粉分析において遺跡周辺ではスギやヒノキ類の針葉樹林やコナラ属コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が成立していたと推測されており、クマザサ属型のササ類はこれら森林の林下に広く成育していたとみられる。

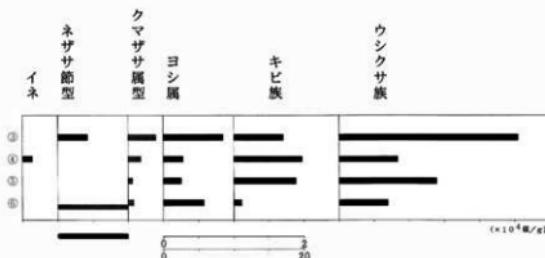
ウシクサ族（スキ、チガヤなど）は遺跡周辺の空き地や上記森林の林縁部といった日のあたる開けたところに生育していたと推測される。またネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）も同じような所に分布していたとみられる。

ヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）については自然流路などの水域に生育していたとみられる。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、ズメノヒエ、イヌヒエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明であるが、現生標本観察からみると雑草類ではないかと思われる。

#### 引用文献

藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」『考古学ジャーナル』227、PP2-7、ニュー・サイエンス社



第 59 図 プラント・オパール分布図

### 第3節 与島B地点遺跡出土櫛木胎の材質同定および塗膜分析

#### 1 はじめに

与島B地点遺跡の調査では、古墳時代中期の土師器高杯が大半を占めるSD b 1下層から結歯式堅櫛が出土した。結歯式堅櫛の櫛歯および帯材を同定し、残存部分の大部分に認められる黒色塗膜が塗か否かを判定するために、木胎の材質同定および塗膜の分析を行った。分析は黒沼保子・藤根久（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

#### 2 試料と方法

試料は、古墳時代の溝SD b 1の下層から出土した結歯式堅櫛である（写真3-1a, 1b）。細長い材を束ねてU字に曲げ、頭部と歯の境を薄い板状の帯で巻いて留めている。その後、全体に黒褐色の塗膜が塗られている。

木胎の材質同定は、櫛の本体と櫛の材を束ねている帯の2カ所について行った。試料は、剃刀を用いて切片を探取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

塗膜分析は、典型的な表面部分から一部を削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光株式FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

第21表 木胎材同定および塗膜分析を行った資料

遺物番号	分析No.	器種	遺構	層位	時期	塗膜の特徴
22	1	結歯式堅櫛	SD b 1	下層（黒粘土、植物遺存）	古墳時代	黒褐色光沢塗膜

#### 3 結果と考察

以下に、結歯式堅櫛の木胎の材質同定と塗膜分析について述べる。

##### [木胎の材質同定]

櫛の本体はタケ亜科であった。帯は状態が悪く横断面の観察が行えなかったが、接線断面において維管束と柔細胞が確認できたことから、タケ亜科の可能性が高い。

タケ亜科の木質部分は強靭性、弾力性、割裂性、柔軟性に優れているため、編組製品や割竹・ヒゴ竹として利用される（内村2010）。本試料もヒゴ状にした素材を束ねて曲げて使用されており、タケの特性を生かした作りになっている。なお、帯部は、タケ亜科の稈を薄く縦に割いて、歯の周りに巻いたものと推定される。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を写真3に示す。

##### (1) タケ亜科 Gramineae Subfam. Bambusoideae イネ科 写真3-2a, 2b(木体), 3a(帯)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、柔細胞中に維管束が散在する不齊中心柱である。帯（写真3-3a）は横断面が確認できなかったが、接線断面で維管束と柔細胞が確認できたことから、タケ亜

科の可能性が高い。

タケ亜科は、二次肥大成長を行わないため木本とはいえないが、高木化するために木材のように用いられる。割裂性が非常に大きい。タケ・ササの仲間で 12 属が含まれるが、桿の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

第 22 表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

#### 4 おわりに

溝 SDB 下層から出土した結歯式堅櫛について、木胎の材質同定と塗膜分析を行った。

その結果、櫛歯および齒に巻いた薄い板状の帯材は、いずれもタケ亜科の桿であった。なお、帯部は、タケ亜科の桿を薄く継に割いて、歯の周りに巻いたものと推定される。また、塗膜はウルシオールの吸収が確認され、漆と同定された。

#### 引用文献

内村悦三 2010 「タケ・ササ図鑑」 PP219、創森社

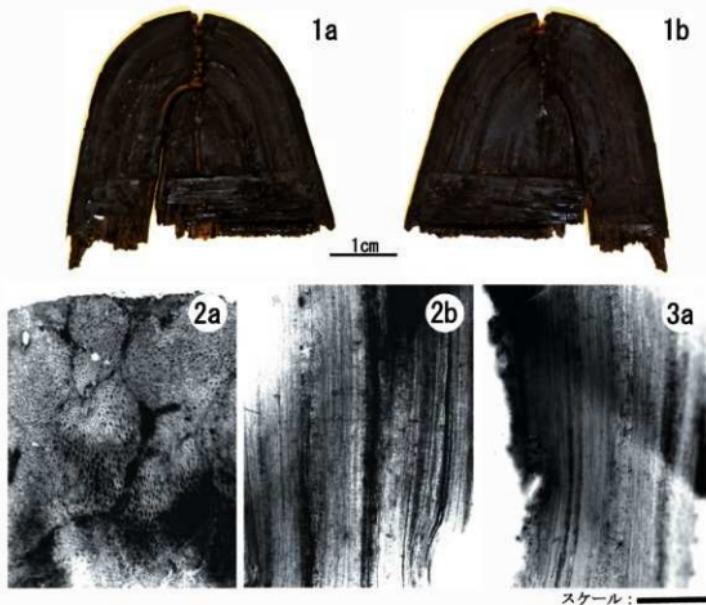
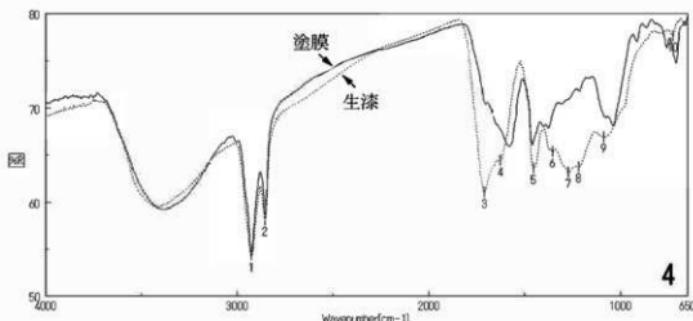


写真3 与島B地点遺跡出土結齒式堅櫛と木胎組織の光学顕微鏡写真

1a-1b. 櫛の外観 2a-2b. 本体木胎（タケ亜科） 3a. 蒂木胎（タケ亜科） a:横断面、b:放射断面または接線断面  
(スケール=200 μm)



第60図 塗膜の赤外吸収スペクトル図 (縦軸: 透過率、横軸: 波数、数字: 生漆の赤外吸収位置)

## 第4節 与島C地点遺跡出土木器類の樹種同定

### 1はじめに

与島C地点遺跡は高山市に所在する、古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。ここでは保存処理に伴って行った木器類13点の樹種同定結果を報告する。分析は黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

### 2 試料と方法

試料は、曲物底板が1点、栓状木製品が1点、用途不明特殊品が1点、火付け木が2点、板状木製品が1点、部材が1点、端材が1点、棒状木製品が1点、柱根が4点の合計13点である。各木製品の時期は不明である。

方法は、木取りの確認後、剃刀を用いて試料の3断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

### 3 結果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亞属とヒノキの2分類群、広葉樹はクマシデ属クマシデ節（以下クマシデ節と呼ぶ）、クリ、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）の3分類群、合計5分類群が確認された。木取りは曲物底板が板目、板状木製品が板目、栓状木製品・用途不明特殊品・部材・棒状木製品が芯無削出、端材が芯持削出、火付け木が割材、柱根は破片状で木取りが確認できないものが1点あった他は芯持丸木であった。結果の一覧を第23表、器種別にまとめたものを第24表に示す。

第23表 樹種同定結果

遺物番号	分析No.	器種名	樹種	木取り
176	1	曲物底板	ヒノキ	板目
178	2	栓	ヒノキ	芯去
194	3	器具部材	クマシデ属クマシデ節	芯去
106	4	火付け木	ヒノキ	芯去
180	5	火付け木	ヒノキ	芯去
192	6	板状木製品	ヒノキ	板目
199	7	建築部材	マツ属複維管束亞属	芯去
103	8	柱根	マツ属複維管束亞属	みかん割り
193	9	棒状木製品	ヒノキ	芯去
104	10	柱根	クリ	芯持
198	11	柱根	クリ	芯持
197	12	柱根	コナラ属コナラ節	芯持
102	13	柱根	ヒノキ	芯持

第24表 器種別樹種一覧

樹種/器種	柱根	曲物底板	火付け木	栓状木製品	棒状木製品	板状木製品	用途不明特殊品	部材	端材	計
マツ属複維管束亞属								1	1	2
ヒノキ	1	1	2	1	1	1				7
クマシデ属クマシデ節							1			1
クリ	2									2
コナラ属コナラ節	1									1
計	4	1	2	1	1	1	1	1	1	13

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 図版15 1a-1c (No. 8)

仮道管と垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエビセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁には内側に向いた鋸歯状の突起がみられる。鋸歯状の突起が大きいことから、アカマツの可能性が高い。

マツ属複維管束亞属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大で加工困難である。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版15 2a-2c (No. 5)、3c (No. 6)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性が大きく、耐朽性、耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

(3) クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科 図版15 4a-4c (No. 3)

やや小型から中型の道管が単独若しくは放射方向に数個複合して散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は10段程度の階段状となる。放射組織は1～3列幅で上下端1列が直立する異性となるが、集合放射組織の出現はやや少ない。

クマシデ節は本州・四国・九州・朝鮮などの温帯から暖帯に分布する落葉中高木で、クマシデとサワシバがある。低山地や人里近くに多く生育する。材は比較的重硬で、韌性に富み、割裂し難い。

(4) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版15 5a-5c (No. 11)

大型の道管が年輪のはじめ数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は单一である。放射組織は同性で主に單列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

(5) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinns* ブナ科 図版15 6a-6c (No. 12)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は单一である。放射組織は同性で、單列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。いずれも重硬で弹性を持つ材で、保存性は中庸、割裂・加工は困難である。

#### 4 考察

古墳時代から中世の木製品の樹種同定を行った結果、柱根はヒノキとクリ、コナラ節の3分類群、曲物底板・火付け木・栓状木製品・棒状木製品・板状木製品はいずれもヒノキ、用途不明特殊品はクマシデ節、部材・端材はマツ属複維管束亞属であった。火付け木のヒノキは2点とも年輪幅が非常に狭く、日当たりが悪いなど生育環境の良くないところで育ったぬか目材か、枝材もしくは辺材部を使

用したと思われる（図版 15 2a-2c 参照）。ヒノキは樹脂を比較的多く含むため、燃えやすいといえる。また、ヒノキ材は木理直通で加工がしやすく耐朽性に優れているため、木製品から建築材まで幅広く利用される。本遺跡でも柱根や木製品などに最も多く用いられていた。端材の火付け木にもヒノキが用いられていることから、原材料となるヒノキが周辺の森林に豊富に存在していたと考えられる。

柱根には、ヒノキが 1 点あったほかはクリとコナラ節のブナ科の材が芯持丸木で用いられていた。クリやコナラ節などブナ科の材は、岐阜県下でも縄文時代から近世の遺跡で建築材としての利用が確認されており（山田 1993）、材質は重硬で加工困難であるが、保存性が高いため建築材として有用である。

同じ高山市内の深沼遺跡で行われている花粉分析では、縄文時代中期末～中世までの植生が復元されている（鈴木 1993）。これによると、縄文時代はクリやコナラ節を中心とした落葉広葉樹が多いが、中近世に近づくにつれてヒノキ科が増加する傾向がみられる。本遺跡の木製品で利用されていたマツ属複維管束亞属やヒノキ、クマシデ節、クリ、コナラ節に対応する花粉も各時代で検出されている。このことから、本遺跡の木製品には遺跡周辺に生育していた樹木が利用されており、目的に応じて樹種を選択利用していたと考えられる。

#### 引用文献

- 鈴木茂 1993 「深沼遺跡の花粉分析およびプラント・オパール分析」『深沼遺跡』PP27-36、岐阜県文化財保護センター
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史ー」『植生史研究』特別第 1 号、PP242、日本植生史学会

## 第5節 与島C地点遺跡出土須恵器の付着物分析

### 1はじめに

与島C地点遺跡の調査では、古代の自然流路から平安時代頃の須恵器や灰釉陶器が出土した。出土した須恵器に漆等とみられる付着物が見られたことから、付着物分析を行った。分析は、藤根久（株式会社パレオ・ラボ）が行った。

### 2 試料と方法

分析試料は、須恵器の付着物5点である（第25表、第61図）。分析は、有機成分を調べるために赤外分光分析を行った。なお、測定は、分析No.2とNo.4およびNo.5は、外面と内面の各付着物について行った。

第25表 付着物分析を行った須恵器と付着物の特徴

遺物番号	分析No.	器種	付着位置 (図版No.)	付着物の特徴	備考	結果
63	1	摘み蓋	口縁部内面	黒褐色光沢物	内面のみ付着	劣化した漆
77	2	有台坏	底部外面(2b)	黒色無光沢物(煤状)	底部外面	漆(他成分有)
			内面(2c)	黒色無光沢物(煤状)	内面	漆(他成分有)
76	3	有台坏	口縁部内面	黒色光沢物(タール状)	内外面、口縁部のみ	漆(他成分有)
126	4	無台坏	底部外面褐色部(4b)	黄色肥厚物、褐色光沢物薄層		漆(他成分有)
			底部内面黄褐色部(4c)	黒色無光沢肥厚物、 黄褐色肥厚物、 褐色光沢物薄層		漆(他成分有)
84	5	有台坏	底部外面(5b)	黒~褐色光沢物 (下地に黄色土様)		漆
			内面(5c)	黒色光沢物(蠟有)		漆(他成分有)

試料は、付着物の表面部分において手術用メスを用いて薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した奥化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光㈱製 FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

### 3 結果および考察

以下に、赤外分光分析の結果を述べる。第61・62図に各付着物の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber(cm<sup>-1</sup>)；カイザー)である。各スペクトル図の縦軸はノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は、比較試料の赤外吸収位置を示す(表26)。図に示した比較試料は、分析No.2については菜種油、分析No.1とNo.3～No.8については生漆である。なお、菜種油と生漆は市販品である。その他、適宜、牛油や膠、植物油等とも比較検討した。

[分析No.1(摘み蓋: 遺物No.63)]

付着物は、口縁部内面に付着する光沢のある黒褐色物である(図版16-1a, 1b)。

測定した結果、生漆の吸収No.9に相当する位置の吸収が大きく、生漆のウルシオールの吸収(No.6～No.8)は明瞭でない。また、No.9の大きな吸収は、生漆の劣化に伴うゴム質の吸収と考えられ6

第26表 比較物質の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	菜種油		生漆		
	位置	強度	位置	強度	ウルシ成分
1	3010.34	93.5443	2925.48	28.5337	
2	2925.48	78.3370	2854.13	36.2174	
3	2854.13	84.5913	1710.55	42.0346	
4	1747.19	82.8324	1633.41	48.8327	
5	1457.92	93.5560	1454.06	47.1946	
6	1376.93	95.5795	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1239.04	94.7156	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1162.87	91.3110	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1098.26	94.2649	1087.66	53.8428	
10	723.18	95.8987	727.03	75.3890	

る。これ以外の吸収は、生漆の吸収と一致することから（第60図-1）、分析No.1は生漆が劣化したものと考えられる。

#### [分析No.2(有台坏: 遺物No.77)]

底部外面の付着物は煤状の黒色物（図版16-2a, 2b）、内面の付着物は同様に煤状の黒色物である（図版16-2c）。

測定した結果、底部外面黒色物および内面の煤状黒色物とも、生漆のウルシオールの吸収（No.6～No.8）がやや明瞭でないが、生漆の吸収とほぼ一致する吸収が見られたことから（第60図-2）、生漆と考えられる。ただし、生漆以外の吸収も見られることから、他の成分が混入している可能性が高い。

#### [分析No.3(有台坏: 遺物No.76)]

付着物は、口縁部内面の広い範囲に付着するタール状で光沢のある黒色光沢物である（図版16-3a, 3b）。

測定した結果、生漆の吸収No.9に相当する位置の吸収がやや大きく、生漆のウルシオールの吸収（No.6～No.8）が明瞭でない。この大きな吸収は、生漆の劣化に伴うゴム質の吸収と考えられる。これ以外の吸収は、生漆の吸収とほぼ一致することから、生漆が劣化したものと考えられる。ただし、生漆以外の吸収も見られることから、他の成分が混入している可能性が高い。なお、この付着物は灯明油である可能性が予想されたが、分析の結果、菜種油などの植物系油の吸収とは異なっている（第61図-3）。

#### [分析No.4(無台坏: 遺物No.126)]

底部外面に黄色肥厚物および褐色光沢物薄層（図版16-4b）、底部内面に黒色の無光沢肥厚物、黄褐色肥厚物、褐色光沢物薄層が付着している（図版16-4a, 4c）。

測定した結果、底部外面褐色物および底部内面黄褐色物とも、生漆のウルシオールの吸収（No.6～No.8）が明瞭でないが、ウルシオール以外の吸収は生漆の吸収と一致することから（第62図-4）、生漆と考えられる。ただし、生漆以外の吸収も見られるため（第62図-4）、他の成分が混入している可能性が高い。

なお、本遺物はパレットである可能性が予想されたが、顕微鏡観察では縮み皺等の痕跡は見られなかつた。

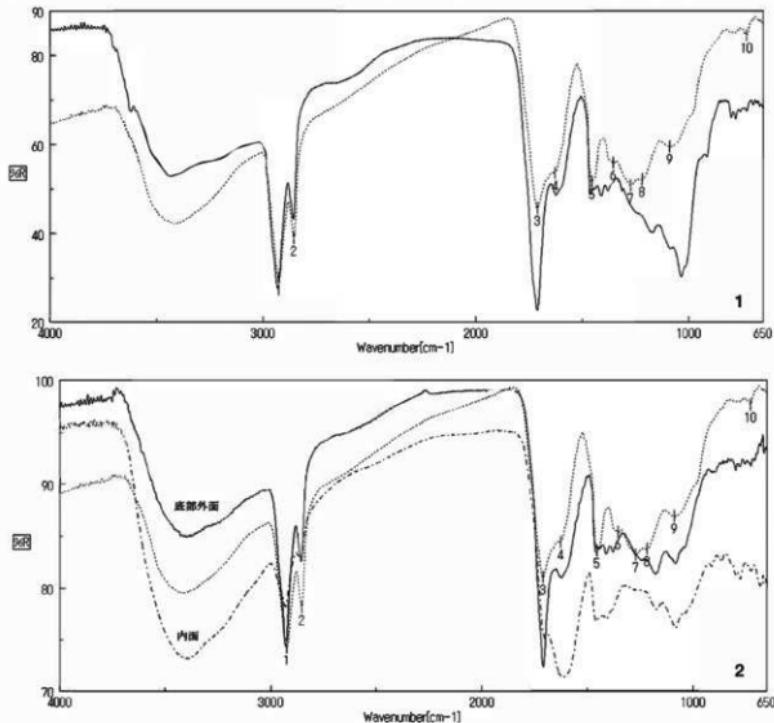
[分析 No. 5 (無台坏: 遺物 No. 84) ]

付着物は、底部外面が黒～褐色光沢物（図版 16-5a, 5b）、内面が皺のある黒色光沢物（図版 16-5c）である。

測定した結果、底部外面の黒～褐色物および内面の黒色物とともに、生漆のウルシオールの吸収（No. 6～No. 8）が明瞭でないが、ウルシオール以外の吸収は生漆の吸収と一致することから（第 62 図-5）、生漆と考えられる。ただし、内面黒色物には生漆以外の吸収も見られることから、他の成分が混入している可能性が高い。

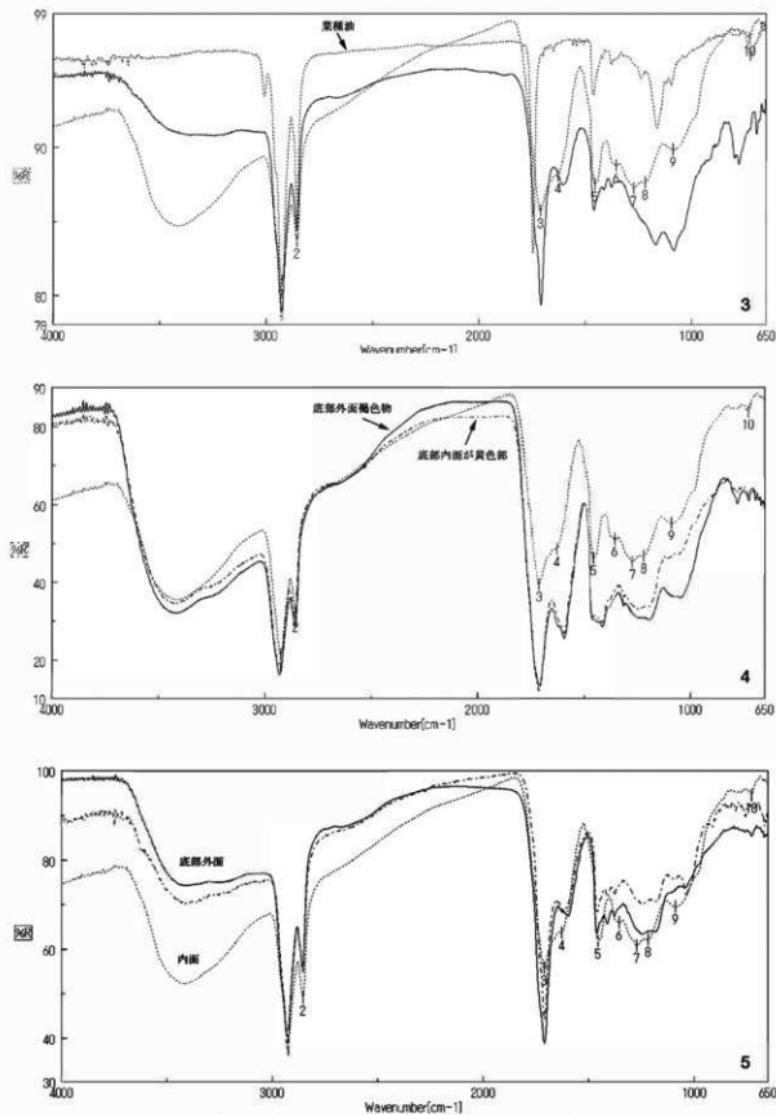
#### 4 おわりに

須恵器の付着物について、有機成分を調べるために赤外分光分析を行った。その結果、分析 No. 1（摘み蓋: 遺物 No. 63）は劣化した漆、分析 No. 5（無台坏: 遺物 No. 84）の外面は漆と推定された。その他の付着物については、漆の可能性があるが、漆以外の成分が混入している可能性も示された。



第61図 須恵器付着物の赤外吸収スペクトル図（1）

（縦軸：透過率、横軸：波数、数字：生漆の赤外吸収位置） 1. 摘み蓋（遺物No. 63） 2. 有台坏（遺物No. 77）



第62図 須恵器付着物の赤外吸収スペクトル図（2）

（縦軸：透過率、横軸：波数、数字：生漆の赤外吸収位置） 3. 有台壺（遺物No. 76） 4. 無台壺（遺物No. 126） 5. 有台壺（遺物No. 84）

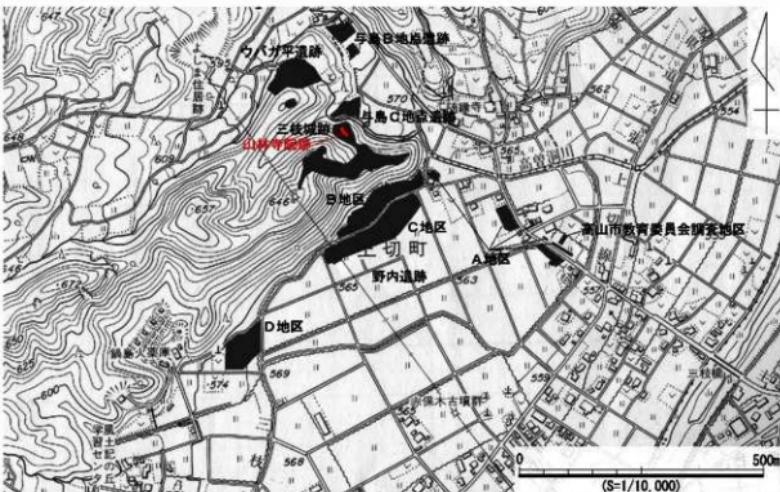
## 第6章 総括

今回の与島B地点遺跡・与島C地点遺跡発掘調査で得ることのできた知見をまとめ、地域史における両遺跡の位置付けを提示し、調査成果を総括する。当センターでは、近年、近隣区域においてウバガ平遺跡、野内遺跡、三枝城跡といった諸遺跡の発掘調査を行い、すでに個別に報告を終えているので、それらの成果とも照合しつつ精査を進めたい<sup>1)</sup>。

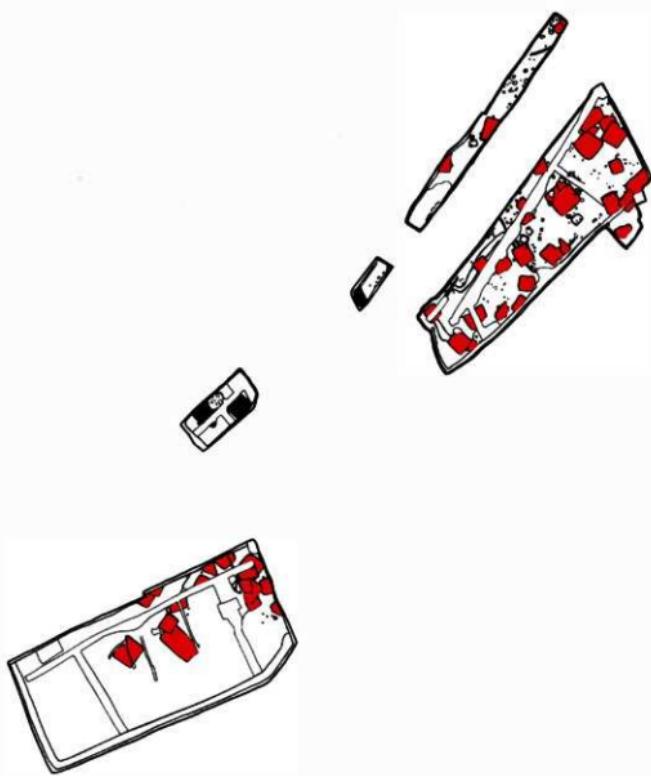
### 1 与島B地点遺跡のまとめ

検出構造は溝・土坑・ピット・自然流路、合わせて16基にとどまり、それらの中に本来の機能や性格の明確なものはみられない。したがって、遺跡の性格について明言することは控えたいが、注目すべき成果として、SD b 1をはじめとする溝から、ある程度のまとまりを持った遺物群が出土したことを挙げてよいであろう。それらは古墳時代に属するものと、古代に属するものの2群に大別できる。

古墳時代の遺物では、まず、SD b 1出土遺物のうち主体を占める土師器高坏（1～11）が注目される。丸みを帯びた碗状の坏部は、口縁端部が外側に短く屈曲して外反する。短い脚部は、斜め下方に開く柱部と内彎気味に開く裾部からなり、両者間には明瞭な境を持つ。以上は、飛騨地域の古墳時代中期（5世紀代）の高坏に広く認められる特徴と判断される<sup>2)</sup>。近隣では、当遺跡の南東約0.5kmに位置する野内遺跡A地区の集落跡（第64図）において多数出土したことが知られている。SD b 2出土の高坏（23）、SD b 4出土の高坏（29）、包含層出土の高坏（30～34）についても共通する特徴



第63図 周辺主要遺跡の立地



0  
50m  
(S=1/1,000)

第64図 野内遺跡A地区の古墳時代中期集落跡

を備えることから、やはり古墳時代中期に属するとみてよいであろう。また、土師器壺（12・13）、土師器甕（14・15）、土師器壺（35）についても、同時期の遺物とみて違和感はない。

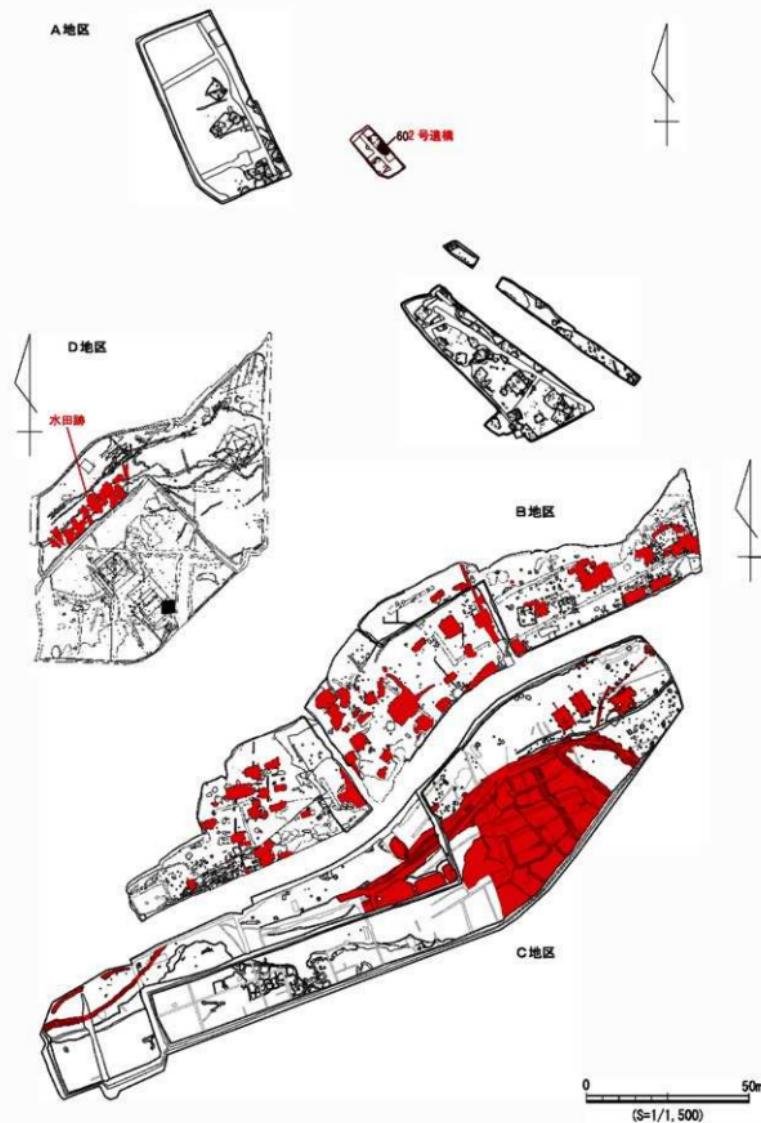
古墳時代ではさらに、SD b 1から櫛（22）が出土したことが特筆される。全国的にみれば類例は稀ではなく、岐阜県内でも龍門寺1号墳（岐阜市）で40個体以上出土していたことが知られているが<sup>3)</sup>、飛騨地域では初の確認例となる。古墳時代に特有の作りが認められる個体であり、SD b 1出土土師器が古墳時代中期に属するもので占められることから、この櫛についても古墳時代中期頃の遺物とみてよいであろう。

野内遺跡A地区の古墳時代中期集落跡では飛騨最古級の須恵器が出土しているが<sup>4)</sup>、当遺跡の出土須恵器には古墳時代中期にさかのぼる要素は認められない。古墳時代後期に属するものがわずかにみられるものの（36・37）、大部分は明らかに古代の遺物である。器種構成を窺えるほどの数量が出土しておらず、特徴的な個体も見当たらないため、帰属時期を厳密に特定することは難しい。しかし、底部外面に回転糸切り痕が認められる個体（16）がみられることと、灰釉陶器を伴うことから、それらの大部分の帰属時期を平安時代前半頃と捉え、それにやや先立つ時期の遺物を含むものと考えておいて大過ないであろう。同時期の遺物は、南方約0.4kmに位置する野内遺跡B地区及びC地区において大量に出土しているほか、南西約0.1kmのウバガ平遺跡、南方約0.2kmの三枝城跡の山林寺院跡でも確認しており、特に珍しくはない。ただし、わずかながら墨書土器（24・26）が出土したことは、文字の使用に関わる遺物が多数出土した野内遺跡B地区・C地区との繋がりを示唆する事象として注目される。

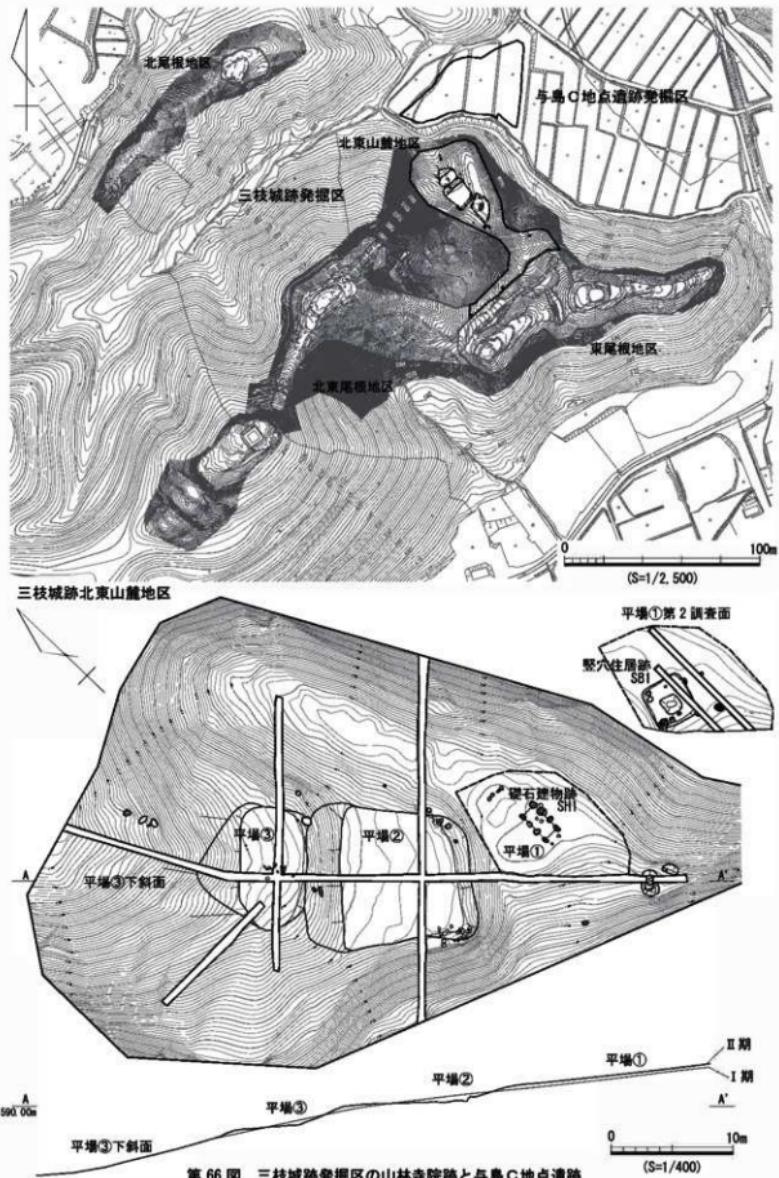
## 2 与島C地点遺跡のまとめ

まず、出土遺物について概観すると、古代に属するものが大半を占めることは明らかである。土器類では縄文土器・弥生土器は皆無であり、主体を占めるのは須恵器・土師器・灰釉陶器である。須恵器には古墳時代に溯源する器種もみられるが（119～121）、少数にとどまる。また、包含層からは輸入磁器・山茶碗など中世以降の遺物も出土しているものの、やはり多くはない。木器類についても同傾向と判断される。個体そのものの属性から帰属時代を特定できるものはほとんどないとはいえ、曲物容器・箸・火付け木・端材などを含む器種構成が野内遺跡C地区で出土した古代の木器類に類似しており<sup>5)</sup>、両者間に関連性を見出すのは難しいことではない。

古代の土器類についてより詳しくみてゆくと、まず、須恵器と灰釉陶器の数量に大きな開きがあることに気付く。須恵器の出土破片数1,750点に対し灰釉陶器は85点に過ぎず、灰釉陶器は須恵器の20分の1程度にとどまっている。近隣の大規模遺跡に目を向けると、野内遺跡C地区では須恵器25,904点に対し灰釉陶器の出土破片数は8,075点と3分の1近くに達しており<sup>6)</sup>、当遺跡の特異性が浮き彫りとなる。ここで注目したいのが、当遺跡の上方に隣接する三枝城跡の北東山麓地区的様相である。この地区は古代の山林寺院跡が確認されたことで知られるが（第66図）、須恵器718点に対し灰釉陶器の出土破片数は37点と、須恵器のほぼ20分の1の値を示し、当遺跡での比率に符合するのである<sup>7)</sup>。さらに、碗より杯が優勢であるほか、仏具とみなされる鉄鉢を含むという須恵器の器種構成上の類似も認められ、当発掘区の出土土器類には、三枝城跡発掘区の山林寺院跡との間に強い関連性を窺うことができる。漆の使用に関わる可能性のある個体が少なくないことも（63・76・77・84・



第65図 野内遺跡各地区の古代の遺構



126)、目立った共通点として挙げてよいであろう<sup>8)</sup>。墨書き土器の可能性のあるもの(166)、墨の付着が認められるもの(68・75・87・144・148・149)がみられるのも、文字の使用が想定される寺院に関連する遺物であるならば不自然なことではない。灰釉陶器普及前の8世紀代から灰釉陶器普及後の平安時代前半にかけての時期に属する遺物群と捉えておきたい。

遺構に目を向けると、土坑・ピット・自然流路、合わせて96基を検出したとはいえ、特筆すべき点はみられない。しかし、当発掘区が単なる三枝城跡発掘区の山林寺院跡からの流れ込み品の堆積地かといえば、そうではあるまい。柱の並びこそ確認には至らなかったものの、柱根が残存する柱穴を複数検出しておらず、発掘区内に掘立柱建物群が存在したことは疑いない。柱穴そのものの出土遺物にそれら建物群の帰属時代の拠り所を求めるることはできないが、発掘区全体の出土遺物組成から判断して、山林寺院との同時代性を疑う必要はないものと考える。今回の発掘区が、古代に営まれた山林寺院の区域内に含まれる可能性は高いとみるべきであろう。

### 3 地域史における与島B地点遺跡・与島C地点遺跡の位置付け

本書での報告をもって、平成13年度のウバガ平遺跡発掘調査に始まる高山インターチェンジとその周辺区域における一連の調査は、ひとまず完結する。今回の与島B地点遺跡・与島C地点遺跡発掘調査成果を地域史に位置付けるに当たり、まず、それらの調査における主な成果について振り返っておきたい。

平成13年度と19年度に合わせて5,060m<sup>2</sup>の発掘調査を行ったウバガ平遺跡では、弥生時代中期後半の集落跡を検出し、飛驥独自の弥生土器とされる内垣内式土器がまとまって出土したことが注目される。併せて、川上川左岸一帯に分布する古墳群の中でも最終末段階に位置付けられるウバガ平古墳群を発見したことや、飛驥地域で初めて古代の土器焼成坑を確認したことを見逃せない成果として挙げられる。平成14年度から18年度調査にかけて調査を行った野内遺跡は、総発掘面積23,900m<sup>2</sup>に及ぶ広大な遺跡であった。前述のとおり遺跡東端に位置するA地区において古墳時代中期の集落跡を検出したほか、遺跡中央のB地区において鍛冶工房跡を伴う古代の集落跡を検出し、その南隣のC地区から遺跡西端のD地区にかけての区域で集落跡と同時期の水田跡を検出したことが特筆される。多数の墨書き土器や綠釉陶器などが出土したことから、それらは公的な性格を帯びた開発を示唆するものと捉えることができる。平成18年度と20年度に9,510m<sup>2</sup>の調査を行った三枝城跡では、戦国時代の山城の曲輪を確認したにとどまらず、先にも記したとおり、20年度発掘区において山林寺院跡とみられる古代の平場群を確認するという予想外の成果を収めている。

以上の隣接する3遺跡、合わせて38,470m<sup>2</sup>の発掘調査により、特に成果の大きかった古代、より具体的には平安時代前半頃については、往時における土地利用の全体像を提示するに至った。すなわち、山麓緩斜面から平地にかけての居住適地では集落を営んで鉄製品の生産を行うとともに、その前面の低湿地では水田耕作を行い、さらに、集落背後の山中には信仰ないし修行の場を設け、必要に応じて土器生産を行うという、立地特性に応じた合理的な土地利用を窺うことができるのである<sup>9)</sup>。

本書で報告してきた与島B地点遺跡と与島C地点遺跡の発掘調査では、両遺跡を合わせても3,500m<sup>2</sup>の発掘面積を加えたに過ぎない。しかも、特徴的な遺構を欠き、出土遺物も決して豊富ではないことから、それら自体では大きな成果を収めたと評価することはできないと言わざるを得ない。しかし、

上記3遺跡における調査成果と結びつけることにより、両遺跡の調査が地域史研究にもたらした寄与が明らかとなる。以下のとおりである。

①与島B地点遺跡における成果から、すでに野内遺跡A地区で見出されていた古墳時代中期における人々の活動が、より広範囲に及ぶものであったことが明らかとなった。さらに、古墳時代の櫛(22)の発見は当地における有力者の存在を示唆するものと捉えることができ、飛騨地域の古墳造営初期段階において、当遺跡を含む高山盆地北西部が先進的な地域であったことを裏付ける重要な発見と評価される。

②与島B地点遺跡及び与島C地点遺跡の成果から、野内遺跡B地区・C地区で確認された平安時代前半頃における集落形成、水田開発といった人々の活動もまた、周辺区域における小規模な活動を伴うものであったことが明らかとなった。

③与島C地点遺跡において古代の遺構を検出し、从具とみなすべき遺物を発見したことにより、三枝城跡発掘区で見出された古代山林寺院の規模が、より広範囲なものであった可能性が高いことが明らかとなった。

与島B地点遺跡及び与島C地点遺跡の発掘調査成果は、野内遺跡・ウバガ平遺跡・三枝城跡の発掘調査成果から導かれた地域史に大きな更新を加えるような内容を持たないとはいえ、地域史の細部を補完するものに位置付けてよいであろう。

最後に、今回の与島B地点遺跡・与島C地点遺跡発掘調査を含む高山インターチェンジとその周辺区域における一連の調査により、多くの未解明部分を残していた弥生時代以降の飛騨地域史に、多くの新たな頁を書き加えたことを強調しておきたい。古代の飛騨国については、律令制下における「下国」との位置付けが知られているためか、今日なお「山間の小国」と否定的に捉えられることが多いと言わざるを得ない。しかし、野内遺跡出土の木器類や墨書き器、三枝城跡発掘区で発見された山林寺院跡といった多彩な成果により、そのような一般的なイメージが必ずしも適切ではないことを実証できた。その点に、一連の調査が飛騨の地域史研究に対してなし得た最大の寄与があると考えている。

## 第6章 注

1) 本章において、既注の調査成果の引用は、主として以下の文献による。

①財団法人岐阜県教育文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』

②財団法人岐阜県教育文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』

③財団法人岐阜県教育文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』

④岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』

⑤岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』

⑥岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』

なお、第64図～第66図は、上記文献から引用の上、編集したものである。出典は以下のとおりである。

第64図：文献①第7図（32頁）

第65図：文献①第7図（32頁）、文献②第66図（110頁）、文献③図24（第1分冊43頁）、文献⑥第238図（第2分冊147頁）

第66図：文献④第95図（163頁）

2) 飛騨地域の古墳時代中期の高杯については、前掲注1) 文献①のほか、国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡 1次・2次発掘調査報告書』に詳しい。

3) 龍門寺1号墳から出土した古墳時代の櫛については、以下の文献を参照されたい。

①岐阜市教育委員会1962『岐阜市長良龍門寺古墳』

- ②岐阜市 1979『岐阜市史 史料編 考古・文化財』204~215頁
- 4) 前掲注1) 文献①所載の31・64・201。
- 5) 野内遺跡C地区では、古墳時代から中世以降に至る28,963点もの木器類破片が出土しているが、それらのうち曲物容器・箸・火付け木・端材などは須恵器・灰釉陶器集中区域で出土する傾向が強く、古代の遺物とみなされる。詳しくは前掲注1) 文献⑤を参照されたい。
- 6) 前掲注1) 文献⑥の第1分冊145頁。
- 7) 前掲注1) 文献⑤の109頁。
- 8) 三枝城跡では、内外面に漆を塗った須恵器鉄鉢が出土している。前掲注1) 文献⑥の第2分冊149~159頁に詳述してあるので参照されたい。

### 参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2010『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 亀田修一編 2003『考古資料大観 第3巻 弥生・古墳時代 土器Ⅲ』小学館
- 北野博司 2001「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第9号、北陸古代土器研究会
- 岐阜県教育委員会 2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 岐阜県文化財保護センター 2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』
- 岐阜県文化財保護センター 2011『三枝城跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2012『野内遺跡C地区』
- 岐阜市 1979『岐阜市史 史料編 考古・文化財』
- 国府町教育委員会 1993『半田垣内遺跡 1次・2次発掘調査報告書』
- 国府町史刊行委員会 2007『国府町史 考古・指定文化財編』
- 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編I』
- 小瀬忠司 2011「飛騨の須恵器と灰釉陶器」『研究事業報告(平成22年度版)』岐阜県ミュージアムひだ
- 小松大秀 1989『日本の美術 第275号 化粧道具』至文堂
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『野内遺跡A地区』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『野内遺跡D地区』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『赤保木遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2009『野内遺跡B地区』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1997『与島古墳群』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『富田新井遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田宮田遺跡・富田下遺跡』
- 財団法人長野県埋蔵文化財センター 1997『石川条里遺跡第3分冊』
- 齊藤孝正 2000『越州窯青磁と綠釉・灰釉陶器』至文堂
- 田中彰 2001「飛騨地域の古墳」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 東海土器研究会 2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の中構築』
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代篇』
- 文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査のてびき』同成社
- 上枝村史編纂委員会 2000『上枝村史』
- 山田昌久編 2003『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・織維製品』小学館
- 吉田江美子 2003「須恵器長頸瓶の製作技法-山形県内の窯跡出土資料から-」『(財) 山形県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号、財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 四柳嘉章 2006『ものと人間の文化史 131-1 漆I』法政大学出版局

# 写 真 図 版



与島B地点遺跡全景（北から）



与島C地点遺跡全景（西から）

図版 2



与島日地点遺跡 全景（南から）



与島日地点遺跡 全景（西が上）



与島B地点遺跡 北区全景（西が上）



与島B地点遺跡 南区全景（西が上）

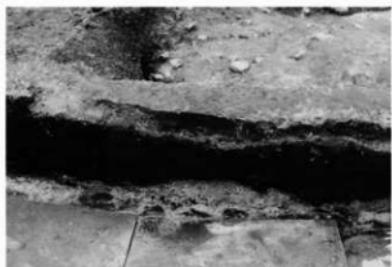
図版4



SDb 1 完掘状況（南から）



SDb 1 Gライン土層（南から）



SDb 1 南区南壁面土層（南東から）



SDb 2 完掘状況（南東から）



SDb 2 須恵器（19）出土状況（北西から）



SDb 2 須恵器（26～28）出土状況（北から）



SDb 3 完掘状況（南東から）



SDb 4 完掘状況（南から）

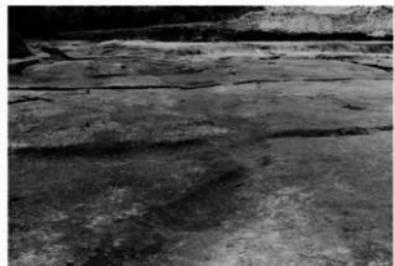


与島C地点遺跡 全景（東から）



与島C地点遺跡 全景（南が上）

図版 6



NR c 1 完掘状況（東から）



NR c 1 (H11・H12 区) 遺物出土状況（南東から）



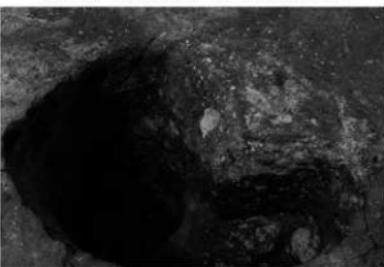
NR c 1 土器（55・63・65・91）出土状況（南東から）



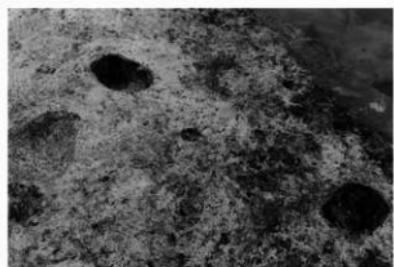
NR c 1 須恵器（92）出土状況（北から）



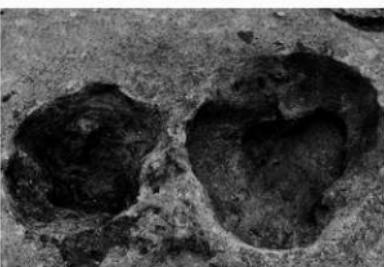
SP c 1 土層（南東から）



SP c 2 土層（南東から）



SP c 3・SP c 7・SK c 69 完掘状況（南東から）



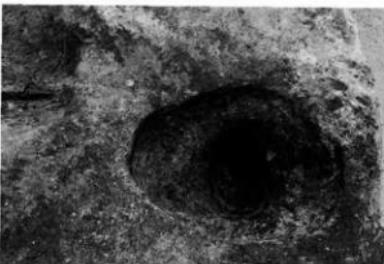
SP c 4・SP c 5 完掘状況（東から）



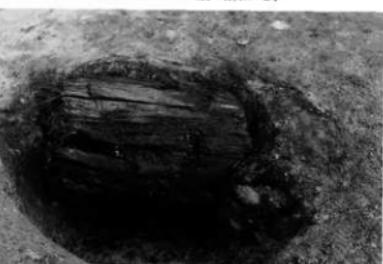
SPc 4 土層（西から）



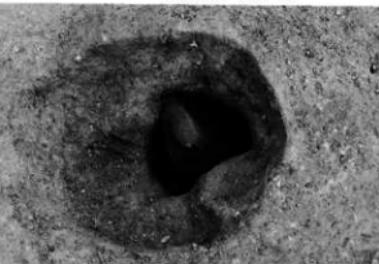
SPc 5 土層（東から）



SPc 6 完掘状況（東から）



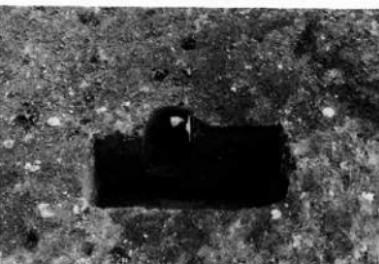
SPc 7 柱根出土状況（南東から）



SPc 8 柱根出土状況（北から）



SPc 9 土層（東から）



SPc 9 柱根出土状況（東から）

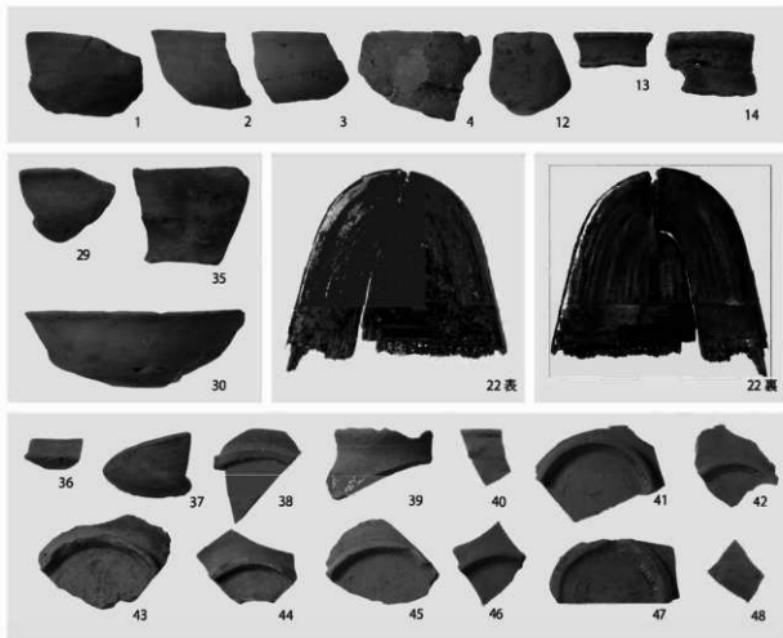


SPc 20 完掘状況（南から）

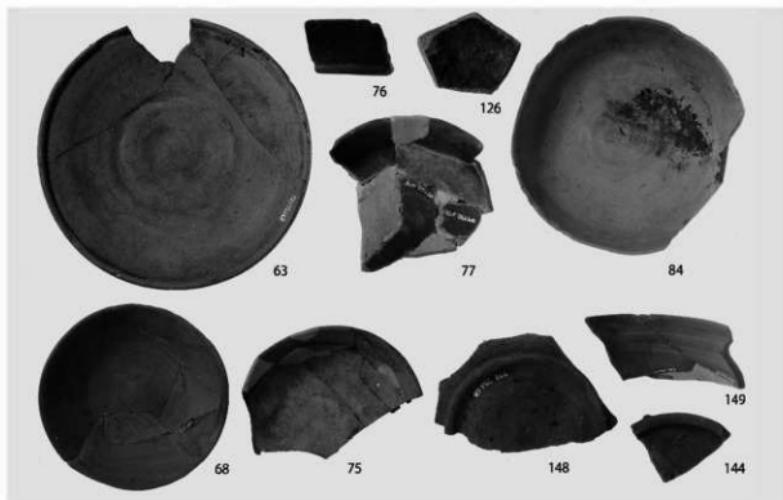
圖版 8



与島日地点遺跡出土遺物（1）

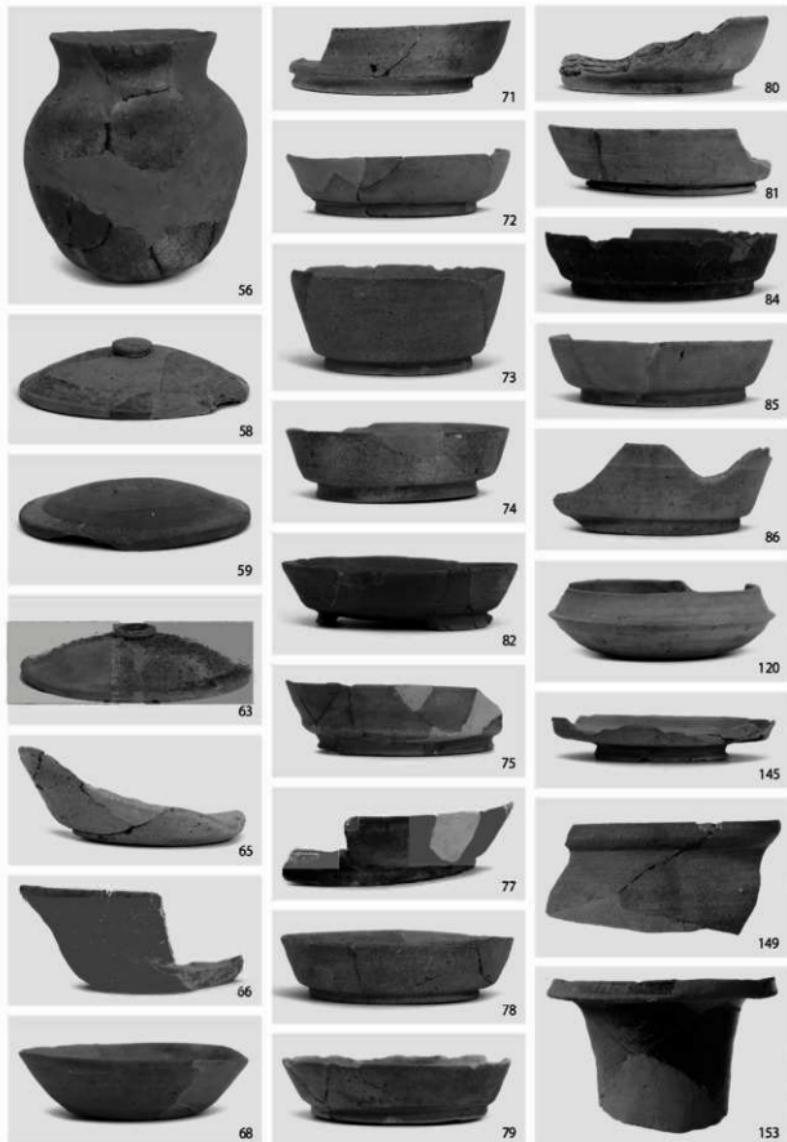


与島B地点遺跡出土遺物（2）

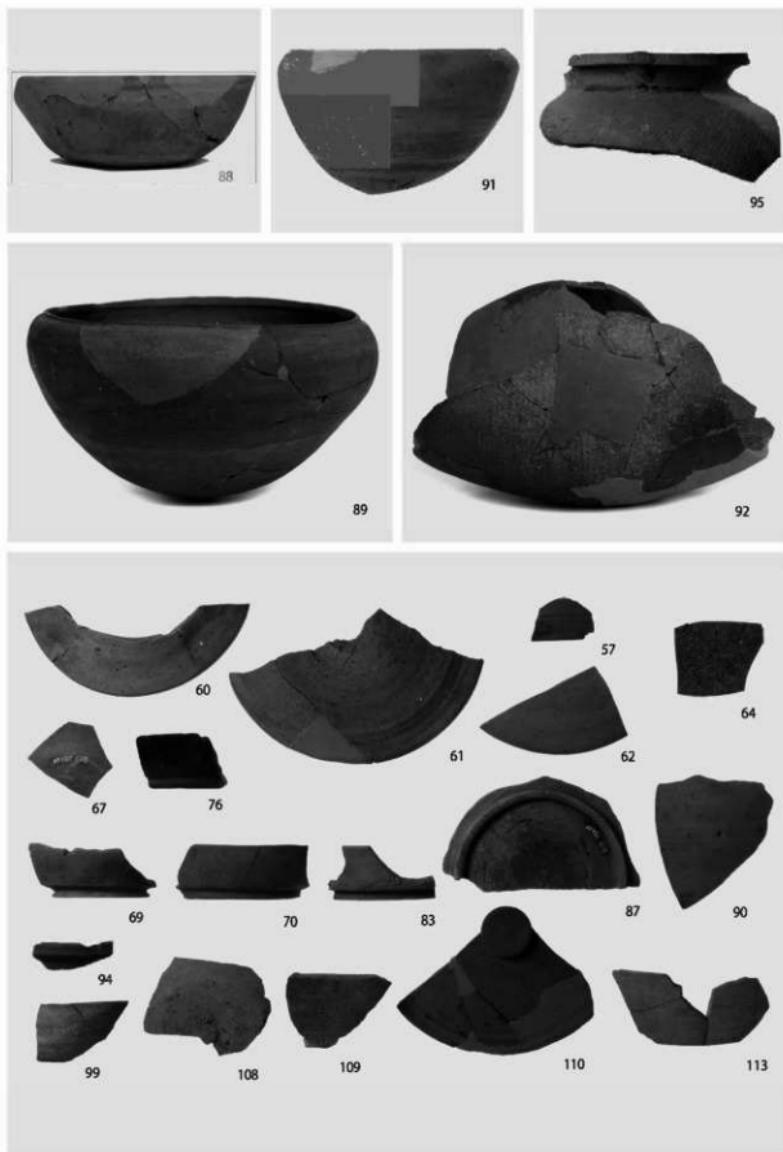


与島C地点遺跡出土遺物（1）（上段：漆付着、下段：墨付着）

図版10

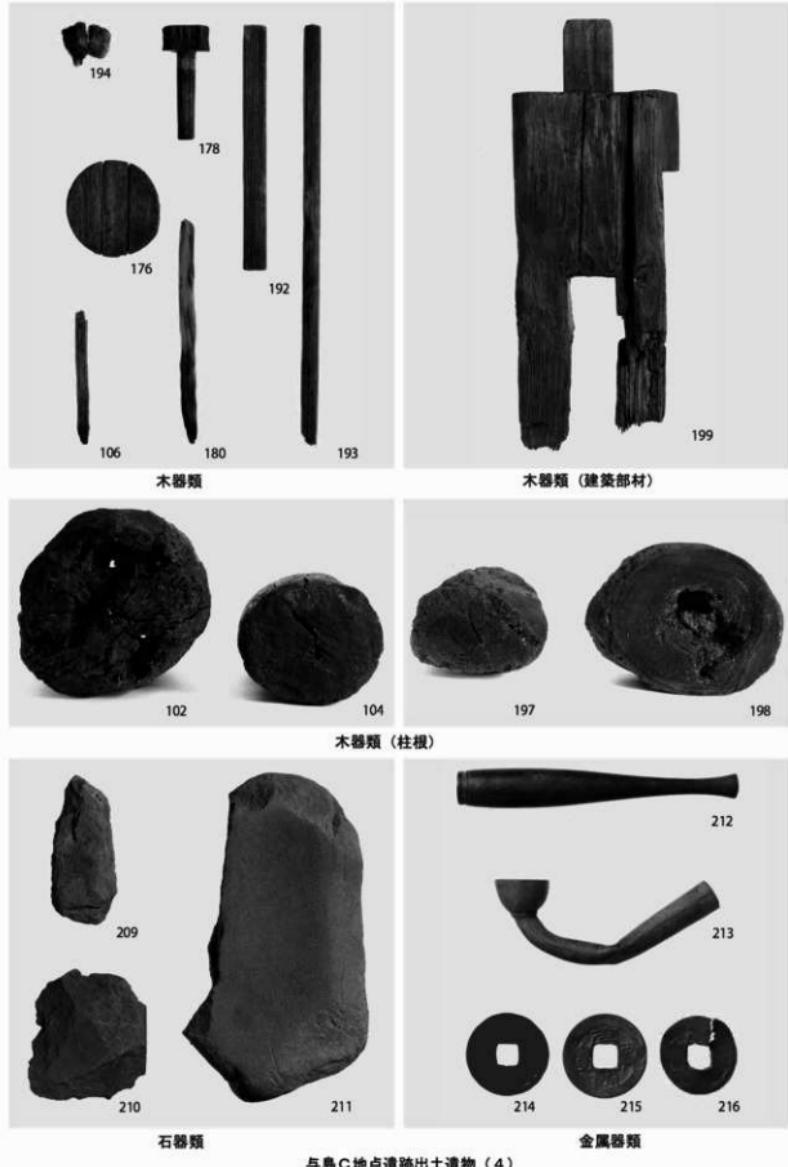


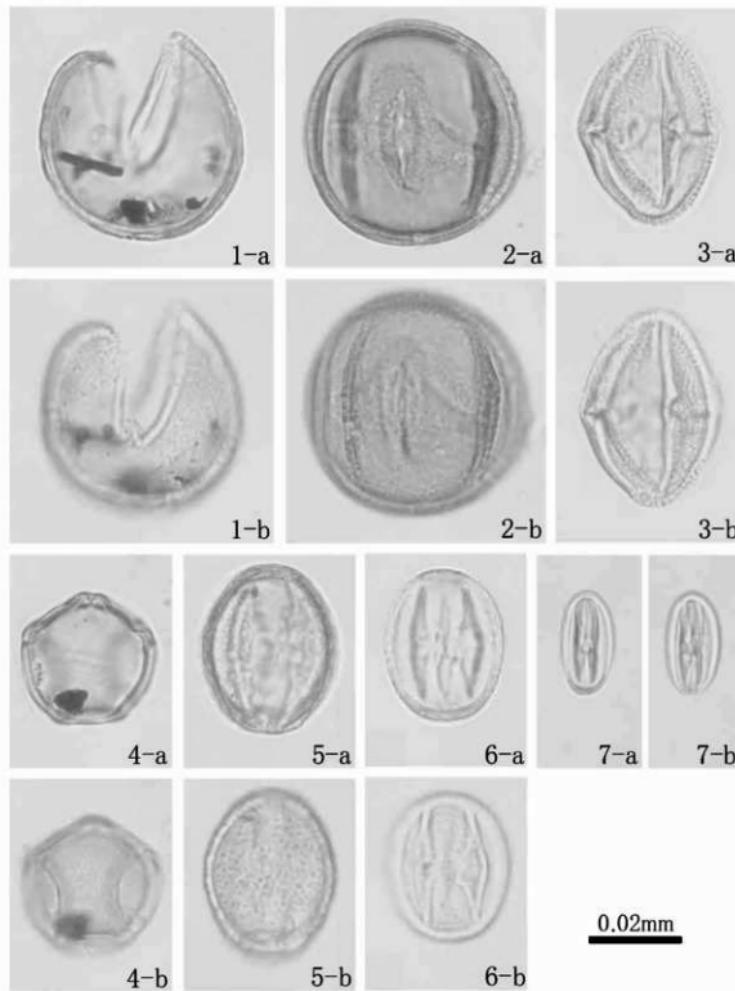
与島C地点遺跡出土遺物（2）



与島C地点遺跡出土遺物（3）

圖版12

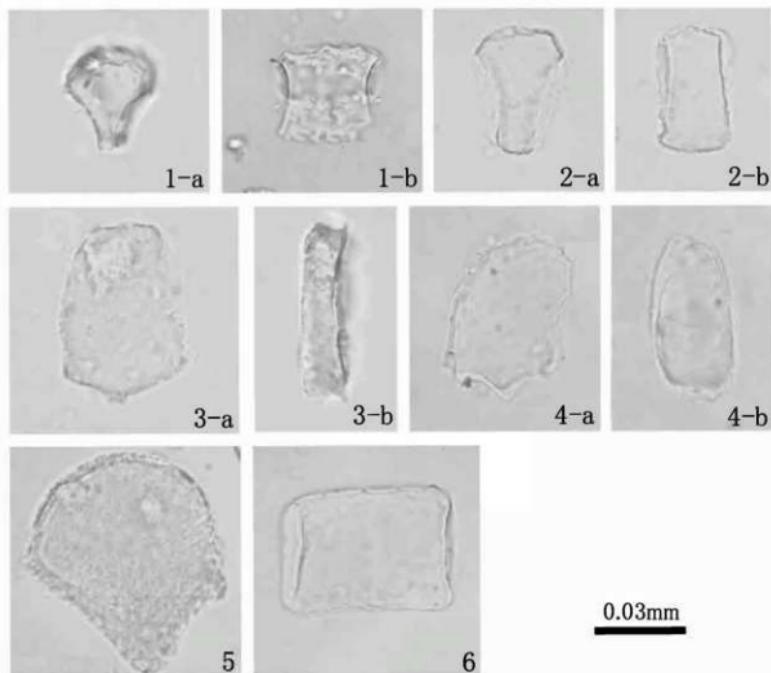




## 与島B地点遺跡の花粉化石

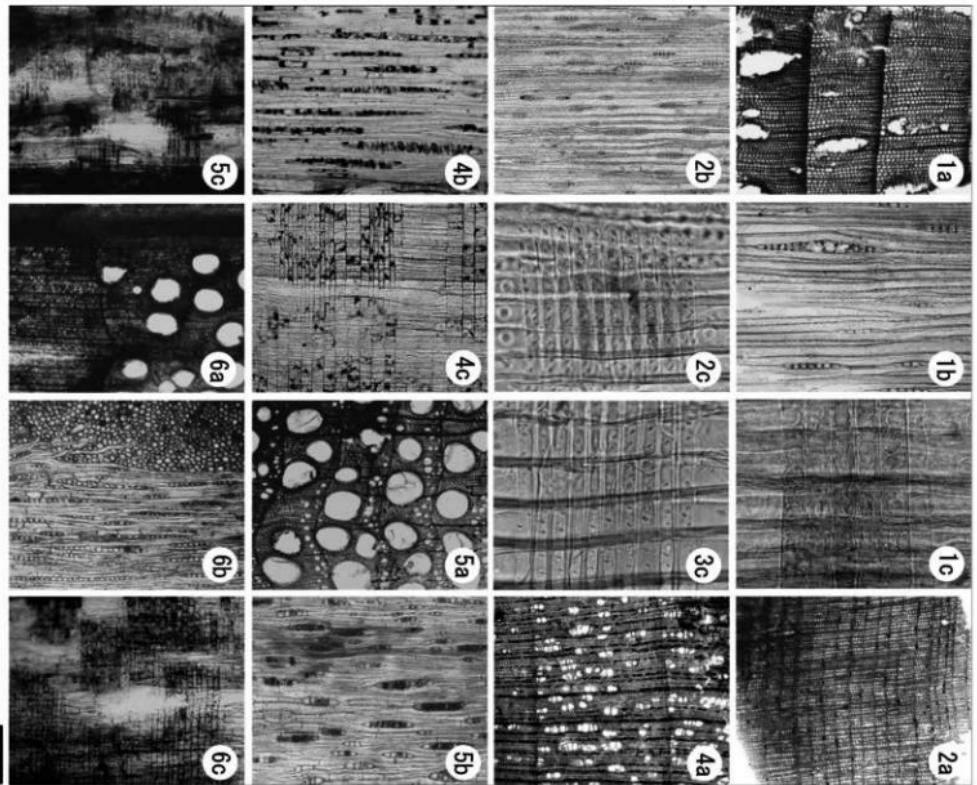
- 1 : スギ PLC.SS 4503 試料⑤  
 2 : ブナ PLC.SS 4508 試料②  
 3 : ウルシ属 PLC.SS 4502 試料⑤  
 4 : ハンノキ属 PLC.SS 4504 試料⑥

- 5 : コナラ属コナラ亞属 PLC.SS 4505 試料⑥  
 6 : コナラ属アカガシ亞属 PLC.SS 4506 試料②  
 7 : クリ属 PLC.SS 4507 試料②



与島日地点遺跡のプラント・オパール

- 1 : イネ (a : 断面、b : 側面) 試料④
- 2 : ウシクサ族 (a : 断面、b : 側面) 試料③
- 3、4 : クマザサ属型 (a : 断面、b : 側面) 試料③
- 5 : ヨシ属 (断面) 試料③
- 6 : キビ族 (側面) 試料③

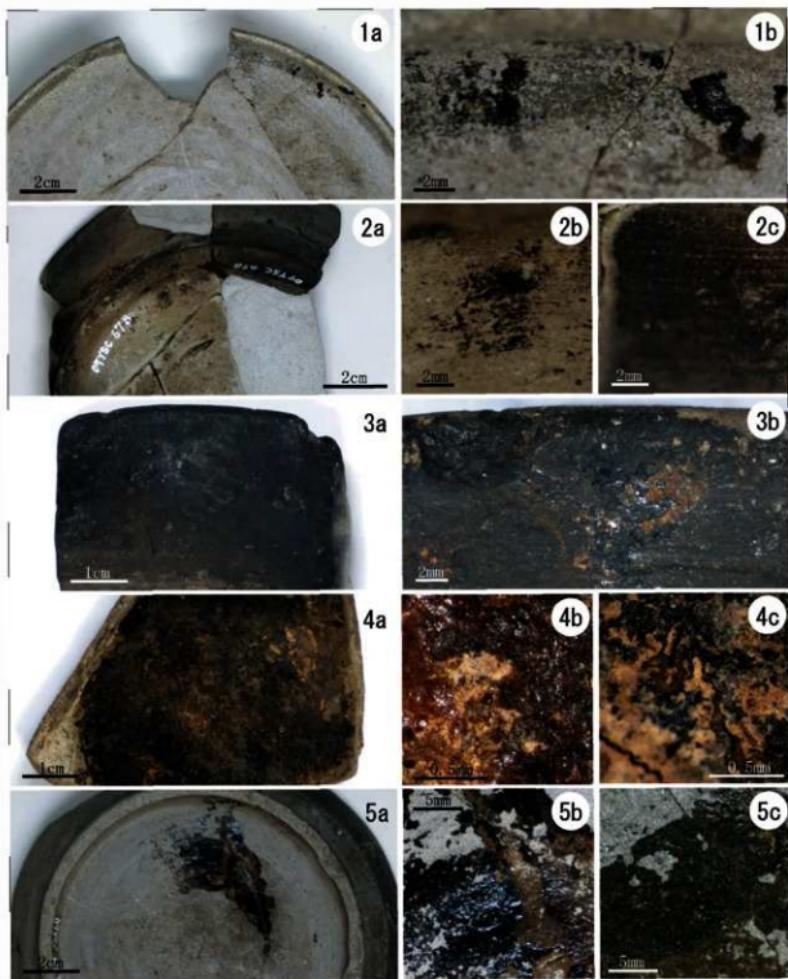


与島C地点遺跡出土木器類の光学顕微鏡写真

1a-1c: マツ属椎管束亞属 (103)、2a-2c: ヒノキ (180)、3a: ヒノキ (102)、4a-4c: クマシテ属クマシテ  
筋 (194)、5a-5c: クリ (198)、6a-6c: コナラ属コナラ筋 (197)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接触断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=10-30:50 μm、4c-6c: 200  
μm)

図版16



赤外分光分析を行った試料と付着物の拡大写真

1a-1b. 摘み蓋(63, 口縁部内面) 2a-2c. 有台坏(77, b: 内面, c: 底部外面)

3a-3b. 有台坏(76, 口縁部内面) 4a-4c. 無台坏(126, b: 底部外面褐色光沢物, c: 底部内面黄色肥厚物)

5a-5c. 有台坏(84, b: 底部外面, c: 内面)

## 報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第125集

## 与島B地点遺跡・与島C地点遺跡

2013年3月25日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社 もとすいんさつ